

文献要旨（個票） 目次

国内文献要旨	75
【人口】	76
【経済・産業・開発】	78
【エネルギー・資源】	89
【食糧】	98
【国土】	99
【都市・建築・交通】	102
【技術】	113
【ライフスタイル】	122
【環境】	131
海外文献要旨	135
【人口】	136
【経済・産業・開発】	140
【エネルギー・資源】	142
【水】	154
【食糧】	160
【環境】	166

国内文献要旨

【人口】

報告書の名称	日本の世帯数の将来推計（都道府県別推計） - 2000（平成12）年～2025（平成37）年 -	
編纂者	国立社会保障・人口問題研究所 人口構造研究部	
公表日	2005（平成17）年8月推計	
予測対象期間	2025年	
予測項目	<p>世帯数</p> <p>推計結果</p> <p>1．一般世帯総数と平均世帯人員</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一般世帯総数は2025年までに44都道府県で減少に転じる。 ・平均世帯人員は全都道府県で減少し、2025年には東京で他に先駆けて2人未満となる。 <p>(1)一般世帯総数（都道府県別一般世帯数の推移は別表参照）</p> <p>全国 2015年ピーク</p> <p>都道府県別 2010 2015年 24道府県で減少 2015 2020年 34道府県で減少 2020 2025年 44都道府県（宮城・滋賀・沖縄を除く）で減少 2000 2025年 15道府県で減少</p> <p>(2)平均世帯総数</p> <p>2000年 2.21人（東京）～3.25人（山形） 2020年全都道府県で3人未満 2025年 1.98人（東京）～2.91人（山形）</p> <p>2．家族類型別世帯数及び割合</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族類型別の割合は2025年には全都道府県で単独世帯が最大となる。 <p>(1)家族類型別世帯数</p> <p>2000 2025年全都道府県で増加；単独世帯（世帯主：男、女）ひとり親と子から成る世帯（世帯主：男）</p> <p>2000 2025年 41都道府県で増加；夫婦のみの世帯</p> <p>2000 2025年 42都道府県で増加；ひとり親と子から成る世帯</p> <p>(2)一般世帯の家族類型別割合</p> <p>2000 2025年</p> <p>全都道府県で上昇；単独世帯（世帯主：男、女）夫婦のみの世帯、ひとり親と子から成る世帯（世帯主：男）の割合</p> <p>45都道府県で上昇；ひとり親と子から成る世帯（世帯主：女）</p> <p>全都道府県で低下；夫婦と子から成る世帯、その他の一般世帯</p> <p>最大割合の世帯 2000年 38道府県で夫婦と子から成る世帯 2025年全都道府県で単独世帯</p> <p>3．高齢世帯（世帯主が65歳以上の世帯）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢世帯は2025年にかけて全ての都道府県で増加し、埼玉・千葉では2倍を超える。 ・高齢世帯割合 2020年以降に全都道府県で30%を上回り、2025年には秋田等20県で40%を超える。 ・高齢世帯に占める後期高齢世帯の割合は、2025年には全都道府県で45%を超える。 ・高齢単独・夫婦のみ世帯の全世帯に占める割合は 2025年には全都道府県で20%を上回り、鹿児島等8道県で30%を超える。 <p>(1)高齢世帯総数</p> <p>2000 2025年</p> <p>高齢世帯総数 全都道府県で増加（埼玉・千葉では2倍を超える）</p> <p>高齢世帯が一般世帯に占める割合 全都道府県で上昇</p> <p>世帯主が75歳以上の世帯 全都道府県で増加</p> <p>(2)単独世帯並びに夫婦のみの世帯の一般世帯総数に占める割合</p> <p>単独世帯と夫婦のみの世帯では2000 2025年に全都道府県で上昇</p> <p>高齢の単独世帯と夫婦のみの世帯の合計が総世帯数占める割合は2000 2025年全都道府県で上昇</p> <p>推計方法と推計項目</p> <p>推計には世帯主率法（世帯数＝世帯主数＝人口×人口に占める世帯主数の割合）を用いた。「日本の世帯数の将来推計（全国推計）2003（平成15）年10月推計」を基礎とし、国勢調査による2000年までの世帯主率の動向を将来に延長した。</p> <p>推計項目は次のとおり。</p> <p>都道府県別世帯主の年齢5歳階級別一般世帯数及び割合。</p> <p>家族類型は「単独世帯主（世帯主：男）」「単独世帯主（世帯主：女）」「夫婦のみの世帯」「夫婦と子から成る世帯」「ひとり親と子から成る世帯（世帯主：男）」「ひとり親と子から成る世帯（世帯主：女）」「その他の一般世帯」の7類型である。</p>	

(別表) 都道府県別一般世帯数の推移

(1,000世帯)

	2000	2005	2010	2015	2020	2025
全 国	46 782	49 040	50 139	50 476	50 270	49 643
北海道	2 278	2 345	2 352	2 321	2 259	2 176
青 森	504	525	535	536	531	521
岩 手	475	491	497	495	489	481
宮 城	832	876	900	914	921	923
秋 田	388	397	395	386	374	360
山 形	376	384	384	378	369	360
福 島	686	711	722	722	716	706
茨 城	984	1 038	1 071	1 086	1 088	1 080
栃 木	666	704	727	739	743	741
群 馬	691	726	744	750	749	742
埼 玉	2 470	2 658	2 780	2 855	2 890	2 889
千 葉	2 164	2 301	2 380	2 421	2 432	2 416
東 京	5 371	5 712	5 907	6 012	6 051	6 038
神奈川	3 318	3 527	3 644	3 700	3 710	3 685
新 潟	792	818	826	822	810	794
富 山	356	370	375	373	369	362
石 川	407	420	424	423	419	411
福 井	258	268	271	271	269	265
山 梨	308	321	328	331	332	329
長 野	756	789	805	808	805	798
岐 阜	678	707	719	720	714	703
静 岡	1 279	1 343	1 376	1 384	1 377	1 357
愛 知	2 523	2 655	2 732	2 775	2 797	2 791
三 重	635	663	678	683	680	673
滋 賀	439	473	500	522	540	554
京 都	1 015	1 052	1 065	1 064	1 055	1 035
大 阪	3 455	3 573	3 604	3 580	3 510	3 401
兵 庫	2 035	2 147	2 208	2 233	2 234	2 214
奈 良	485	510	525	532	532	527
和歌山	380	390	391	385	376	363
鳥 取	200	208	211	211	210	208
島 根	257	262	263	260	254	248
岡 山	690	710	715	712	705	694
広 島	1 096	1 133	1 143	1 135	1 114	1 087
山 口	582	595	593	580	562	539
徳 島	288	296	298	296	291	285
香 川	364	375	378	375	369	361
愛 媛	565	581	583	576	563	546
高 知	319	330	332	329	322	314
福 岡	1 907	2 002	2 048	2 066	2 065	2 050
佐 賀	278	287	290	290	287	283
長 崎	543	556	554	544	527	507
熊 本	645	671	683	685	682	672
大 分	452	463	463	457	446	433
宮 崎	437	454	459	455	447	436
鹿児島	714	744	755	752	742	729
沖 縄	440	479	508	530	545	555

注) 四捨五入のため合計は必ずしも一致しない

【経済・産業・開発】

報告書の名称	構造改革と経済財政の中期展望 - 2004年度改訂																																																																																																																		
編纂者	経済財政諮問会議																																																																																																																		
公表日	平成17年(2005年)1月20日																																																																																																																		
予測対象期間	2012年																																																																																																																		
予測項目	マクロ経済及び財政																																																																																																																		
推計結果	<p>「基本(改革進展ケース)」<構造改革と財政収支改善努力を前提> 【マクロ経済の姿】 (%程度) [対GDP比、%程度] 兆円程度</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>2004年度</th> <th>2010年度</th> <th>2012年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>実質成長率</td> <td>(2.1)</td> <td>(1.6)</td> <td>(1.5)</td> </tr> <tr> <td>名目成長率</td> <td>(0.8)</td> <td>(3.9)</td> <td>(3.9)</td> </tr> <tr> <td>名目GDP</td> <td>505.1</td> <td>596.7</td> <td>645.2</td> </tr> <tr> <td>国民所得</td> <td>373.0</td> <td>435.7</td> <td>472.3</td> </tr> <tr> <td>物価上昇率</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td> (消費者物価)</td> <td>(0.2)</td> <td>(2.5)</td> <td>(2.7)</td> </tr> <tr> <td> (国内企業物価)</td> <td>(1.4)</td> <td>(1.9)</td> <td>(1.9)</td> </tr> <tr> <td> (GDPデフレーター*)</td> <td>(1.3)</td> <td>(2.3)</td> <td>(2.4)</td> </tr> <tr> <td>完全失業率</td> <td>(4.7)</td> <td>(3.4)</td> <td>(3.2)</td> </tr> <tr> <td>名目長期金利</td> <td>(1.6)</td> <td>(3.9)</td> <td>(4.6)</td> </tr> <tr> <td>貯蓄投資差額</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td> 一般政府</td> <td>[7.3]</td> <td>[4.5]</td> <td>[4.2]</td> </tr> <tr> <td> 民間</td> <td>[11.0]</td> <td>[9.3]</td> <td>[9.1]</td> </tr> <tr> <td> 海外</td> <td>[3.6]</td> <td>[4.8]</td> <td>[4.9]</td> </tr> </tbody> </table> <p>* GDPデフレーター: GDP物価変動指数。名目成長率からGDPデフレーターの変化を差し引くと実質成長率になる。</p> <p>【国と地方の財政の姿】 [対GDP比、%程度] 兆円程度</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>2004年度</th> <th>2010年度</th> <th>2012年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>貯蓄投資差額</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td> 国</td> <td>[6.3]</td> <td>[4.6]</td> <td>[4.9]</td> </tr> <tr> <td> 地方</td> <td>[0.4]</td> <td>[0.3]</td> <td>[0.8]</td> </tr> <tr> <td> 合計</td> <td>[6.7]</td> <td>[4.3]</td> <td>[4.0]</td> </tr> <tr> <td>基礎的財政収支</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td> 国</td> <td>[4.8]</td> <td>[1.8]</td> <td>[1.4]</td> </tr> <tr> <td> 地方</td> <td>[0.4]</td> <td>[1.0]</td> <td>[1.5]</td> </tr> <tr> <td> 合計</td> <td>[4.4]</td> <td>[0.9]</td> <td>[0.1]</td> </tr> <tr> <td>公債等残高</td> <td>693.5</td> <td>880.3</td> <td>947.7</td> </tr> <tr> <td> (名目GDP比)</td> <td>[137.3]</td> <td>[147.5]</td> <td>[146.9]</td> </tr> <tr> <td>一般政府支出規模</td> <td>184.4</td> <td>215.5</td> <td>237.8</td> </tr> <tr> <td> (名目GDP比)</td> <td>[36.5]</td> <td>[36.1]</td> <td>[36.9]</td> </tr> </tbody> </table> <p>(注) 1. 消費者物価は生鮮食料品を除く総合(全国)である。 2. 基礎的財政収支は国民経済計算(SNA)ベースの推計値であり、支出が翌年度に繰り越された場合には翌年度に計上される。また、国・地方とも一般会計(普通会計)以外に一部の特別会計等を含む概念であることに留意が必要である。 3. 交付税及び譲与税配付特別会計(以下、交付税特会という。)の借入・返済は、地方負担分も含め国に計上している。 4. 公債等残高は、普通国債、地方債及び交付税特会借入金の合計である。長期債務としては、この他に、特会借入金などがある。 5. 一般政府支出規模は、翌年度への繰越を考慮していない数値である。なお、2002年度(平成14年度)当初予算ベースのGDP(予算編成当時の政府経済見通し)に対する比率は37.6%程度である。</p>				2004年度	2010年度	2012年度	実質成長率	(2.1)	(1.6)	(1.5)	名目成長率	(0.8)	(3.9)	(3.9)	名目GDP	505.1	596.7	645.2	国民所得	373.0	435.7	472.3	物価上昇率				(消費者物価)	(0.2)	(2.5)	(2.7)	(国内企業物価)	(1.4)	(1.9)	(1.9)	(GDPデフレーター*)	(1.3)	(2.3)	(2.4)	完全失業率	(4.7)	(3.4)	(3.2)	名目長期金利	(1.6)	(3.9)	(4.6)	貯蓄投資差額				一般政府	[7.3]	[4.5]	[4.2]	民間	[11.0]	[9.3]	[9.1]	海外	[3.6]	[4.8]	[4.9]		2004年度	2010年度	2012年度	貯蓄投資差額				国	[6.3]	[4.6]	[4.9]	地方	[0.4]	[0.3]	[0.8]	合計	[6.7]	[4.3]	[4.0]	基礎的財政収支				国	[4.8]	[1.8]	[1.4]	地方	[0.4]	[1.0]	[1.5]	合計	[4.4]	[0.9]	[0.1]	公債等残高	693.5	880.3	947.7	(名目GDP比)	[137.3]	[147.5]	[146.9]	一般政府支出規模	184.4	215.5	237.8	(名目GDP比)	[36.5]	[36.1]	[36.9]
	2004年度	2010年度	2012年度																																																																																																																
実質成長率	(2.1)	(1.6)	(1.5)																																																																																																																
名目成長率	(0.8)	(3.9)	(3.9)																																																																																																																
名目GDP	505.1	596.7	645.2																																																																																																																
国民所得	373.0	435.7	472.3																																																																																																																
物価上昇率																																																																																																																			
(消費者物価)	(0.2)	(2.5)	(2.7)																																																																																																																
(国内企業物価)	(1.4)	(1.9)	(1.9)																																																																																																																
(GDPデフレーター*)	(1.3)	(2.3)	(2.4)																																																																																																																
完全失業率	(4.7)	(3.4)	(3.2)																																																																																																																
名目長期金利	(1.6)	(3.9)	(4.6)																																																																																																																
貯蓄投資差額																																																																																																																			
一般政府	[7.3]	[4.5]	[4.2]																																																																																																																
民間	[11.0]	[9.3]	[9.1]																																																																																																																
海外	[3.6]	[4.8]	[4.9]																																																																																																																
	2004年度	2010年度	2012年度																																																																																																																
貯蓄投資差額																																																																																																																			
国	[6.3]	[4.6]	[4.9]																																																																																																																
地方	[0.4]	[0.3]	[0.8]																																																																																																																
合計	[6.7]	[4.3]	[4.0]																																																																																																																
基礎的財政収支																																																																																																																			
国	[4.8]	[1.8]	[1.4]																																																																																																																
地方	[0.4]	[1.0]	[1.5]																																																																																																																
合計	[4.4]	[0.9]	[0.1]																																																																																																																
公債等残高	693.5	880.3	947.7																																																																																																																
(名目GDP比)	[137.3]	[147.5]	[146.9]																																																																																																																
一般政府支出規模	184.4	215.5	237.8																																																																																																																
(名目GDP比)	[36.5]	[36.1]	[36.9]																																																																																																																
推計方法	<p>計量モデル(「経済財政モデル(第一次改訂版)」)による試算である。 主な前提条件は次のとおり。 (1) マクロ経済に関するもの 人口・労働力: 日本の将来人口推計(平成14年1月推計) 全要素生産性(TFP)の向上: 1990年以降の平均+0.2%へ徐々に回復 世界経済等: 経済成長率は3.5%程度。物価上昇率は2.2%程度。原油価格は2006~2009年度は2.8%、それ以降は一定。為替レートは実質で一定。 2004・2005年度の成長率・物価上昇率等: 「平成17年度の経済見通しと経済財政運営の基本的態度(平成16年12月20日閣議了解)」による。 (2) 財政・社旗保障に関するもの 社会保障関係費(年金、医療・介護) 投資的経費、人件費(公務員) その他一般歳出、税制、三位一体の改革</p>																																																																																																																		

国内#2

【経済・産業・開発】

報告書の名称	経済財政展望ワーキング・グループ報告書 - 活力ある安定社会の実現に向けて -																																																																																																																						
編纂者	経済財政展望ワーキング・グループ																																																																																																																						
公表日	平成 17(2005)年 4 月																																																																																																																						
予測対象期間	2030 年																																																																																																																						
予測項目	経済財政																																																																																																																						
推計結果	<p>供給面：労働生産性上昇による成長の維持（年率）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実質成長率 2006-2012 年度 1%台半ば 2021-2030 年度 1%台半ばの伸び ・名目成長率 2006-2012 年度 3%台 2021-2030 年度 3%台半ば～4%程度 ・労働生産性 2006-2012 年度 2%弱 2021-2030 年度 2%強 ・資本整備率 2006-2012 年度 3%程度 2021-2030 年度 4%強 <p>需要面：新しい消費需要と投資の拡大（年率）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国内総支出 2006-2012 年度 1%台半ば 2021-2030 年度 1%台半ば <p>一人当たりでみた姿：高い生活水準を維持</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人当たり実質 GDP の伸び率 2006-2012 年度 1%台半ば 2021-2030 年度 2%程度 ・一人当たり実質消費の伸び率 2006-2012 年度 1%台半ば 2021-2030 年度 2%程度 <p>貯蓄投資バランス：グローバルな投資立国へ（名目 GDP 比）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・経常収支 2005 年度 4%程度 2030 年度 1%弱～2%弱 ・家計貯蓄率 2005 年度 6%強 2030 年度 2%程度～3%程度 <p>現行制度を前提とした社会保障の給付と負担の見通し（GDP 比）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会保障給付費 2005 年度 15.4% 2030 年度 20.5% ・社会保障負担 2005 年度 14.3% 2030 年度 21.5% <p>経済成長率の展望（年率%）</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2"></th> <th rowspan="2">2006-2012 年度</th> <th colspan="2">2013-2020 年度</th> <th colspan="2">2021-2030 年度</th> </tr> <tr> <th>A</th> <th>B</th> <th>A</th> <th>B</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>実質成長率</td> <td>1 台半ば</td> <td colspan="2">2 程度</td> <td colspan="2">1 台半ば</td> </tr> <tr> <td>名目成長率</td> <td>3 台半ば</td> <td>4 強</td> <td>4 台半ば</td> <td>3 台半ば</td> <td>4 程度</td> </tr> </tbody> </table> <p style="text-align: center;">A：歳出抑制ケース、B：歳出維持・国民負担増ケース</p> <p>労働生産性及び資本整備率の伸びの展望（年率%）</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>2006-2012 年度</th> <th>2013-2020 年度</th> <th>2021-2030 年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>労働生産性</td> <td>2 弱</td> <td>2 程度</td> <td>2 強</td> </tr> <tr> <td>資本整備率の寄与</td> <td>1 程度</td> <td>1 強</td> <td>1 代半ば</td> </tr> <tr> <td>全要素生産性の寄与</td> <td>1 弱</td> <td>1 弱</td> <td>1 弱</td> </tr> <tr> <td>資本整備率</td> <td>3 程度</td> <td>4 程度</td> <td>4 強</td> </tr> <tr> <td>資本投入量</td> <td>3 弱</td> <td>3 台半ば</td> <td>4 弱</td> </tr> <tr> <td>労働投入量</td> <td>0 強</td> <td>0 強</td> <td>0 台半ば</td> </tr> </tbody> </table> <p>実質国内総支出（需要項目別）の伸びの展望（年率%、[]は寄与度）</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2"></th> <th rowspan="2">2006-2012 年度</th> <th colspan="2">2013-2020 年度</th> <th colspan="2">2021-2030 年度</th> </tr> <tr> <th>A</th> <th>B</th> <th>A</th> <th>B</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>国内総支出</td> <td>1 台半ば</td> <td>2 程度</td> <td>2 程度</td> <td>1 代半ば</td> <td>1 代半ば</td> </tr> <tr> <td>民間最終消費支出</td> <td>1 強</td> <td>2 台半ば</td> <td>2 強</td> <td>1 代半ば</td> <td>1 台半ば</td> </tr> <tr> <td>民間住宅</td> <td>3 程度</td> <td>1 半ば</td> <td>1 強</td> <td>1 強</td> <td>2 台半ば</td> </tr> <tr> <td>民間企業設備</td> <td>3 弱</td> <td>3 弱</td> <td>2 台半ば</td> <td>3 弱</td> <td>2 台半ば</td> </tr> <tr> <td>政府最終消費支出</td> <td>1 台半ば</td> <td>2 弱</td> <td>3 程度</td> <td>1 程度</td> <td>2 弱</td> </tr> <tr> <td>公的固定資本形成</td> <td>6 弱</td> <td>1 程度</td> <td>2 弱</td> <td>1 程度</td> <td>2 弱</td> </tr> <tr> <td>財貨・サービスの純輸出</td> <td>[0 程度]</td> <td>[0 強]</td> <td>[0 強]</td> <td>[0 程度]</td> <td>[0 強]</td> </tr> <tr> <td>輸出</td> <td>4 強</td> <td>2 程度</td> <td>2 強</td> <td>3 弱</td> <td>2 程度</td> </tr> <tr> <td>輸入</td> <td>5 程度</td> <td>4 台半ば</td> <td>5 弱</td> <td>3 強</td> <td>3 台半ば</td> </tr> </tbody> </table>						2006-2012 年度	2013-2020 年度		2021-2030 年度		A	B	A	B	実質成長率	1 台半ば	2 程度		1 台半ば		名目成長率	3 台半ば	4 強	4 台半ば	3 台半ば	4 程度		2006-2012 年度	2013-2020 年度	2021-2030 年度	労働生産性	2 弱	2 程度	2 強	資本整備率の寄与	1 程度	1 強	1 代半ば	全要素生産性の寄与	1 弱	1 弱	1 弱	資本整備率	3 程度	4 程度	4 強	資本投入量	3 弱	3 台半ば	4 弱	労働投入量	0 強	0 強	0 台半ば		2006-2012 年度	2013-2020 年度		2021-2030 年度		A	B	A	B	国内総支出	1 台半ば	2 程度	2 程度	1 代半ば	1 代半ば	民間最終消費支出	1 強	2 台半ば	2 強	1 代半ば	1 台半ば	民間住宅	3 程度	1 半ば	1 強	1 強	2 台半ば	民間企業設備	3 弱	3 弱	2 台半ば	3 弱	2 台半ば	政府最終消費支出	1 台半ば	2 弱	3 程度	1 程度	2 弱	公的固定資本形成	6 弱	1 程度	2 弱	1 程度	2 弱	財貨・サービスの純輸出	[0 程度]	[0 強]	[0 強]	[0 程度]	[0 強]	輸出	4 強	2 程度	2 強	3 弱	2 程度	輸入	5 程度	4 台半ば	5 弱	3 強	3 台半ば
	2006-2012 年度	2013-2020 年度		2021-2030 年度																																																																																																																			
		A	B	A	B																																																																																																																		
実質成長率	1 台半ば	2 程度		1 台半ば																																																																																																																			
名目成長率	3 台半ば	4 強	4 台半ば	3 台半ば	4 程度																																																																																																																		
	2006-2012 年度	2013-2020 年度	2021-2030 年度																																																																																																																				
労働生産性	2 弱	2 程度	2 強																																																																																																																				
資本整備率の寄与	1 程度	1 強	1 代半ば																																																																																																																				
全要素生産性の寄与	1 弱	1 弱	1 弱																																																																																																																				
資本整備率	3 程度	4 程度	4 強																																																																																																																				
資本投入量	3 弱	3 台半ば	4 弱																																																																																																																				
労働投入量	0 強	0 強	0 台半ば																																																																																																																				
	2006-2012 年度	2013-2020 年度		2021-2030 年度																																																																																																																			
		A	B	A	B																																																																																																																		
国内総支出	1 台半ば	2 程度	2 程度	1 代半ば	1 代半ば																																																																																																																		
民間最終消費支出	1 強	2 台半ば	2 強	1 代半ば	1 台半ば																																																																																																																		
民間住宅	3 程度	1 半ば	1 強	1 強	2 台半ば																																																																																																																		
民間企業設備	3 弱	3 弱	2 台半ば	3 弱	2 台半ば																																																																																																																		
政府最終消費支出	1 台半ば	2 弱	3 程度	1 程度	2 弱																																																																																																																		
公的固定資本形成	6 弱	1 程度	2 弱	1 程度	2 弱																																																																																																																		
財貨・サービスの純輸出	[0 程度]	[0 強]	[0 強]	[0 程度]	[0 強]																																																																																																																		
輸出	4 強	2 程度	2 強	3 弱	2 程度																																																																																																																		
輸入	5 程度	4 台半ば	5 弱	3 強	3 台半ば																																																																																																																		
推計方法	<p>日本経済中長期展望モデルによるシミュレーション推計。前提条件は次のとおり。</p> <p>「改革と展望」参考試算で示された歳出削減を通じて、2010 年代初頭において国・地方合わせた基礎的財政収支の黒字化が達成されたとした場合の一つの発射台として、その後の財政運営の姿について、次の 2 ケースを選択肢(例)として試算。また、参考として、「改革と展望」の参考試算によらず、2007 年度以降、歳出改革が行われない場合についても試算し提示。これら 3 つのケースにおいては、2013 年度以降、長期金利 = 名目成長率、TFP 上昇率 = 年率 0.7%程度を想定。</p> <p>【歳出抑制ケース】2013 年度以降、利払いを除く歳出規模を、経済規模に対して一定に保つように削減し、基礎的財政収支の黒字を安定的に維持する場合。</p> <p>【歳出維持・国民負担増ケース】歳出抑制ケースと同程度の基礎的財政収支黒字を維持することを前提とした上で、国民負担を求めつつ、歳出面で 2010 年代初頭の行政サービス水準を維持する場合。（参考）【財政放置ケース】「改革と展望」の参考試算に抛らず、2007 年度以降、歳出改革が行われない場合。</p>																																																																																																																						

【経済・産業・開発】

報告書の名称	競争力ワーキング・グループ報告書 - 文化創造・技の伝承・人間力の育成による競争力の拡大再生産 -																																																																																		
編纂者	競争力ワーキング・グループ																																																																																		
公表日	平成 17(2005)年 4 月																																																																																		
予測対象期間	2030 年																																																																																		
予測項目																																																																																			
産業構造	推計結果	<p>【基本戦略】</p> <p>日本の持つ「4つの潜在的な資源」を積極的に活用。多様な能力が開花する「全員参加型」の競争力ある社会を目指す。 伝統資源の活用、 眠っている資源の活用、 海外資源の活用、 個の資源の活用</p> <p>【生活・文化創造産業の現状と展望】</p> <table border="0"> <tr> <td>[現状]</td> <td>[2030年]</td> </tr> <tr> <td>・コンテンツ市場 12兆円 (GDP比 2%)</td> <td>コンテンツ市場の規模は</td> </tr> <tr> <td>うちソフト(アニメ、映画、音楽、ゲーム) 2兆円</td> <td>アメリカなみの GDP比 5%へ</td> </tr> <tr> <td>媒体等(放送、通信、刊行物) 10兆円</td> <td></td> </tr> <tr> <td>・ファッション市場(衣服製造) 4兆円</td> <td>主要国先進地域並みへ</td> </tr> <tr> <td>衣料品輸出は GDP比 0.01%とイタリアの 1/25</td> <td>GDP比 イギリス 0.3%</td> </tr> <tr> <td></td> <td>フランス 0.6%</td> </tr> <tr> <td>・食市場(外食、食品製造) 59兆円</td> <td>アジアを含め幅広い国へ浸透</td> </tr> <tr> <td>日本食は、健康・安全と海外の評判高い</td> <td></td> </tr> <tr> <td>・伝統的手工業(繊維、織物、家具、木工等)</td> <td>日本の生活スタイルの一部が</td> </tr> <tr> <td>家具、和紙の照明、織物などの一部が</td> <td>海外でも定着</td> </tr> <tr> <td>国際的に高い評価を得る</td> <td></td> </tr> <tr> <td>・日本への留学生は 11万人と、アメリカの 1/5</td> <td>世界から優秀な学生が日本に集まる</td> </tr> </table> <p style="text-align: center;">日本人的文化・生活スタイルがブランドとして確立される。</p> <p>(注) コンテンツにはソフト(アニメ、映画、音楽、ゲームなど)、媒体(放送、通信、刊行物等)が含まれる。ファッションには、衣類製造業が含まれる。食には、食品製造業、外食産業(給食・弁当・料理品小売業)が含まれる。</p> <p>【2030年における産業構造の展望(試算)】</p> <p>1. 日本及び世界の主要国の・地域の産業別 GDP の動向</p> <ul style="list-style-type: none"> 世界的にはアジアの製造業の伸びが高いが、日本製造業も高い生産性の伸びに支えられて増加 <table border="0"> <tr> <td></td> <td>日本</td> <td>アメリカ</td> <td>EU</td> <td>アジア</td> </tr> <tr> <td>製造業</td> <td>0.8</td> <td>2.7</td> <td>0.9</td> <td>6.1</td> </tr> <tr> <td>非製造業</td> <td>1.5</td> <td>3.1</td> <td>1.9</td> <td>5.8</td> </tr> </table> <ul style="list-style-type: none"> (参考) 日本の製造業の生産性が低い伸びにとどまった場合(製造業の TFP の伸び 2.6 1.2%) <table border="0"> <tr> <td></td> <td>日本の製造業の TFP2.6%を想定</td> <td>日本の製造業の TFP の伸び 1.2%を想定</td> </tr> <tr> <td>日本</td> <td>0.8</td> <td>-0.1</td> </tr> <tr> <td>アメリカ</td> <td>2.7</td> <td>2.7</td> </tr> <tr> <td>EU</td> <td>0.9</td> <td>0.9</td> </tr> <tr> <td>アジア</td> <td>6.1</td> <td>6.2</td> </tr> </table> <p>2. 日本の産業別 GDP シェア、雇用シェアの変化</p> <ul style="list-style-type: none"> 経済のサービス化が進展するが、生産性の差を反映して雇用サービス化が大きい <table border="0"> <tr> <td>産業別 GDP シェアの変化(%)</td> <td>1970年</td> <td>2000年</td> <td>2030年</td> </tr> <tr> <td>製造業</td> <td>27.8</td> <td>23.6</td> <td>20.0</td> </tr> <tr> <td>非製造業</td> <td>72.2</td> <td>76.4</td> <td>80.0</td> </tr> <tr> <td>産業別雇用シェアの変化(労働所得ベース)(%)</td> <td>1970年</td> <td>2000年</td> <td>2030年</td> </tr> <tr> <td>製造業</td> <td>34.0</td> <td>20.4</td> <td>8.7</td> </tr> <tr> <td>非製造業</td> <td>66.0</td> <td>79.6</td> <td>91.3</td> </tr> </table> <p>(注) 1. 1970年、2000年は国民経済計算の実績値。 2. 2030年雇用シェアは各部門に支払われた労働所得でみたもの。 3. 産業別シェアには、鉱業、農林水産業を含まない。</p>		[現状]	[2030年]	・コンテンツ市場 12兆円 (GDP比 2%)	コンテンツ市場の規模は	うちソフト(アニメ、映画、音楽、ゲーム) 2兆円	アメリカなみの GDP比 5%へ	媒体等(放送、通信、刊行物) 10兆円		・ファッション市場(衣服製造) 4兆円	主要国先進地域並みへ	衣料品輸出は GDP比 0.01%とイタリアの 1/25	GDP比 イギリス 0.3%		フランス 0.6%	・食市場(外食、食品製造) 59兆円	アジアを含め幅広い国へ浸透	日本食は、健康・安全と海外の評判高い		・伝統的手工業(繊維、織物、家具、木工等)	日本の生活スタイルの一部が	家具、和紙の照明、織物などの一部が	海外でも定着	国際的に高い評価を得る		・日本への留学生は 11万人と、アメリカの 1/5	世界から優秀な学生が日本に集まる		日本	アメリカ	EU	アジア	製造業	0.8	2.7	0.9	6.1	非製造業	1.5	3.1	1.9	5.8		日本の製造業の TFP2.6%を想定	日本の製造業の TFP の伸び 1.2%を想定	日本	0.8	-0.1	アメリカ	2.7	2.7	EU	0.9	0.9	アジア	6.1	6.2	産業別 GDP シェアの変化(%)	1970年	2000年	2030年	製造業	27.8	23.6	20.0	非製造業	72.2	76.4	80.0	産業別雇用シェアの変化(労働所得ベース)(%)	1970年	2000年	2030年	製造業	34.0	20.4	8.7	非製造業	66.0	79.6	91.3
[現状]	[2030年]																																																																																		
・コンテンツ市場 12兆円 (GDP比 2%)	コンテンツ市場の規模は																																																																																		
うちソフト(アニメ、映画、音楽、ゲーム) 2兆円	アメリカなみの GDP比 5%へ																																																																																		
媒体等(放送、通信、刊行物) 10兆円																																																																																			
・ファッション市場(衣服製造) 4兆円	主要国先進地域並みへ																																																																																		
衣料品輸出は GDP比 0.01%とイタリアの 1/25	GDP比 イギリス 0.3%																																																																																		
	フランス 0.6%																																																																																		
・食市場(外食、食品製造) 59兆円	アジアを含め幅広い国へ浸透																																																																																		
日本食は、健康・安全と海外の評判高い																																																																																			
・伝統的手工業(繊維、織物、家具、木工等)	日本の生活スタイルの一部が																																																																																		
家具、和紙の照明、織物などの一部が	海外でも定着																																																																																		
国際的に高い評価を得る																																																																																			
・日本への留学生は 11万人と、アメリカの 1/5	世界から優秀な学生が日本に集まる																																																																																		
	日本	アメリカ	EU	アジア																																																																															
製造業	0.8	2.7	0.9	6.1																																																																															
非製造業	1.5	3.1	1.9	5.8																																																																															
	日本の製造業の TFP2.6%を想定	日本の製造業の TFP の伸び 1.2%を想定																																																																																	
日本	0.8	-0.1																																																																																	
アメリカ	2.7	2.7																																																																																	
EU	0.9	0.9																																																																																	
アジア	6.1	6.2																																																																																	
産業別 GDP シェアの変化(%)	1970年	2000年	2030年																																																																																
製造業	27.8	23.6	20.0																																																																																
非製造業	72.2	76.4	80.0																																																																																
産業別雇用シェアの変化(労働所得ベース)(%)	1970年	2000年	2030年																																																																																
製造業	34.0	20.4	8.7																																																																																
非製造業	66.0	79.6	91.3																																																																																
	推計方法	<p>【2030年における産業構造の展望(試算)】の試算方法</p> <p>応用一般均衡モデル GTAP を用い、2000年から 2030年までの労働・資本・生産性の変化が産業構造に与える影響を試算。</p> <p>アメリカ、EU、他のアジア諸国についても 2030年までの労働・資本投入・生産性の伸びを仮定。各地域間は貿易によりリンクされているが、労働移動はない。</p> <p>日本経済についての主要な前提</p> <p>労働投入は 2000年から 2030年の間に年平均 0.3%減少 資本投入は 2000年から 2030年の間に年平均 2.8%増加 全要素生産性(TFP) は製造業 2.6%、非製造業 0.0%を想定</p>																																																																																	

【経済・産業・開発】

報告書の名称	グローバル化ワーキング・グループ報告書 - 壁のない、存在感のある日本へ -																																																																																																																																																																			
編纂者	グローバル化ワーキング・グループ																																																																																																																																																																			
公表日	平成 17(2005)年 4 月																																																																																																																																																																			
予測対象期間	2030 年																																																																																																																																																																			
予測項目	世界経済																																																																																																																																																																			
推計結果	<p>【2030 年に向けてのより良いシナリオ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グローバル化への適応に成功し、日本の経済が持続する ・世界的諸課題の解決において、日本が責任ある貢献を果たす <p>【2030 年の世界経済（2 つのケース）】</p> <p>1．過去トレンド延長ケース：過去 10 年間のトレンドを機械的に延長したケース 主要国の長期的成長率と名目 GDP の推移</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中国は 2014 年に日本を追い抜く ・インドは 2030 年頃には日本にほぼ肩を並べる <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>2004 年 GDP (兆 ドル)</th> <th>シェア (%)</th> <th>実質成長 率 (%)</th> <th>実質為替 レート変 化率 (%)</th> <th>2030 年 GDP (兆 ドル程 度)</th> <th>シェア (% 程 度)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>世界</td> <td>30.0</td> <td>100.0</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>117</td> <td>100</td> </tr> <tr> <td>米国</td> <td>11.7</td> <td>39.2</td> <td>3.3</td> <td>-</td> <td>44</td> <td>37</td> </tr> <tr> <td>ユーロ圏 (12 カ国)</td> <td>9.4</td> <td>31.3</td> <td>2.0</td> <td>0.4</td> <td>28</td> <td>24</td> </tr> <tr> <td>日本</td> <td>4.7</td> <td>15.6</td> <td>1.2</td> <td>3.3</td> <td>4</td> <td>4</td> </tr> <tr> <td>中国</td> <td>1.6</td> <td>5.5</td> <td>8.6</td> <td>1.0</td> <td>30</td> <td>25</td> </tr> <tr> <td>韓国</td> <td>0.7</td> <td>2.3</td> <td>4.9</td> <td>1.9</td> <td>2</td> <td>2</td> </tr> <tr> <td>インド</td> <td>0.6</td> <td>2.1</td> <td>6.1</td> <td>0.3</td> <td>4</td> <td>4</td> </tr> <tr> <td>ブラジル</td> <td>0.6</td> <td>2.1</td> <td>2.4</td> <td>2.5</td> <td>1</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>ロシア</td> <td>0.6</td> <td>1.9</td> <td>3.6</td> <td>1.6</td> <td>3</td> <td>3</td> </tr> </tbody> </table> <p>実質 GDP 成長率、実質為替レート変化率は 2005～2030 年の平均。世界は上記 8 カ国・地域の合計。 主要国の一人当たり名目 GDP の推移 2004 年 (千ドル) 2030 年 (千ドル程度)</p> <table border="1"> <tbody> <tr> <td>米国</td> <td>39.7</td> <td>121</td> </tr> <tr> <td>日本</td> <td>36.5</td> <td>35</td> </tr> <tr> <td>中国</td> <td>1.3</td> <td>21</td> </tr> </tbody> </table> <p>2．将来推計ケース：各種仮定に基づき将来推計を行うケース 主要国の長期的成長率と名目 GDP の推移</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中国は 2016 年頃日本を追い抜く <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>2004 年 GDP (兆 ドル)</th> <th>シェア (%)</th> <th>実質成長率 (%)</th> <th>実質為 替レ ート 変 化 率 (%)</th> <th>2030 年 GDP (兆 ドル程 度)</th> <th>シェア (% 程 度)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>世界</td> <td>30.0</td> <td>100.0</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>116</td> <td>100</td> </tr> <tr> <td>米国</td> <td>11.7</td> <td>39.2</td> <td>3.0</td> <td>-</td> <td>37</td> <td>32</td> </tr> <tr> <td>ユーロ圏 (12 カ国)</td> <td>9.4</td> <td>31.3</td> <td>1.8</td> <td>-</td> <td>21</td> <td>18</td> </tr> <tr> <td>日本</td> <td>4.7</td> <td>15.6</td> <td>1%台半ば</td> <td>-</td> <td>10</td> <td>9</td> </tr> <tr> <td>中国</td> <td>1.6</td> <td>5.5</td> <td>6.8</td> <td>3.9</td> <td>36</td> <td>31</td> </tr> <tr> <td>韓国</td> <td>0.7</td> <td>2.3</td> <td>4.0</td> <td>-</td> <td>3</td> <td>2</td> </tr> <tr> <td>インド</td> <td>0.6</td> <td>2.1</td> <td>4.0</td> <td>0.6</td> <td>3</td> <td>2</td> </tr> <tr> <td>ブラジル</td> <td>0.6</td> <td>2.1</td> <td>3.6</td> <td>0.4</td> <td>3</td> <td>2</td> </tr> <tr> <td>ロシア</td> <td>0.6</td> <td>1.9</td> <td>3.6</td> <td>1.8</td> <td>3</td> <td>3</td> </tr> </tbody> </table> <p>実質 GDP 成長率、実質為替レート変化率は 2005～2030 年の平均。世界は上記 8 カ国・地域の合計。 日本は経済財政展望 WG ケース 主要国の一人当たり名目 GDP の推移 2004 年 (千ドル) 2030 年 (千ドル程度)</p> <table border="1"> <tbody> <tr> <td>米国</td> <td>39.7</td> <td>102</td> </tr> <tr> <td>日本</td> <td>36.5</td> <td>83</td> </tr> <tr> <td>中国</td> <td>1.3</td> <td>25</td> </tr> </tbody> </table>							2004 年 GDP (兆 ドル)	シェア (%)	実質成長 率 (%)	実質為替 レート変 化率 (%)	2030 年 GDP (兆 ドル程 度)	シェア (% 程 度)	世界	30.0	100.0	-	-	117	100	米国	11.7	39.2	3.3	-	44	37	ユーロ圏 (12 カ国)	9.4	31.3	2.0	0.4	28	24	日本	4.7	15.6	1.2	3.3	4	4	中国	1.6	5.5	8.6	1.0	30	25	韓国	0.7	2.3	4.9	1.9	2	2	インド	0.6	2.1	6.1	0.3	4	4	ブラジル	0.6	2.1	2.4	2.5	1	1	ロシア	0.6	1.9	3.6	1.6	3	3	米国	39.7	121	日本	36.5	35	中国	1.3	21		2004 年 GDP (兆 ドル)	シェア (%)	実質成長率 (%)	実質為 替レ ート 変 化 率 (%)	2030 年 GDP (兆 ドル程 度)	シェア (% 程 度)	世界	30.0	100.0	-	-	116	100	米国	11.7	39.2	3.0	-	37	32	ユーロ圏 (12 カ国)	9.4	31.3	1.8	-	21	18	日本	4.7	15.6	1%台半ば	-	10	9	中国	1.6	5.5	6.8	3.9	36	31	韓国	0.7	2.3	4.0	-	3	2	インド	0.6	2.1	4.0	0.6	3	2	ブラジル	0.6	2.1	3.6	0.4	3	2	ロシア	0.6	1.9	3.6	1.8	3	3	米国	39.7	102	日本	36.5	83	中国	1.3	25
	2004 年 GDP (兆 ドル)	シェア (%)	実質成長 率 (%)	実質為替 レート変 化率 (%)	2030 年 GDP (兆 ドル程 度)	シェア (% 程 度)																																																																																																																																																														
世界	30.0	100.0	-	-	117	100																																																																																																																																																														
米国	11.7	39.2	3.3	-	44	37																																																																																																																																																														
ユーロ圏 (12 カ国)	9.4	31.3	2.0	0.4	28	24																																																																																																																																																														
日本	4.7	15.6	1.2	3.3	4	4																																																																																																																																																														
中国	1.6	5.5	8.6	1.0	30	25																																																																																																																																																														
韓国	0.7	2.3	4.9	1.9	2	2																																																																																																																																																														
インド	0.6	2.1	6.1	0.3	4	4																																																																																																																																																														
ブラジル	0.6	2.1	2.4	2.5	1	1																																																																																																																																																														
ロシア	0.6	1.9	3.6	1.6	3	3																																																																																																																																																														
米国	39.7	121																																																																																																																																																																		
日本	36.5	35																																																																																																																																																																		
中国	1.3	21																																																																																																																																																																		
	2004 年 GDP (兆 ドル)	シェア (%)	実質成長率 (%)	実質為 替レ ート 変 化 率 (%)	2030 年 GDP (兆 ドル程 度)	シェア (% 程 度)																																																																																																																																																														
世界	30.0	100.0	-	-	116	100																																																																																																																																																														
米国	11.7	39.2	3.0	-	37	32																																																																																																																																																														
ユーロ圏 (12 カ国)	9.4	31.3	1.8	-	21	18																																																																																																																																																														
日本	4.7	15.6	1%台半ば	-	10	9																																																																																																																																																														
中国	1.6	5.5	6.8	3.9	36	31																																																																																																																																																														
韓国	0.7	2.3	4.0	-	3	2																																																																																																																																																														
インド	0.6	2.1	4.0	0.6	3	2																																																																																																																																																														
ブラジル	0.6	2.1	3.6	0.4	3	2																																																																																																																																																														
ロシア	0.6	1.9	3.6	1.8	3	3																																																																																																																																																														
米国	39.7	102																																																																																																																																																																		
日本	36.5	83																																																																																																																																																																		
中国	1.3	25																																																																																																																																																																		
推計方法	<p>1．過去トレンド延長ケース：世界銀行、国際通貨基金、国連、アジア開発銀行、各国統計より作成。ユーロ圏は 2005 年 3 月時点のユーロ導入国。2030 年の GDP は各国の 1995 年から 2004 年までの実質 GDP 成長率、GDP デフレータ上昇率、対ドル名目為替変化率を計算し、これが 2030 年まで続くとして仮定。</p> <p>2．将来推計ケース：準拠した統計資料やユーロ圏の定義はトレンド延長ケースと同じ。これに世界銀行、法専・野上、財務総合政策研究所の各推計値を利用。</p>																																																																																																																																																																			

【経済・産業・開発】

報告書の名称	環境と経済の好循環ビジョン ～健やかで美しく豊かな環境先進国へ向けて～	
編纂者	環境省	
公表日	平成 16 年 5 月 中央環境審議会答申	
予測対象期間	2025 年	
予測項目		
環境と経済	将来像	<p>環境と経済の好循環が実現した 2025 年の将来像</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 日本の経済社会 <ul style="list-style-type: none"> ・環境に強い関心を持つ消費者と技術力が生み出す所得と雇用 ・資源が循環しエネルギー効率の高い社会 ・サービス産業と環境 ・人と環境にやさしい交通 ・環境と経済の好循環 (2) 地域とライフスタイル <ul style="list-style-type: none"> ・自然の恵みが人を呼ぶ里 ・ものづくりのわざが循環をつくる街 ・環境の心で生まれ変わる都会 (3) 環境が豊かさを招く世界と日本
	目標	<p>環境と経済の好循環ビジョンにおける目標一覧</p> <p>【くらしを彩る環境のわざ】 温室効果ガスの排出削減 1990年比で2008年から2012年の温室効果ガスの排出量を6%削減するとともに、温室効果ガスの排出削減が組み込まれた社会を構築し、長期的・継続的な排出削減を目指す。</p> <p>グリーンコンシューマーの増加 「物・サービスを買うときは環境への影響を考えてから選択している」人の割合が2025年度に80%以上になることを目指す。</p> <p>【「もったいない」が生み出す資源】 資源生産性の向上 循環型社会形成推進基本計画に基づき、資源生産性（GDP/天然資源等投入量）を2010年度に約39万円/トン（2000年度比で概ね4割向上）まで向上させる。</p> <p>環境保全活動への積極的参加 「過去1年間に、地域やNPO等でごみの削減やその他の環境保全に参加したことがある」人の割合が2025年度に50%以上になることを目指す。</p> <p>【自然がはぐくむ心と力】 自然とのふれあいを求める人の増加 「年に10日以上を自然の中で過ごす」人の割合が2025年度には50%以上になることを目指す。</p> <p>自然エネルギー等の普及 自然エネルギー等の新エネルギー技術が日本から世界に広まり、大幅に導入されることを目指す。</p> <p>【2025年の経済社会】 環境誘発型ビジネスの成長 通常と比較してより環境に配慮した製品や事業形態（環境誘発型ビジネス）の市場が日本のみならず外国にも広がり、2025年には、100兆円以上の市場と200万人以上の雇用を生み出していることを目指す。</p>

【経済・産業・開発】

報告書の名称	「少子化の要因と少子化社会に関する研究会」報告書	
編纂者	財務省財務総合研究所	
公表日	平成 17(2005)年 8 月 11 日	
予測対象期間	2050 年	
予測項目		
経済成長率と出生率	推計結果	<p>少子化がマクロ経済や財政・社会保障などに及ぼす影響 加藤久和（明治大学政治経済学部助教授）論文</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中位人口推計の場合 2025 年度以降の年平均成長率 0.54% 少子化がさらに進行した場合 経済成長の鈍化、国内貯蓄投資差額の悪化、財政・社会保障負担の増加 ・合計特殊出生率が 2025 年度 1%増加 実質国内総生産成長率は 2025～2050 年度の平均 25 年間で平均 0.05%ポイント高くなる
	推計方法	<p>マクロ経済モデルによる 2050 年度までの長期的なシミュレーションにより、これから生まれる世代の影響が及ぶ 25～50 年度に着目した。</p> <p>推計は、一般政府の実質最終消費支出を 02 年度で固定し、消費税の税率を最終的に 15%まで引き上げるとの財政再建計画を前提としている。</p>

【経済・産業・開発】

報告書の名称	新産業創造戦略																																																																			
編纂者	経済産業省																																																																			
公表日	平成 16 (2004) 年 5 月 18 日																																																																			
予測対象期間	2025 年																																																																			
予測項目																																																																				
市場・雇用規模と業種別就業者数	推計結果	<p>【戦略 7 分野別の市場・雇用規模の展望】</p> <p>1. 燃料電池</p> <table border="0"> <tr> <td></td> <td>2010 年の市場規模 (展望)</td> <td>2020 年の市場規模 (展望)</td> </tr> <tr> <td>・燃料電池自動車</td> <td>5 万台</td> <td>5 0 0 万台</td> </tr> <tr> <td>・定置用燃料電池</td> <td>2 0 0 万 kW</td> <td>1, 0 0 0 万 kW</td> </tr> <tr> <td>・市場規模</td> <td>約 1 兆円</td> <td>約 8 兆円</td> </tr> </table> <p>上記に加え、携帯用燃料電池の導入が期待される。</p> <p>2. 情報家電</p> <table border="0"> <tr> <td></td> <td>2003 年の市場規模</td> <td>2020 年の市場規模 (展望)</td> </tr> <tr> <td>・世界</td> <td>約 5 4 兆円</td> <td>約 9 6 兆円</td> </tr> <tr> <td>・日本</td> <td>約 1 0 兆円</td> <td>約 1 8 兆円</td> </tr> </table> <p>(セット機器、パネル/ユニット、部品/半導体、電子材料、製造装置市場の単純合計)</p> <p>3. ロボット</p> <table border="0"> <tr> <td></td> <td>2003 年の市場規模</td> <td>2010 年の市場規模 (展望)</td> </tr> <tr> <td></td> <td>約 5,000 億円</td> <td>約 1. 8 兆円</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>2025 年の市場規模 (展望)</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>約 6. 2 兆円</td> </tr> </table> <p>4. コンテンツ</p> <table border="0"> <tr> <td></td> <td>2001 年の市場規模</td> <td>2010 年の市場規模 (展望)</td> </tr> <tr> <td>・コンテンツ産業</td> <td>約 1 1 兆円</td> <td>約 1 5 兆円</td> </tr> </table> <p>(うちデジタルコンテンツ国内市場規模 約 1. 9 兆円)</p> <p>・海外輸出・ライセンス規模 約 0. 3 兆円 約 6. 3 兆円)</p> <p>約 1. 5 兆円</p> <p>5. 健康・福祉・機器サービス</p> <table border="0"> <tr> <td></td> <td>2002 年の市場・雇用規模</td> <td>2010 年の市場・雇用規模 (展望)</td> </tr> <tr> <td>・市場規模</td> <td>約 5 6 兆円</td> <td>約 7 5 兆円</td> </tr> <tr> <td>・雇用規模</td> <td>約 5 5 1 万人</td> <td>約 7 5 0 万人</td> </tr> </table> <p>6. 環境/エネルギー機器・サービス</p> <table border="0"> <tr> <td></td> <td>2001 年の市場・雇用規模</td> <td>2010 年の市場・雇用規模 (展望)</td> </tr> <tr> <td>・市場規模</td> <td>約 5 2 兆円</td> <td>約 7 8 兆円</td> </tr> <tr> <td>・雇用規模</td> <td>約 1 4 4 万人</td> <td>約 1 9 1 万人</td> </tr> </table> <p>7. ビジネス支援サービス</p> <table border="0"> <tr> <td></td> <td>2000 年の市場・雇用規模</td> <td>2010 年の市場・雇用規模 (展望)</td> </tr> <tr> <td>・市場規模</td> <td>約 7 6 兆円</td> <td>約 1 0 7 兆円</td> </tr> <tr> <td>・雇用規模</td> <td>約 6 2 7 万人</td> <td>約 7 5 0 万人</td> </tr> </table> <p>【業種別就業者数の展望 (業種別就業者は別表参照)】</p> <p>1. 就業者の増大する産業セクター 医療・保健・社会保障・介護、水道・廃棄物処理、サービス</p> <p>2. 就業者の減少するセクター 農林水産業、電気機器、建設、公務</p>		2010 年の市場規模 (展望)	2020 年の市場規模 (展望)	・燃料電池自動車	5 万台	5 0 0 万台	・定置用燃料電池	2 0 0 万 kW	1, 0 0 0 万 kW	・市場規模	約 1 兆円	約 8 兆円		2003 年の市場規模	2020 年の市場規模 (展望)	・世界	約 5 4 兆円	約 9 6 兆円	・日本	約 1 0 兆円	約 1 8 兆円		2003 年の市場規模	2010 年の市場規模 (展望)		約 5,000 億円	約 1. 8 兆円			2025 年の市場規模 (展望)			約 6. 2 兆円		2001 年の市場規模	2010 年の市場規模 (展望)	・コンテンツ産業	約 1 1 兆円	約 1 5 兆円		2002 年の市場・雇用規模	2010 年の市場・雇用規模 (展望)	・市場規模	約 5 6 兆円	約 7 5 兆円	・雇用規模	約 5 5 1 万人	約 7 5 0 万人		2001 年の市場・雇用規模	2010 年の市場・雇用規模 (展望)	・市場規模	約 5 2 兆円	約 7 8 兆円	・雇用規模	約 1 4 4 万人	約 1 9 1 万人		2000 年の市場・雇用規模	2010 年の市場・雇用規模 (展望)	・市場規模	約 7 6 兆円	約 1 0 7 兆円	・雇用規模	約 6 2 7 万人	約 7 5 0 万人
	2010 年の市場規模 (展望)	2020 年の市場規模 (展望)																																																																		
・燃料電池自動車	5 万台	5 0 0 万台																																																																		
・定置用燃料電池	2 0 0 万 kW	1, 0 0 0 万 kW																																																																		
・市場規模	約 1 兆円	約 8 兆円																																																																		
	2003 年の市場規模	2020 年の市場規模 (展望)																																																																		
・世界	約 5 4 兆円	約 9 6 兆円																																																																		
・日本	約 1 0 兆円	約 1 8 兆円																																																																		
	2003 年の市場規模	2010 年の市場規模 (展望)																																																																		
	約 5,000 億円	約 1. 8 兆円																																																																		
		2025 年の市場規模 (展望)																																																																		
		約 6. 2 兆円																																																																		
	2001 年の市場規模	2010 年の市場規模 (展望)																																																																		
・コンテンツ産業	約 1 1 兆円	約 1 5 兆円																																																																		
	2002 年の市場・雇用規模	2010 年の市場・雇用規模 (展望)																																																																		
・市場規模	約 5 6 兆円	約 7 5 兆円																																																																		
・雇用規模	約 5 5 1 万人	約 7 5 0 万人																																																																		
	2001 年の市場・雇用規模	2010 年の市場・雇用規模 (展望)																																																																		
・市場規模	約 5 2 兆円	約 7 8 兆円																																																																		
・雇用規模	約 1 4 4 万人	約 1 9 1 万人																																																																		
	2000 年の市場・雇用規模	2010 年の市場・雇用規模 (展望)																																																																		
・市場規模	約 7 6 兆円	約 1 0 7 兆円																																																																		
・雇用規模	約 6 2 7 万人	約 7 5 0 万人																																																																		

(別表)業種別就業者数の展望

	就業者数(万人)						年平均伸び率(%)	
	2000		2010		2025		00	10
							10	25
農林水産業	411	6.4%	253	4.0%	138	2.3%	-4.7	-4.0
鉱業	7	0.1%	9	0.1%	8	0.1%	1.9	-0.8
食料品	157	2.4%	163	2.6%	184	3.0%	0.4	0.8
繊維製品	80	1.2%	54	0.8%	30	0.5%	-3.9	-3.8
パルプ・紙・木製品	70	1.1%	55	0.9%	31	0.5%	-2.4	-3.7
化学製品	46	0.7%	50	0.8%	40	0.7%	0.8	-1.5
石油・石炭製品	3	0.1%	2	0.0%	1	0.0%	-3.9	-3.5
窯業・土石製品	49	0.8%	43	0.7%	34	0.6%	-1.3	-1.4
鉄鋼	33	0.5%	33	0.5%	31	0.5%	-0.1	-0.4
非鉄金属	13	0.2%	11	0.2%	6	0.1%	-1.5	-4.1
金属製品	100	1.5%	91	1.4%	62	1.0%	-1.0	-2.5
一般機械	134	2.1%	159	2.5%	160	2.6%	1.7	0.0
電気機器	190	2.9%	164	2.6%	98	1.6%	-1.5	-3.4
輸送機器	104	1.6%	99	1.5%	85	1.4%	-0.5	-1.0
精密機械	22	0.3%	17	0.3%	10	0.2%	-2.2	-3.5
その他の製造品	210	3.3%	224	3.5%	265	4.4%	0.6	1.1
建設	662	10.2%	537	8.4%	409	6.7%	-2.1	-1.8
電力・ガス・熱供給	20	0.3%	20	0.3%	16	0.3%	-0.2	-1.4
水道・廃棄物処理	35	0.5%	63	1.0%	77	1.3%	6.0	1.3
商業	1166	18.0%	1134	17.8%	839	13.8%	-0.3	-2.0
金融・保険	194	3.0%	179	2.8%	110	1.8%	-0.8	-3.2
不動産	93	1.4%	108	1.7%	113	1.9%	1.5	0.3
運輸	336	5.2%	338	5.3%	340	5.6%	0.1	0.1
通信・放送	54	0.8%	30	0.5%	12	0.2%	-5.9	-5.9
公務	213	3.3%	114	1.8%	58	0.9%	-6.1	-4.4
教育・研究	422	6.5%	402	6.3%	424	7.0%	-0.5	0.3
医療・保健・社会保障・介護	461	7.1%	687	10.8%	1092	17.9%	4.1	3.1
サービス	1179	18.2%	1330	20.9%	1421	23.3%	1.2	0.4
産業計	6466	100%	6368	100%	6095	100%	-0.2	-0.3

推計方法

産業連関分析手法による推計であり、産業構造の中長期展望での主な前提条件は次のとおり。

- (1) 戦略7分野(燃料電池、情報家電、ロボット、コンテンツ、健康・福祉、環境・エネルギー、ビジネス支援サービス)のアクションプログラムの実施による関連産業の成長
- (2) 少子高齢化による人口構成・世帯構成の変化に基づく、消費構造の変化とこれに対応した産業構造の変化
- (3) 東アジア地域の経済統合の進展による産業構造の高度化

【経済・産業・開発】

報告書の名称	シンポジウム「2050年紙はどうか？」
編纂者	(社)日本印刷技術協会
公表日	2001年7月25日開催
予測対象期間	2050年
予測項目	
紙	<p>「2050年に紙はどうか？」シンポジウム</p> <p>【報告記事】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・紙の将来 プラマイゼロか、若干マイナス？ ・当面は穏やかで10年後大変化がくる紙媒体？ <p>【各氏の講演より】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リサイクル素材としての紙の将来の展望（東京農工大学助教授・岡山隆之氏） ・再び紙に出会う（グラフィックデザイナー・原研哉氏）（出典：TechnoFocus2001.8.6号） ・紙メディアをめぐる問題（日本製紙・種田秀孝氏） ・電子メディアとともに紙は進化する（第一部パネルディスカッション「環境・社会・文化の視点から」） ・紙の文化・産業のピークは10年後？（「2050年紙はどうか？ - 印刷の立場から」大日本印刷・北山拓也氏） ・出版ビジネスにおける「紙」（新潮社・村瀬拓男氏） ・50年後、紙の新聞は残っているのか（「2050年に紙はどうか？ - 新聞メディアの場合」共同通信社・北嶋孝氏） ・情報用紙の未来は電子機器とともに・・・（「2050年紙はどうか？ - 情報用紙」王子製紙・林滋雄氏） <p>【現状】</p> <p>「東京農工大助教授・岡山隆之氏」の講演より</p> <ul style="list-style-type: none"> ・紙の消費 アメリカ、中国に次いで世界第3位 ・先進諸国（総人口の1/5～1/6）で約75%の紙の消費 ・日本の一人当たり紙の消費量の伸びは大きい、最近10年間は比較的スローダウン ・世界の一人当たり紙・板紙消費量 アメリカ350kg、日本250kg（2000年）で上位は先進国 ・新聞用紙はパブル期伸びたが最近は頭打ち ・日本（2000年）の製紙用繊維原料の消費量は約3000万トンで、そのうち古紙が1600万トン（全体の54%） ・国産パルプは1070万トン前後（全体の35-36%）、輸入パルプ260万トン（全体の8.5%） ・日本（2000年）の古紙回収率58%、古紙利用率57%、古紙回収量約1830万トン。 ・古紙回収の伸び 1983年約900万トン 2000年は1983年の2倍強。 ・日本（2005年）の紙・板紙回収率は約55.9%～62.5%と予測（日本製紙連合会） ・紙の寿命は2000年以上の実績があるが、紙が酸性の場合、寿命は短い。 <p>「日本製紙・種田秀孝氏」の講演より</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本（2000年）の紙使用内訳 <p>総生産量は3,213万トン。情報媒体（新聞・雑誌）用が約半分。プリントアウトや伝票約189万トン。工業用段ボール1,381万トン。家庭用紙（ティッシュ、トイレット）171万トン。包容用104万トン。</p> <p>【2050年の展望】</p> <p>報告記事「50年後は紙の媒体がなくなる？」より</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ディスプレイ「高精細のIMAXシアターかそれ以上の解像度のものが各家庭に安価に入る」 ・CG「2010年頃には超小型化が進み、コンピュータがカプセル型のものに入ってしまう。また、ヴァーチャルリアリティが一般化し、人間型ロボットの普及が進む」 ・ディスプレイの上で作った画像に、全ての人が満足するだろうか疑問 ・住環境に電子デバイスが張り付いてはいるが、そこに映し出されるものは必ずしもコミュニケーションとしての情報ではないかもしれない。なぜなら、情報に埋もれて生活するのは人間の感覚として疲れるからである。 ・視覚的にもやさしく、いやしが得られるような電子ディスプレイが作られたとき、初めて電子媒体を紙に置き換えることができるだろう。

【経済・産業・開発】

報告書の名称	2030年のエネルギービジョン
編纂者	新日本製鐵(株)
公表日	2004年4月 Nippon Steel Monthly Vol.137
予測対象期間	2030年
予測項目	
鉄鋼	<p>【日本のエネルギー政策の大事なこと】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. エネルギーセキュリティ 2. 製造業の国際競争力 3. 地球環境問題 4. 技術革新 <p>【鉄鋼業界の取り組み】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 過去から現在まで <ul style="list-style-type: none"> ・20%の省エネ(1973年のオイルショック以来、1990年までに3兆円投資) ・さらに8.55%の省エネ(1990年から10年間で1.4兆円投資) 2. 2010年までの取り組み <ul style="list-style-type: none"> ・省エネルギーへの取り組みがベース 廃プラスチックの活用 現在30万トン 2010年100万トン 廃タイヤの活用 現在6万トン 2010年2倍以上 ・社会全体での省エネルギーへの貢献 製品の付加価値化、効率化による利用段階の省エネルギー 世界最高水準の省エネルギー技術を海外へ供給 従来のバウンダリーを超えた産業間連携による未利用エネルギーや副産物の有効利用 3. 中長期(2030年)の取り組み <ul style="list-style-type: none"> ・水素供給による水素社会の実現 コークスガスからの水素製造により500万台以上の燃料電池車へ供給 ・還元剤の炭素からのCO₂分離技術による地球温暖化対応

【経済・産業・開発】

報告書の名称	「ユビキタスネット社会の実現に向けた政策懇談会」最終報告書																																																
編纂者	総務省																																																
公表日	2004年12月																																																
予測対象期間	2010年																																																
予測項目	<p>調査結果</p> <p>【2010年に向けた構想としての骨格】 大目標：フロントランナーとしての2010年の目標設定 <u>e - J a p a n</u>の大目標 世界最先端 - 2005年までに実現</p> <p><u>u - J a p a n</u>の大目標 世界最先端 - 2010年には実現</p> <p>基本構想：[e]から「u」への進化 ブロードバンドからユビキタス（ ）ネットへ 情報化促進から課題解決へ 利用環境整備の抜本強化</p> <p><u>u - J a p a n</u>の価値創発（ ） ・草の根のように生活の隅々までICTが溶けこむ ・創意ある利活用でまったく新しい価値が生み出される</p> <p>【u - J a p a nにおけるICT産業】 ・ユビキタスネットワーク関連市場規模 2003年28.7兆円 2007年59.3兆円 2010年87.6兆円（2003年の約3倍） ・ユビキタスネットワーク関連市場の経済波及効果（ユビキタスネットワーク関連市場が全産業に及ぼす生産誘発） 2010年の生産誘発額 120.5兆円（2003年から2010年までの8年間累計611.1兆円）</p> <p style="text-align: center;">ユビキタスネットワーク関連市場規模（単位：兆円）</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th></th> <th>2003年</th> <th>2007年</th> <th>2010年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>インフラ</td> <td>5.8</td> <td>12.7</td> <td>19.7</td> </tr> <tr> <td>ネットワーク</td> <td>2.9</td> <td>8.5</td> <td>9.7</td> </tr> <tr> <td>アプリケーション</td> <td>10.7</td> <td>15.3</td> <td>18.1</td> </tr> <tr> <td>プラットフォーム</td> <td>1.2</td> <td>2.5</td> <td>3.6</td> </tr> <tr> <td>サービス・コンテンツ</td> <td>2.9</td> <td>5.2</td> <td>8.5</td> </tr> <tr> <td>コマース</td> <td>5.1</td> <td>15.1</td> <td>28.1</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td>28.7</td> <td>59.3</td> <td>87.6</td> </tr> </tbody> </table> <p>（出典）平成16年版情報通信白書</p> <p style="text-align: center;">2010年のユビキタスネットワーク関連市場の経済波及効果</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tbody> <tr> <td>情報通信産業</td> <td>45兆1,522億円</td> </tr> <tr> <td>製造業（除く情報通信産業）</td> <td>25兆85億円</td> </tr> <tr> <td>商業</td> <td>14兆1,390億円</td> </tr> <tr> <td>運輸</td> <td>8兆5,812億円</td> </tr> <tr> <td>金融・保険</td> <td>7兆9,001億円</td> </tr> <tr> <td>対事業所サービス</td> <td>7兆8,173億円</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>11兆9,242億円</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td>120兆5,225億円</td> </tr> </tbody> </table> <p>（出典）平成16年版情報通信白書</p> <p>調査方法</p> <p>総務省政策統括官（情報通信担当）の懇談会「ユビキタスネット社会の実現に向けた政策懇談会」（座長：村上 輝康 株式会社野村総合研究所理事長）による検討結果。 「ユビキタス(ubiquitous)」の語源はラテン語で、「至る所に存在する（遍在する）」という意味をもつ。ユビキタスネットワークは、ひと言でいうと、「いつでも、どこでも、何でも、誰でもつながるネットワーク」である。このようなネットワークの利活用環境を形成するICT（情報通信技術）がユビキタスネットワーク技術であるが、これを活用することによって形成される「いつでも、どこでも、何でも、誰でも」つながる社会像を、われわれは「ユビキタスネット社会」と名づけた。そして、わが国で2010年を目途として先駆的に実現されるユビキタスネット社会を「ユビキタスネット・ジャパン（u - J a p a n）」とよぶ。 創発は、生物学や物理学、社会学で、自律的に相互作用を行う諸要素が、多数ネットワーク化されることによって、そのなかから思いがけない新形質が生じるような現象を表す言葉である。このような創発現象が、ユビキタスネットワーク上で起こり、様々な生活シーンやビジネスシーンにおいて民産学官が連携して活発に新たな価値を生み出していく。そのようなユビキタスネット社会を、日本に先駆的に実現させることで、2010年にはフロントランナーとして世界のICT利活用を先導することがu - J a p a n政策の最終目標である。</p>		2003年	2007年	2010年	インフラ	5.8	12.7	19.7	ネットワーク	2.9	8.5	9.7	アプリケーション	10.7	15.3	18.1	プラットフォーム	1.2	2.5	3.6	サービス・コンテンツ	2.9	5.2	8.5	コマース	5.1	15.1	28.1	合計	28.7	59.3	87.6	情報通信産業	45兆1,522億円	製造業（除く情報通信産業）	25兆85億円	商業	14兆1,390億円	運輸	8兆5,812億円	金融・保険	7兆9,001億円	対事業所サービス	7兆8,173億円	その他	11兆9,242億円	合計	120兆5,225億円
	2003年	2007年	2010年																																														
インフラ	5.8	12.7	19.7																																														
ネットワーク	2.9	8.5	9.7																																														
アプリケーション	10.7	15.3	18.1																																														
プラットフォーム	1.2	2.5	3.6																																														
サービス・コンテンツ	2.9	5.2	8.5																																														
コマース	5.1	15.1	28.1																																														
合計	28.7	59.3	87.6																																														
情報通信産業	45兆1,522億円																																																
製造業（除く情報通信産業）	25兆85億円																																																
商業	14兆1,390億円																																																
運輸	8兆5,812億円																																																
金融・保険	7兆9,001億円																																																
対事業所サービス	7兆8,173億円																																																
その他	11兆9,242億円																																																
合計	120兆5,225億円																																																

【エネルギー・資源】

報告書の名称	2025年までの経済・エネルギーの長期展望 - 持続的成長への途を求めて -					
編纂者	電力中央研究所					
公表日	平成 15 (2003) 年 4 月					
予測対象期間	2025 年					
予測項目						
経済・財政 産業・貿易 地域経済 エネルギー需給	推計結果	<p>1. マクロ経済・財政動向</p> <p>(1) デフレ長期化、経済停滞の影響で財政赤字が引き続き、国債残高は 2002 年度末で 460 兆円にも達している。今後も現状の財政スタンスを維持すると、国債残高は一方的に増大し 2025 年には 1,200 兆円 (対 GDP 比 180%) を超え財政破たん状態に陥る。</p> <p>(2) 将来の財政破たんを回避するため、内需拡大策とともに、消費税増税、歳出抑制、社会保障費削減を柱とする厳しい緊縮型の財政スタンスを想定した。このとき消費税率は 2006 年から 2015 年にかけて 15% にまで引き上げられ、国民負担率も 55% にまで上昇する。その結果、財政破たんはかろうじて免れ、実質 GDP 成長率は 2000 ~ 2025 年間で 1.0% と低成長ながらも持続的成長が見込まれる。人口減少や少子高齢化、財政再建など様々な制約から、日本経済の成長力に大きな期待は出来そうにない。</p> <p>2. 産業構造・貿易構造</p> <p>(1) 情報技術の進展によるネットワーク社会、高齢化社会の到来で、IT 関連産業や高齢化対応産業は成長を遂げる。リーディング産業は、電子機器、通信・放送、ソフト開発等の対事業所サービス、医療・保健衛生サービスである。就業構造もサービス化が加速し、製造業の雇用シェアは 2025 年には 16% に低下する。</p> <p>(2) 日本企業のグローバル化・直接投資の拡大によって、今後も製造業の海外生産比率は上昇し、2025 年では輸出の 64%、輸入の 54% を占めるようになる。</p> <p>3. 地域経済</p> <p>(1) 地域別実質 GDP は、産業集積の厚い首都圏、中部、関西では全国平均を上回る成長を遂げるが (年率 1.0 ~ 1.1% 増)、北海道、東北、北関東、北陸、中国、四国、九州・沖縄では人口減少や公共投資抑制の影響で年率 0.3 ~ 0.8% 増と低成長となる。</p> <p>(2) 各地域の経済成長率に差が生じるため、地域別一人当たり実質 GDP の最大値と最小値の差は、2000 年の 140 万円から 2025 年の 230 万円へと広がる (最大値と最小値の比率は、1.5 倍から 1.6 倍に拡大)。</p> <p>4. エネルギー需給</p> <p>(1) アジアを中心とした石油需要の堅調な伸び (年率 1.5% 増) によって、国際石油価格 (WTI) は 2025 年には名目 43 ドル/バレルにまで上昇する。</p> <p>(2) 国内エネルギー消費は、低成長とエネルギー価格上昇、環境自主行動規制計画の達成や省エネ技術の進展を反映して、期間中ほぼ横ばいで推移する。</p> <p>(3) 電力需要 (自家発電を除く系統電力) は、情報化やサービス化の進展、電気料金引き下げなどを反映して、業務用を中心に年率 1.1% 増と総エネルギー需要を上回る伸びとなり、電力シフトが進展する。しかし、原子力発電の開発が遅れば電気料金が上昇するため、2010 年以降の伸び率は 0.8% 程度に落ち込む可能性もある。</p> <p>(4) CO2 排出量はエネルギー需要の停滞、石油依存度の低下等を反映して減少傾向に転ずるが、2010 年では 2 億 9,940 万トンと 1990 年水準 (2 億 8,710 万トン) を 4% 上回り、京都議定書の公約達成は難しい。それでも、2010 年以降排出量は殆ど伸びない。</p>				
		90-00 年 (実績)	00-10 年 (予測)	10-25 年 (予測)	00-25 年 (予測)	(年率%)
	・実質 GDP 成長率 (%)	1.3	0.8	1.1	1.0	
	・需給ギャップ (%) *	13.8	13.7	7.4	7.4	
	・国債残高 (兆円) *	374.1	707.6	890.2	890.2	
	・産業別生産増加率: 素材	1.5	0.2	0.4	0.4	
	・産業別生産増加率: 電子部品等	8.8	3.6	3.1	3.3	
	・産業別生産増加率: 通信放送	4.2	3.0	4.0	3.6	
	・一次エネルギー総供給	1.4	-0.1	0.4	0.2	
	・最終エネルギー消費	1.5	-0.4	0.3	0.0	
	・電力需要 (系統電力)	2.4	1.1	1.1	1.1	
	・CO2 排出量 (百万トン-C) *	316.3	299.4	306.0	306.0	
	・人口 (万人) *	12,693	12,689	11,801	11,801	
	・国際石油価格 (WTI、ドル/バレル)	30.4	30.5	43.4	43.4	
	* は各期間末レベル					
	推計方法	当該研究所の長期経済予測システムを用いた。この長期経済予測システムは、計量経済学の手を用いて開発された 世界経済モデル、世界エネルギーモデル、人口・労働力モデル、財政モデル、マクロ経済モデル、産業連関モデル、エネルギー間競争モデル、全国 10 地域経済モデル、電気事業経営モデルより構成されている。				

【エネルギー・資源】

報告書の名称	持続可能なエネルギー社会を目指して - エネルギー・環境・経済問題への未来シナリオ -																																																																																							
編纂者	市民エネルギー調査会																																																																																							
公表日	2004年8月1日																																																																																							
予測対象期間	2030年																																																																																							
予測項目	<p>エネルギー量、CO2排出量、マクロ経済・産業構造</p> <p>推計結果</p> <p>1. エネルギー関連</p> <p>1) エネルギー起源 CO2 排出量 (詳細は別表参照)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 2030年には「ゆでカエル」シナリオで1990年比107、「いきカエル」シナリオで91、「きりカエル」シナリオで58となる。「きりカエル」シナリオでは、CO2濃度の定常化に寄与しよう。 ・ 「いきカエル」シナリオでは、2010年のCO2排出量は1990年比100となり、代替フロン削減等と合わせて京都議定書の目標を達する。 ・ ここで重要なのは、こうした数字が、マクロ経済の変化、産業構造の変化、エネルギー需給の変化の3つに合わせた総合効果であることである。 ・ なお「いきカエル」シナリオに対して、炭素税を導入した場合のCO2削減効果の追加試算(感度分析)を行った。2005年から炭素トン6,000円の炭素税を導入した場合、2010年において、「いきカエル」シナリオから約4000万トン(CO2換算、4%弱)の追加的な削減効果が見られた。 <p>2) 一次エネルギー供給 (詳細は別表参照)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 現在と比べ、「いきカエル」シナリオ・「きりカエル」シナリオでは、石油・石炭・原子力の比重が低下し、他方で天然ガス・新エネのそれが増大する。 <p>3) 最終エネルギー消費 (詳細は別表参照)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「いきカエル」シナリオを「ゆでカエル」シナリオと比較すると、省エネは進むが、経済の活性化で活動量が増えるため、エネルギー消費量はそれほど減らない。 <p>4) 発電構成 (詳細は別表参照)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 原子力が無くなり、新エネと天然ガスが増える。 <p>2. マクロ経済・産業構造関連 (詳細は別表参照)</p> <p>1) 海外要因</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 為替レートは円安に向かう。 <p>2) 人口と経済成長率</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 人口・世帯数等は、総合エネ調と対比するため、同じ想定を使用している。人口は2006年をピークに減少へ転じる。 ・ 経済成長率は、「いきカエル」シナリオでやや高まる。「きりカエル」シナリオの2030年GDPは1985年水準となる(「きりカエル」シナリオでは、「GDPで測れない価値」の台頭を考えている)。 <p>3) 主要物資生産量</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 産業構造のサービス化・IT化が進行し、他方でエネルギー集約型の素材産業は内需の減少などによって生産量が減少する。 ・ 一方で産業のサービス化・IT化が進む。(産業連関表ベース、1995年実質価格、「いきカエル」シナリオ) 電子・通信機械、2000年のシェア4.1%、2030年のシェア7.9% 金融・保険業 2000年のシェア4.1%、2030年のシェア5.6% 通信放送 2000年のシェア1.8%、2030年のシェア3.3% 対事業所サービス 2000年のシェア6.8%、2030年のシェア11.4% <p>(別表)</p> <p>一次エネルギー供給 (単位: PJ)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2"></th> <th rowspan="2">2000</th> <th colspan="2">2010</th> <th colspan="3">2030</th> </tr> <tr> <th>A</th> <th>B</th> <th>A</th> <th>B</th> <th>C</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>合計</td> <td>22,396</td> <td>23,021</td> <td>22,436</td> <td>22,747</td> <td>20,183</td> <td>13,765</td> </tr> <tr> <td>90年比</td> <td>115</td> <td>118</td> <td>115</td> <td>117</td> <td>103</td> <td>71</td> </tr> <tr> <td>00年比</td> <td></td> <td>103</td> <td>100</td> <td>102</td> <td>90</td> <td>61</td> </tr> <tr> <td>石油等</td> <td>11,118</td> <td>10,628</td> <td>10,489</td> <td>10,396</td> <td>9,886</td> <td>6,934</td> </tr> <tr> <td>石炭</td> <td>4,194</td> <td>4,127</td> <td>2,694</td> <td>3,739</td> <td>2,085</td> <td>1,292</td> </tr> <tr> <td>天然ガス</td> <td>3,073</td> <td>3,822</td> <td>4,736</td> <td>4,055</td> <td>4,950</td> <td>2,464</td> </tr> <tr> <td>原子力</td> <td>2,898</td> <td>3,186</td> <td>2,987</td> <td>3,186</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>水力</td> <td>806</td> <td>793</td> <td>839</td> <td>818</td> <td>948</td> <td>948</td> </tr> <tr> <td>地熱</td> <td>40</td> <td>33</td> <td>67</td> <td>37</td> <td>133</td> <td>133</td> </tr> <tr> <td>新エネ</td> <td>267</td> <td>432</td> <td>624</td> <td>517</td> <td>2,180</td> <td>1,994</td> </tr> </tbody> </table> <p>注) A: ゆでカエルシナリオ、B: いきカエルシナリオ、C: きりカエルシナリオ</p>							2000	2010		2030			A	B	A	B	C	合計	22,396	23,021	22,436	22,747	20,183	13,765	90年比	115	118	115	117	103	71	00年比		103	100	102	90	61	石油等	11,118	10,628	10,489	10,396	9,886	6,934	石炭	4,194	4,127	2,694	3,739	2,085	1,292	天然ガス	3,073	3,822	4,736	4,055	4,950	2,464	原子力	2,898	3,186	2,987	3,186	0	0	水力	806	793	839	818	948	948	地熱	40	33	67	37	133	133	新エネ	267	432	624	517	2,180	1,994
	2000	2010		2030																																																																																				
		A	B	A	B	C																																																																																		
合計	22,396	23,021	22,436	22,747	20,183	13,765																																																																																		
90年比	115	118	115	117	103	71																																																																																		
00年比		103	100	102	90	61																																																																																		
石油等	11,118	10,628	10,489	10,396	9,886	6,934																																																																																		
石炭	4,194	4,127	2,694	3,739	2,085	1,292																																																																																		
天然ガス	3,073	3,822	4,736	4,055	4,950	2,464																																																																																		
原子力	2,898	3,186	2,987	3,186	0	0																																																																																		
水力	806	793	839	818	948	948																																																																																		
地熱	40	33	67	37	133	133																																																																																		
新エネ	267	432	624	517	2,180	1,994																																																																																		

最終エネルギー消費（単位：PJ）

	2000	2010		2030		
		A	B	A	B	C
合計	15,729	16,425	16,074	16,509	15,658	10,146
90年比	116	122	119	122	116	75
00年比		104	102	105	100	65
産業	7,455	7,490	7,561	7,239	7,635	4,797
民生	4,175	4,489	4,266	4,628	4,328	2,612
家庭	2,235	2,380	2,169	2,399	2,093	1,570
業務	1,940	2,109	2,096	2,230	2,235	1,042
運輸	3,798	4,147	3,947	4,341	3,395	2,437
旅客	2,431	2,767	2,547	2,947	1,997	1,510
貨物	1,367	1,379	1,401	1,394	1,398	927
非エネルギー	300	300	300	300	300	300

エネルギー起源 CO2 排出量（単位：CO2 換算百万トン）

	2000	2010		2030		
		A	B	A	B	C
全排出量	1,189	1,189	1,091	1,170	992	628
90年比	109	109	100	107	91	58
00年比		100	92	98	83	53

発電電力量（単位：億 kWh）自家発電を含む

	2000	2010		2030		
		A	B	A	B	C
発電電力量	10,767	10,957	10,460	11,041	8,467	6,087
90年比	127	129	123	130	100	72
00年比		102	97	103	79	57
火力	6,615	6,421	5,926	6,390	5,732	3,548
石炭	2,332	2,544	733	2,433	333	0
LNG	2,797	2,995	4,288	3,370	5,146	3,085
石油等	1,486	882	905	588	253	463
原子力	3,067	3,372	3,161	3,372	0	0
水力	853	840	888	865	1,004	1,004
地熱	33	35	71	39	141	141
新工ネ	199	289	413	375	1,591	1,394

経済・活動指標

	2000	2010		2030		
		A	B	A	B	C
実質 GDP(95年価格兆円)	539	618	622	725	770	354
経済成長率(%)	1.3	1.4	1.4	0.6	0.9	-2.6
消費者物価指数(2000年=100)	100	99	99	103	105	124
物価上昇率(%)	0.3	-0.1	-0.1	0.4	0.6	2.0
原油価格(ドル/バレル)	28	29	29	35	35	36
為替レート(円/ドル)	110	130	130	167	167	275
人口(万人)	12,693	12,753		11,763		
世帯数(万世帯)	4,802	5,014		4,902		
粗鋼生産量(万t)	10,690	9,228	9,399	6,444	6,928	4,844
エチレン(万t)	757	661	671	542	571	299
セメント(万t)	8,007	7,070	7,076	5,495	5,853	2,601
パルプ(万t)	1,127	1,194	1,205	1,092	1,163	744
紙・板紙(万t)						
鉱工業生産指数	100	116	118	138	149	
業務床面積(百万m ²)	1,655	1,840	1,844	1,996	2,034	1,230
旅客輸送量(十億人km)	1,420	1,577	1,584	1,781	1,836	1,039
貨物輸送量(十億トンkm)	578	618	634	648	646	389
完全失業率(%)	4.7	6.3	6.1	12.3	8.4	
経常収支(兆円)	124	155	184	-198	-16	
財政収支(兆円)	-22	-29	-27	-54	-23	
政府累積債務の GDP 比	1.0	2.2	2.2	4.5	3.1	

推計方法

定量分析をシナリオ・アプローチと組み合わせて推計した。トップダウン方式としてエコノミート・マクロモデルと産業連関表ならびにエネルギーモデルを用い、ボトムアップモデルとして LEAP を用いた。
 「ゆでカエル」シナリオ：現状延長シナリオ、つまり、現状の構造（経済・産業・エネルギー需給）がこのままで線形的に拡大する。
 「いきカエル」シナリオ：環境産業を次代の戦略産業とすることにより産業の空洞化を克服し、現在の経済・社会の仕組みの下で、経済の活性化と環境保全を同時に達成しようとする。
 「きりカエル」シナリオ：大きな目標（たとえば温暖化防止と放射性物質リスクの低減）と暮らしやすい社会（スローライフなど）を組み合わせた姿を、「選択する未来」として描く。

【エネルギー・資源】

報告書の名称	2050年の原子力 ビジョンとロードマップ																																																																																																																																								
編纂者	(社)日本原子力産業会議 原子炉開発利用委員会																																																																																																																																								
公表日	2004年11月5日																																																																																																																																								
予測対象期間	2050年																																																																																																																																								
予測項目	原子力																																																																																																																																								
推計結果	<p>(1) 発電に寄与する原子力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最終エネルギー消費に占める石油の割合 2000年 52% 2050年 22~24% ・最終エネルギー消費の電力の割合 2000年 24% 2050年 31% ・電源別発電電力量の原子力の割合 2000年 31% 2050年 60% <p>最終エネルギー消費量の比較(単位: %)(図中の数字)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2"></th> <th rowspan="2">2000年</th> <th colspan="2">2025年</th> <th colspan="2">2050年</th> </tr> <tr> <th>A</th> <th>B</th> <th>A</th> <th>B</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>石油等</td> <td>52</td> <td>45</td> <td>39</td> <td>24</td> <td>22</td> </tr> <tr> <td>ガス</td> <td>13</td> <td>20</td> <td>24</td> <td>24</td> <td>24</td> </tr> <tr> <td>石炭等</td> <td>10</td> <td>6</td> <td>7</td> <td>7</td> <td>6</td> </tr> <tr> <td>水素</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>11</td> <td>11</td> </tr> <tr> <td>電力</td> <td>24</td> <td>26</td> <td>27</td> <td>31</td> <td>31</td> </tr> </tbody> </table> <p>熱供給、黒液・太陽等は除く。A: 原子力拡大ケース、B: 原子力廃止ケース</p> <p>電源別発電電力量(自家発電を含む)の比較(単位: %)(図中の数字)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2"></th> <th rowspan="2">2000年</th> <th colspan="2">2025年</th> <th colspan="2">2050年</th> </tr> <tr> <th>A</th> <th>B</th> <th>A</th> <th>B</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>石油他*</td> <td>19</td> <td>5</td> <td>5</td> <td>3</td> <td>2</td> </tr> <tr> <td>天然ガス(LNG)</td> <td>23</td> <td>19</td> <td>50</td> <td>11</td> <td>64</td> </tr> <tr> <td>石炭</td> <td>16</td> <td>9</td> <td>5</td> <td>8</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>原子力</td> <td>31</td> <td>51</td> <td>19</td> <td>60</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>水力</td> <td>10</td> <td>10</td> <td>11</td> <td>10</td> <td>11</td> </tr> <tr> <td>その他再生可能</td> <td>1</td> <td>6</td> <td>10</td> <td>8</td> <td>23</td> </tr> </tbody> </table> <p>*石油他は100%から他の項目の合計を差し引いた残り。</p> <p>一次エネルギー供給量の比較(単位: %)(図中の数字)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2"></th> <th rowspan="2">2000年</th> <th colspan="2">2025年</th> <th colspan="2">2050年</th> </tr> <tr> <th>A</th> <th>B</th> <th>A</th> <th>B</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>石油</td> <td>51</td> <td>39</td> <td>36</td> <td>21</td> <td>20</td> </tr> <tr> <td>天然ガス(LNG)</td> <td>13</td> <td>17</td> <td>34</td> <td>23</td> <td>54</td> </tr> <tr> <td>原料炭</td> <td>9</td> <td>8</td> <td>8</td> <td>7</td> <td>7</td> </tr> <tr> <td>一般炭</td> <td>10</td> <td>5</td> <td>3</td> <td>5</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>原子力</td> <td>13</td> <td>22</td> <td>8</td> <td>33</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>再生可能</td> <td>6</td> <td>9</td> <td>11</td> <td>11</td> <td>18</td> </tr> </tbody> </table> <p>(2) 原子力による水素製造</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水素の最終エネルギー消費に占める割合 2020年代から自動車用などの燃料電池が普及 2050年 11%(うち原子力による水素製造が7割) <p>(3) 原子力開発利用に関する合意形成と制度整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・原子力に対する信頼を回復するために、管理体制について抜本的な改革が実施された。(法制度、行政組織、研究開発組織など) ・その結果、規制行政、施設運転管理、研究開発活動などについての品質マネジメントと評価システムが整備される。 ・公正性、公平性、透明性を一層備えた運営が行われ、国民の合意が得られている。 <p>(4) 地域社会と共生する原子力施設</p> <ul style="list-style-type: none"> ・原子力施設との共生を選択した地域においては、補助金などを活用した地域社会の福祉機能が充実発展し、雇用が拡大している。 ・原子力事業者は、地域社会との交流の機会を増やす努力を重ね、原子力施設は地域と共生する施設となっている。 <p>(5) 業界間規制の緩和で自由なエネルギー市場</p> <ul style="list-style-type: none"> ・エネルギー業界では、地域独占の緩和、各エネルギー種別の業界間規制が緩和され、競争市場が形成されている。 ・国は、民間企業の投資リスクを軽減する制度的な仕組みの整備を行い、民間主体の原子力事業が進められている。 ・公平な競争条件(外部コストの導入など)の下で、化石燃料、原子力および再生可能エネルギーが競合している。 ・燃料電池車の急速な普及による水素社会への移行は、エネルギー供給形態に大きな変革を与えている。 <p>(6) 多様化する原子力施設の立地</p>						2000年	2025年		2050年		A	B	A	B	石油等	52	45	39	24	22	ガス	13	20	24	24	24	石炭等	10	6	7	7	6	水素	-	-	-	11	11	電力	24	26	27	31	31		2000年	2025年		2050年		A	B	A	B	石油他*	19	5	5	3	2	天然ガス(LNG)	23	19	50	11	64	石炭	16	9	5	8	-	原子力	31	51	19	60	-	水力	10	10	11	10	11	その他再生可能	1	6	10	8	23		2000年	2025年		2050年		A	B	A	B	石油	51	39	36	21	20	天然ガス(LNG)	13	17	34	23	54	原料炭	9	8	8	7	7	一般炭	10	5	3	5	-	原子力	13	22	8	33	-	再生可能	6	9	11	11	18
	2000年	2025年		2050年																																																																																																																																					
		A	B	A	B																																																																																																																																				
石油等	52	45	39	24	22																																																																																																																																				
ガス	13	20	24	24	24																																																																																																																																				
石炭等	10	6	7	7	6																																																																																																																																				
水素	-	-	-	11	11																																																																																																																																				
電力	24	26	27	31	31																																																																																																																																				
	2000年	2025年		2050年																																																																																																																																					
		A	B	A	B																																																																																																																																				
石油他*	19	5	5	3	2																																																																																																																																				
天然ガス(LNG)	23	19	50	11	64																																																																																																																																				
石炭	16	9	5	8	-																																																																																																																																				
原子力	31	51	19	60	-																																																																																																																																				
水力	10	10	11	10	11																																																																																																																																				
その他再生可能	1	6	10	8	23																																																																																																																																				
	2000年	2025年		2050年																																																																																																																																					
		A	B	A	B																																																																																																																																				
石油	51	39	36	21	20																																																																																																																																				
天然ガス(LNG)	13	17	34	23	54																																																																																																																																				
原料炭	9	8	8	7	7																																																																																																																																				
一般炭	10	5	3	5	-																																																																																																																																				
原子力	13	22	8	33	-																																																																																																																																				
再生可能	6	9	11	11	18																																																																																																																																				

	<ul style="list-style-type: none"> ・原子力発電所が設置された地点（跡地を含む）での増設・更新、火力発電所や石油精製施設の跡地などに、原子炉施設が建設されている。（立地点の多様化） ・選ばれた革新炉が稼働している。（経済性向上、環境負荷低減、資源有効利用、電力／非電力利用等） <p>(7) 国際エネルギー情勢の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界のエネルギー供給は、化石燃料が担っている。 ・温室効果ガスの排出規制は、ますます厳しくなり、原子力発電や再生可能エネルギーの割合が高まっており、中東諸国の石油資源の交渉力が弱まっている。 <p>(8) 世界における原子力利用の進展</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長期にわたって原子力施設の安全な運転管理が行われている。 ・原子力活動の透明性がますます高まっている。 ・IAEAの国際保障措置の機能の充実（核拡散に対する懸念の低下）により、原子力の利用は進展している。 ・アジア諸国や欧米諸国では、新規の原子力発電所の他、水素生産、海水脱塩、地域冷暖房などの熱供給にも原子力が使われている。 <p>(9) 原子燃料サイクルシステムの整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際社会においては、軽水炉燃料は、高燃焼度化がはかられている。また使用済み燃料は、中間貯蔵施設あるいは地層処分施設において管理されている。 ・わが国を含めた一部の国では、プルサーマルも選択されている。 ・わが国では、ロシア、欧米諸国と協力して、経済性の高い高速増殖炉サイクルシステムを実現させている。 <p>(10) 放射性廃棄物処分の進展</p> <ul style="list-style-type: none"> ・わが国では、高レベル放射性廃棄物や TRU 廃棄物の地層処分が開始されている。また、廃炉等で発生する放射性廃棄物を処分する活動も継続的に実施されている。 ・国際社会においては、国際的枠組み作りができたことにより、放射性廃棄物管理が困難な国においても、原子力利用が可能になっている。 ・先進国においては、マイナーアクチニド（MA）の分離・変換の実用化が進められている。 <p>(11) 世界で活躍する日本の原子力産業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界での原子力発電所の建設業務は、グローバルアライアンスの下で日本企業も分担している。 ・日本企業は、プロジェクトの企画・推進、基盤となる技術の開発・改良、重要機器の製造など特化した活動を行っている。
推計方法	<p>長期エネルギー需給シナリオに基づく推計。推計モデルは MARKAL。</p> <p>【主要な前提条件】</p> <p>GDP 年間伸び率：1.2%（2000～2010年）、0.6%（2010～2030年）、0%（2030～2050年）（2000年～2050年の平均で0.5%）</p> <p>エネルギー消費原単位（最終エネルギー消費量/GDP）：技術進歩・消費構造変化等で改善（2000年～2050年に年率約0.8%）</p> <p>化石燃料供給：</p> <p>価格 - 2050年に石油は2倍、天然ガス（LNG）は1.5倍に上昇（対2000年比）</p> <p>制約 - 石油は製品輸入化を想定 / 石炭・天然ガス（LNG）は制約なし</p> <p>自然エネルギー利用： 資源規模に基づく導入量制約、コスト、CO2削減要求等で決定</p> <p>原子力利用：拡大 / 廃止（フェーズアウト）</p> <p>CO2制約：2010年排出量を1990年値に抑制（除国際輸送）</p> <p>【エネルギー需給シナリオ】</p> <p>原子力拡大ケース：2050年原子力発電規模9,000万kWe、熱利用2,000万kWt</p> <p>原子力廃止ケース：2010年以降原子力新設なし（2005年までに建設の炉は耐用年数40年で廃止）</p> <p>CO2排出量：両ケースとも2050年は2010年の60%に抑制</p>

【エネルギー・資源】

報告書の名称	燃料電池実用化戦略研究会報告
編纂者	燃料電池実用化戦略研究会
公表日	2001年1月22日
予測対象期間	2020年
予測項目	<p>推計結果</p> <p>1. 燃料電池導入の意義</p> <p>(1) 省エネルギー効果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自動車用：ガソリン内燃機関自動車よりも高効率。 (車両効率：ガソリン・エンジン車 15～20%、固体高分子形燃料電池車 30%以上) ・定置用：排熱利用によりエネルギー効率 70%以上の高効率を達成可能。 <p>(2) 環境負荷低減効果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高効率性に基づく省エネルギー効果により CO2 排出量の抑制が可能。 ・燃焼反応ではないため、NOx、SOx、PM 等の排出量がゼロ又は極微量。 (再生可能エネルギーから製造する水素の場合、完全なゼロ・エミッション) <p>(3) エネルギー供給の多様化・石油代替効果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・燃料電池は、天然ガス等の石油代替エネルギーや太陽光発電、風力発電、バイオマス等の再生可能エネルギー等の多様な供給源から生産された水素を燃料とすることができ、水素の供給源によっては、エネルギー供給の多様化、石油代替に資する。 <p>(4) 分散型電力エネルギーとしての利点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・需要家の近くに定置用燃料電池が設置されることにより、送電時のエネルギー損失(約5%)の低減、災害時のバックアップ等が図れる。 <p>(5) 産業競争力強化と新規産業の創出</p> <ul style="list-style-type: none"> ・環境技術が重要となる 21 世紀において、自動車、電気機器、素材、エネルギー等の幅広い産業が関係する燃料電池の技術は、我が国企業の競争力強化や新規産業の創出に資する。 <p>2. 燃料電池実用化・普及への課題</p> <p>(1) 燃料電池の基本性能の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・燃料電池本体(スタック)、改質器、水素燃料貯蔵、全体システム等について、高効率化、耐久性等の向上に向けた技術開発が必要。 <p>(2) 経済性の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・燃料電池の市場自立化と普及を早期に実現するためにも、競合する機器・設備と競争力を有するレベルまで経済性が向上することが必要(現行の技術レベルでは数百万円/kW 程度)。 ・自動車用燃料電池は、現在の自動車エンジンのコストと同程度とすることが必要であり、1kW 当たり 5,000 円(25 万円/台)の実現が目標。 ・定置用燃料電池は、家庭用給湯器を代替し、更に発電器の機能が付加されている価値を考慮すると、システム価格(kW)で1台当たり 30～50 万円の実現が目標。 ・固体高分子電解質膜製造の低コスト化、白金触媒の使用量低減による低コスト化等が課題。 <p>(3) 燃料開発とインフラの整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・燃料電池の燃料となる水素をどのように製造・供給するかが、その燃料供給インフラの整備とあわせて大きな課題。今後の技術革新によっては市場において特定の方式に絞られる可能性があるが、現時点においては、多様な方式について検討や開発競争が進められている状況。 <p>(4) 基準・標準等のソフトインフラの整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・安全性・耐久性等の基準や機器等の標準が未整備であり、そうした基準・標準等の国内的・国際的整備に早期に取り組むことが必要。 <p>(5) その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・触媒に使用される希少な資源の制約、固体高分子電解質膜に使用されるフッ素系化合物についての廃棄・処分の問題、社会的受容性の醸成・向上、研究開発に携わる人材不足への対応が必要。 <p>3. 課題の解決に向けた取組み</p> <p>(1) 実用化・普及に向けてのシナリオ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2000～2005年頃(基盤整備、技術実証段階) 技術開発戦略の策定及びその実施 制度面の基盤整備(基準・標準化)の推進【ミレニアム・プロジェクト】 実証試験の実施(運転特性等データ取得、社会的受容性の向上) 燃料電池用燃料の品質基準の確立 ・2005～2010年頃(導入段階) <p>[期待される導入目標 2010年：自動車用約5万台、定置用約2.1百万kW]</p> <p>2003年頃から計画されている実用品レベルの製品の市場導入が加速化され、燃料供給体制等の段階的な整備を開始。</p> <p>公共施設・機関、燃料電池関連企業における率先的導入推進。</p> <p>第2期燃料電池技術開発戦略の策定及びその実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2010年頃以降(普及段階)

	<p>[期待される導入目標 2020年：自動車用約5百万台、定置用約10百万kW] 燃料供給体制の整備、コスト低減を踏まえ、自律的に市場が拡大・進展。 公共施設・機関、燃料電池関連企業のみならず、一般民間部門において導入が進展。</p> <p>燃料電池実用化戦略研究会として期待する導入目標（累積）</p> <table border="1" data-bbox="475 297 1409 392"> <thead> <tr> <th></th> <th>2010年</th> <th>2020年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>燃料電池自動車</td> <td>約5万台</td> <td>約5百万台</td> </tr> <tr> <td>定置用燃料電池</td> <td>約2.1百万kW</td> <td>約10百万kW</td> </tr> </tbody> </table> <p>本試算は、今後、成長が見込まれる固体高分子形燃料電池について、その積極的な導入に向け燃料電池実用化戦略研究会として期待する導入目標との位置づけ。</p>		2010年	2020年	燃料電池自動車	約5万台	約5百万台	定置用燃料電池	約2.1百万kW	約10百万kW
	2010年	2020年								
燃料電池自動車	約5万台	約5百万台								
定置用燃料電池	約2.1百万kW	約10百万kW								
推計方法	燃料電池実用化戦略研究会による検討。									

【エネルギー・資源】

報告書の名称	バイオマス・ニッポン総合戦略																												
編纂者	農林水産省																												
公表日	平成 14 (2002) 年 12 月																												
予測対象期間	当面 2010 年を目途、適宜見直す																												
予測項目																													
バイオマス	推計結果	<p>バイオマス・ニッポン総合戦略の目指すもの (1) 「バイオマス・ニッポン」の進展シナリオ <バイオマスの利活用の展開方向> バイオマスは生物によって生産されるため、「広く、薄く」存在するという特性を持つ。したがって、その収集に係るコスト及び収集量による変換効率は利活用の容易さを大きく左右する。</p> <p>(廃棄物系バイオマス) 年間賦存量：エネルギー換算で約 930PJ (原油換算で約 2,400 万 k l)</p> <p>(未利用バイオマス) 年間賦存量：エネルギー換算で約 210PJ (原油換算で約 550 万 k l)</p> <p>(資源作物) 年間賦存量：エネルギー換算で約 210PJ (原油換算で約 540 万 k l)</p> <p>バイオマスの年間賦存量</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>湿潤重量 (万トン)</th> <th>乾燥重量 (万トン)</th> <th>エネルギー換算 (PJ) (原油換算万 kl)</th> <th>炭素量 (万トン)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>廃棄物系バイオマス</td> <td>約 30,500</td> <td>約 5,600</td> <td>930 (約 2,400)</td> <td>約 2,200</td> </tr> <tr> <td>未利用バイオマス</td> <td>約 1,600</td> <td>約 1,200</td> <td>約 210 (約 550)</td> <td>約 530</td> </tr> <tr> <td>資源作物</td> <td>約 1,900</td> <td>約 1,200</td> <td>約 210 (約 540)</td> <td>約 520</td> </tr> <tr> <td>新作物</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table> <p>廃棄物系バイオマス：廃棄される紙、家畜排せつ物、食品廃棄物、建設発生木材、黒液、下水汚泥 未利用バイオマス：農作物非食用部、林地残材 資源作物：エネルギー源や製品の原料となる作物 新作物：海洋植物や遺伝子組み換え食物 (2050 年頃に生産が期待される)</p> <p>(2) 「バイオマス・ニッポン」実現に向けた具体的目標 (技術的観点からの目標)</p> <p>a 直接燃焼及びガス化プラント等含水率の低いバイオマスをエネルギーへ変換する技術 ・バイオマスの日処理量 20 トン程度のプラント (数市町村規模を想定) におけるエネルギー変換効率が電力として 20%、あるいは熱として 80% 程度。 ・バイオマスの広域収集に関する環境が整った場合のバイオマス日処理量 100 トン程度のプラント (都道府県を想定) におけるエネルギー変換効率が電力として 30% 程度</p> <p>b メタン発酵等含水率の高いバイオマスをエネルギーへ変換する技術において、バイオマスの日処理量 5 トン程度のプラント (集落から市町村規模を想定) におけるエネルギー変換効率が電力として 10%、あるいは熱として 40% 程度を実現できる技術を開発する。</p> <p>c バイオマスを製品へ変換する技術において、現時点で実用化しているバイオマス由来のプラスチックの原料価格を 200 円/kg 程度とするとともに、リグニンやセルロース等の有効活用を推進するため、新たに実用化段階の製品を 10 種以上作出する。</p> <p>(地域的観点からの目標) 廃棄物系バイオマスを炭素量換算で 90% 以上又は未利用バイオマスを炭素量換算で 40% 以上活用するシステムを有する市町村を、500 程度構築する。</p> <p>(全国的観点) 廃棄物系バイオマスが炭素量換算で 80% 以上利活用され、未利用バイオマスが炭素量換算で 25% 以上利活用される。資源作物は炭素量換算で 10 万トン程度が利活用される。</p>				湿潤重量 (万トン)	乾燥重量 (万トン)	エネルギー換算 (PJ) (原油換算万 kl)	炭素量 (万トン)	廃棄物系バイオマス	約 30,500	約 5,600	930 (約 2,400)	約 2,200	未利用バイオマス	約 1,600	約 1,200	約 210 (約 550)	約 530	資源作物	約 1,900	約 1,200	約 210 (約 540)	約 520	新作物	-	-	-	-
	湿潤重量 (万トン)	乾燥重量 (万トン)	エネルギー換算 (PJ) (原油換算万 kl)	炭素量 (万トン)																									
廃棄物系バイオマス	約 30,500	約 5,600	930 (約 2,400)	約 2,200																									
未利用バイオマス	約 1,600	約 1,200	約 210 (約 550)	約 530																									
資源作物	約 1,900	約 1,200	約 210 (約 540)	約 520																									
新作物	-	-	-	-																									
	推計方法	バイオマス・ニッポン総合戦略																											

【エネルギー・資源】

報告書の名称	ユビキタスネットワーク社会の進展と環境に関する調査研究会報告書		
編纂者	総務省情報通信政策局情報流通高度化推進室		
公表日	平成 17 (2005) 年 3 月 24 日		
予測対象期間	2010 年		
予測項目	CO2 排出量		
推計結果	<p>【結論】 ユビキタスネットワーク社会 (2010 年) は 2,650 万 t (2.0%) の CO2 削減に貢献 (2,650 万 t-CO2 は火力発電所 10.6 基分の年間 CO2 排出量に匹敵。石炭火力発電所 40 万 kW、稼働率 80% で計算。 % は 2000 年の CO2 総排出量 (13 億 3,700 万 t) に対する比率。)</p> <p>【増大要因】 ユビキタス分野の電力消費の増加 ・ネットワーク (含む、サーバ類) 2000 年 187.4 億 kWh 2010 年 282.2 億 kWh (50.6% 増) ・端末 (パソコン、電話機等) 2000 年 108.1 億 kWh 2010 年 172.1 億 kWh (59.2% 増) ・合計 2000 年 295.5 億 kWh 2010 年 454.3 億 kWh (53.7% 増) ・CO2 排出量 2000 年 1,120 万 t-CO2 2010 年 1,720 万 t-CO2 (600 万 tCO2 増加)</p> <p>【減少要因】 ・ユビキタスシステムによる環境負荷低減 1,480 万 t-CO2 削減 テレワーク、ITS による通勤量削減、交通渋滞削減 410 万 t-CO2 削減 生産・物流・消費の効率化 (電子商取引、IC タグ等) 1,070 万 t-CO2 削減 ・重厚長大産業からの産業構造の転換 1,770 万 t-CO2 削減 (2010 年におけるユビキタス関連市場 (情報通信機器、情報通信サービス等) の拡大効果を、2010 年の経済規模と産業連関表に適用して比較検討した結果)</p> <p>【京都議定書の達成目標との関係】 2002 年の日本の CO2 排出量 133,100 万 t に対する削減目標量 16,822 万 t の 15.8% に貢献。 (2,650 万 t-CO2 削減量に対する割合)</p>		
推計方法	環境負荷低減効果の試算方法 評価対象システムの選定：既存システム評価により、今後 CO2 削減効果が大きいと期待される以下のシステムについて、2010 年の普及率及び CO2 削減効果を設定し、産業連関表を用いて試算。		
	システムの利用主体	CO2 削減効果	
		エネルギーの利用効率を改善する	物の生産や消費が少なくても済むようになる
			人や物の移動が少なくても済むようになる
	生産・流通・輸送	エコドライブシステム ITS	SCM リソース支援システム
	事務所・店舗	BEMS	物流・配送管理支援システム
	一般家庭	HEMS	ペーパーレス化 (電子政府・電子自治体を含む)
			テレワーク / TV 会議
			電子出版 (音楽・画像配信等、ユビキタスコンテンツ流通を含む)
			オンラインショッピング
	2010 年のシナリオ設定		
	・ユビキタス分野における電力消費量の増加 2000 年 295.5 億 kWh 2010 年 454.3 億 kWh ・評価対象ユビキタスシステムのシナリオ設定		
	システム	環境負荷低減効果	普及予測 (2010 年)
	高度交通システム (ITS)	燃費 2% 改善	自動車の 20%
	エコドライブ	一般用燃費 5.8% 改善、業務用燃費 10% 改善	一般用 0.5%、業務用 12%
	物流・配送システム	効率 6% 向上	道路貨物輸送の 8%
	サプライチェーンマネジメント (SCM)	返品率が現状の約 3% から半減する	製造業の 30%
	リソース支援システム	機械製品生産の 3.6% がリソース製品利用で代替	機械製造業の 40%
	テレワーク / TV 会議	通勤移動の削減	就業者の 25%
	ペーパーレス化	コピー用紙の削減	コピー用紙の 28%
	ビルエネルギー管理システム (BEMS)	ビルの省エネ率：空調 12.5%、照明 33.0%、給湯 7.5%。工場の省電力率：4%	業務部門 (ビル) の 30% 工場の 10%
	家庭向けエネルギー管理システム (HEMS)	省エネ率：エアコン 14%、その他家電機器 10%	全世帯の 17%
	電子出版	印刷用紙の削減	出版の 10%
	オンラインショッピング	買物交通普及分の 50% 削減 配送交通及び包装用紙普及分だけ増加	小売りの 5%

【食糧】

報告書の名称	食料・農業・農村基本計画																																																																																																				
編纂者	農林水産省																																																																																																				
公表日	平成 17 (2005) 年 3 月																																																																																																				
予測対象期間	平成 27 (2015) 年																																																																																																				
予測項目																																																																																																					
食料自給率	将来目標	<p>【現状の食料自給率】</p> <p>・平成 11 年度～平成 15 年度 供給熱量ベースの総合食料自給率は 40% で横ばい</p> <p>【2015 年度の食料自給率の目標】</p> <p>・基本的には、食料として国民に供給される熱量の 5 割以上を国内生産で賄うこととを指しつつ、各種取り組みにより実現可能な生産と消費の水準を踏まえ、以下のとおり設定。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成 15 年度 (%)</th> <th>平成 27 年度 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>カロリーベースの総合食料自給率</td> <td>40</td> <td>45</td> </tr> <tr> <td>生産額ベースの総合食料自給率</td> <td>70</td> <td>76</td> </tr> <tr> <td>主食用穀物自給率</td> <td>60</td> <td>63</td> </tr> <tr> <td>飼料用を含む穀物全体の自給率</td> <td>27</td> <td>30</td> </tr> <tr> <td>飼料自給率</td> <td>24</td> <td>35</td> </tr> </tbody> </table> <p>(参考) 酒類を含む総合食料自給率 (供給熱量ベース) 平成 15 年度 38% 平成 27 年度 43%</p> <p>(注) 平成 27 年度における酒類の消費、生産等が現状 (平成 15 年度) と同水準として試算したものである。</p> <p>【望ましい食料消費の姿】</p> <p>・総供給熱量 (1 人 1 日当たり) (kcal) 平成 15 年度 2,588 平成 27 年度 2,488</p> <p>・総供給熱量に対する PFC 熱量比 (1 人 1 日当たり) (%)</p> <table> <tr> <td>P (タンパク質)</td> <td>平成 15 年度 13.1</td> <td>平成 27 年度 13</td> </tr> <tr> <td>F (脂質)</td> <td>平成 15 年度 29.0</td> <td>平成 27 年度 27</td> </tr> <tr> <td>C (糖質 (炭水化物))</td> <td>平成 15 年度 57.9</td> <td>平成 27 年度 60</td> </tr> </table> <p>【品目別食料自給率目標】 (単位: %)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成 15 年度</th> <th>平成 27 年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>米</td> <td>95</td> <td>96</td> </tr> <tr> <td>うち主食用</td> <td>100</td> <td>100</td> </tr> <tr> <td>麦類 (計)</td> <td>12</td> <td>14</td> </tr> <tr> <td> 小麦</td> <td>14</td> <td>14</td> </tr> <tr> <td> 大麦・はだか麦</td> <td>9</td> <td>15</td> </tr> <tr> <td>甘しょ</td> <td>94</td> <td>97</td> </tr> <tr> <td>馬鈴しょ</td> <td>80</td> <td>84</td> </tr> <tr> <td>大豆</td> <td>4</td> <td>6</td> </tr> <tr> <td>うち食用</td> <td>22</td> <td>24</td> </tr> <tr> <td>野菜</td> <td>82</td> <td>88</td> </tr> <tr> <td>果実</td> <td>44</td> <td>46</td> </tr> <tr> <td>牛乳・乳製品</td> <td>69</td> <td>75</td> </tr> <tr> <td>肉類 (計)</td> <td>54</td> <td>62</td> </tr> <tr> <td> 牛肉</td> <td>39</td> <td>39</td> </tr> <tr> <td> 豚肉</td> <td>53</td> <td>73</td> </tr> <tr> <td> 鶏肉</td> <td>67</td> <td>75</td> </tr> <tr> <td>鶏卵</td> <td>96</td> <td>99</td> </tr> <tr> <td>砂糖</td> <td>35</td> <td>34</td> </tr> <tr> <td>茶</td> <td>91</td> <td>96</td> </tr> </tbody> </table> <p>(参考)</p> <table border="1"> <tbody> <tr> <td>魚介類</td> <td>50</td> <td>69</td> </tr> <tr> <td> うち食用</td> <td>57</td> <td>69</td> </tr> <tr> <td>海藻類</td> <td>62</td> <td>73</td> </tr> <tr> <td>きのこ類</td> <td>77</td> <td>82</td> </tr> </tbody> </table> <p>【生産努力目標】</p> <p>主要品目毎の生産面での課題、また、これらの努力目標に係わる単位面積当たりの収量、品目毎の作付面積、述べ作付面積、農地面積及び耕地面積利用率、生乳、肉類及び鶏卵の生産に必要な家畜頭羽数を目標として設定。</p>		平成 15 年度 (%)	平成 27 年度 (%)	カロリーベースの総合食料自給率	40	45	生産額ベースの総合食料自給率	70	76	主食用穀物自給率	60	63	飼料用を含む穀物全体の自給率	27	30	飼料自給率	24	35	P (タンパク質)	平成 15 年度 13.1	平成 27 年度 13	F (脂質)	平成 15 年度 29.0	平成 27 年度 27	C (糖質 (炭水化物))	平成 15 年度 57.9	平成 27 年度 60		平成 15 年度	平成 27 年度	米	95	96	うち主食用	100	100	麦類 (計)	12	14	小麦	14	14	大麦・はだか麦	9	15	甘しょ	94	97	馬鈴しょ	80	84	大豆	4	6	うち食用	22	24	野菜	82	88	果実	44	46	牛乳・乳製品	69	75	肉類 (計)	54	62	牛肉	39	39	豚肉	53	73	鶏肉	67	75	鶏卵	96	99	砂糖	35	34	茶	91	96	魚介類	50	69	うち食用	57	69	海藻類	62	73	きのこ類	77	82
	平成 15 年度 (%)	平成 27 年度 (%)																																																																																																			
カロリーベースの総合食料自給率	40	45																																																																																																			
生産額ベースの総合食料自給率	70	76																																																																																																			
主食用穀物自給率	60	63																																																																																																			
飼料用を含む穀物全体の自給率	27	30																																																																																																			
飼料自給率	24	35																																																																																																			
P (タンパク質)	平成 15 年度 13.1	平成 27 年度 13																																																																																																			
F (脂質)	平成 15 年度 29.0	平成 27 年度 27																																																																																																			
C (糖質 (炭水化物))	平成 15 年度 57.9	平成 27 年度 60																																																																																																			
	平成 15 年度	平成 27 年度																																																																																																			
米	95	96																																																																																																			
うち主食用	100	100																																																																																																			
麦類 (計)	12	14																																																																																																			
小麦	14	14																																																																																																			
大麦・はだか麦	9	15																																																																																																			
甘しょ	94	97																																																																																																			
馬鈴しょ	80	84																																																																																																			
大豆	4	6																																																																																																			
うち食用	22	24																																																																																																			
野菜	82	88																																																																																																			
果実	44	46																																																																																																			
牛乳・乳製品	69	75																																																																																																			
肉類 (計)	54	62																																																																																																			
牛肉	39	39																																																																																																			
豚肉	53	73																																																																																																			
鶏肉	67	75																																																																																																			
鶏卵	96	99																																																																																																			
砂糖	35	34																																																																																																			
茶	91	96																																																																																																			
魚介類	50	69																																																																																																			
うち食用	57	69																																																																																																			
海藻類	62	73																																																																																																			
きのこ類	77	82																																																																																																			

【国土】

報告書の名称	今後の国土利用の在り方に関する検討状況 ~ 国土利用の質的向上による「持続可能な美しい国土」の形成 ~																				
編纂者	国土利用計画研究会																				
公表日	平成 17(2005) 年 4 月																				
予測対象期間	2050 年																				
予測項目	国土利用																				
推計結果	推計結果	<p>都市圏別 2000 年から 2050 年までの人口減少の影響（趨勢値） （集約化などの施策をとらずにこのまま中位推計で推移した場合の都市圏別の人口、市街地の推計）</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>区分</th> <th>人口</th> <th>市街地</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全国</td> <td>人口 79%まで減少 (2006 年ピーク)</td> <td>人口 71%まで減少 (総人口の 51% 46%) 規模 約 8 割まで縮小(1975 年の市街地規模まで縮小) 密度 約 7800 約 7000 人/k m²</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">三大都市圏</td> <td>中心的都市 1hr 圏内</td> <td>人口 74%まで減少 規模 約 9 割まで縮小(ほぼ現在の規模を維持) 密度 約 9000 約 8100 人/k m² 高密度な市街地(1 万人/k m²以上)は人口・規模ともに半減</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>人口 64%まで減少 規模 約 7 割まで縮小(1975 年の市街地規模) 密度 約 5900 約 5400 人/k m²</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">地方圏</td> <td>地方中枢都市圏</td> <td>人口 78%まで減少 規模 約 8 割まで縮小 密度 約 7000 約 6600 人/k m² 高密度な市街地(1 万人/k m²以上)は人口・規模ともに半減</td> </tr> <tr> <td>地方中核都市圏</td> <td>人口 65%まで減少 規模 約 2/3 割まで縮小(全国平均よりも縮小する度合いが大きい) 密度 約 5700 約 5500 人/k m²</td> </tr> <tr> <td>地方圏その他</td> <td>人口 35%まで減少 規模 約 1/3 割まで縮小 密度 約 5100 約 4800 人/k m² 人口、規模とも既に減少している。今後 50 年間で更に約 1/3 まで縮減</td> </tr> </tbody> </table> <p>注：メッシュ別人口のデータは総務省「国勢調査報告」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成 14 年 1 月推計）をもとに国土交通省国土計画局作成。 市街地：国土数値情報において 3 次メッシュ内の人口密度が 4000 人/k m²以上の地域</p>		区分	人口	市街地	全国	人口 79%まで減少 (2006 年ピーク)	人口 71%まで減少 (総人口の 51% 46%) 規模 約 8 割まで縮小(1975 年の市街地規模まで縮小) 密度 約 7800 約 7000 人/k m ²	三大都市圏	中心的都市 1hr 圏内	人口 74%まで減少 規模 約 9 割まで縮小(ほぼ現在の規模を維持) 密度 約 9000 約 8100 人/k m ² 高密度な市街地(1 万人/k m ² 以上)は人口・規模ともに半減	その他	人口 64%まで減少 規模 約 7 割まで縮小(1975 年の市街地規模) 密度 約 5900 約 5400 人/k m ²	地方圏	地方中枢都市圏	人口 78%まで減少 規模 約 8 割まで縮小 密度 約 7000 約 6600 人/k m ² 高密度な市街地(1 万人/k m ² 以上)は人口・規模ともに半減	地方中核都市圏	人口 65%まで減少 規模 約 2/3 割まで縮小(全国平均よりも縮小する度合いが大きい) 密度 約 5700 約 5500 人/k m ²	地方圏その他	人口 35%まで減少 規模 約 1/3 割まで縮小 密度 約 5100 約 4800 人/k m ² 人口、規模とも既に減少している。今後 50 年間で更に約 1/3 まで縮減
区分	人口	市街地																			
全国	人口 79%まで減少 (2006 年ピーク)	人口 71%まで減少 (総人口の 51% 46%) 規模 約 8 割まで縮小(1975 年の市街地規模まで縮小) 密度 約 7800 約 7000 人/k m ²																			
三大都市圏	中心的都市 1hr 圏内	人口 74%まで減少 規模 約 9 割まで縮小(ほぼ現在の規模を維持) 密度 約 9000 約 8100 人/k m ² 高密度な市街地(1 万人/k m ² 以上)は人口・規模ともに半減																			
	その他	人口 64%まで減少 規模 約 7 割まで縮小(1975 年の市街地規模) 密度 約 5900 約 5400 人/k m ²																			
地方圏	地方中枢都市圏	人口 78%まで減少 規模 約 8 割まで縮小 密度 約 7000 約 6600 人/k m ² 高密度な市街地(1 万人/k m ² 以上)は人口・規模ともに半減																			
	地方中核都市圏	人口 65%まで減少 規模 約 2/3 割まで縮小(全国平均よりも縮小する度合いが大きい) 密度 約 5700 約 5500 人/k m ²																			
	地方圏その他	人口 35%まで減少 規模 約 1/3 割まで縮小 密度 約 5100 約 4800 人/k m ² 人口、規模とも既に減少している。今後 50 年間で更に約 1/3 まで縮減																			
推計方法	推計方法	<p>2000 年までは実績値、その後は国土計画局推計値である。推計は、国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成 14 年 1 月推計）」の中位推計をもとに、人口移動については、過去の趨勢に沿って移動率が減少していくと仮定して別途国土計画局において推計した市町村別人口増減率を当該市区町村に属するメッシュに一律適用することにより行った。</p>																			

【国土】

報告書の名称	国づくり100年デザインの提案
編纂者	「国づくりの100年デザイン」タスクフォース
公表日	平成15(2003)年4月
予測対象期間	50年、100年先
予測項目	
国づくりのデザイン	<p>提案プロジェクトの内容</p> <p><提案1>アジアの連携を先導する国 アジアの国際都市間を結ぶ超高速新交通網や共同防災支援センター、国づくりエージェンシー構想により、アジア文化に基づく国づくりを支援、その中で日本発の経験や技術、NPOや国際企業が活躍します。</p> <p><提案2>京阪神グローバルインターフェイスシティ 関西復興を目指し、大胆な都市改造により、水と緑に囲まれた大阪エコ・ピラミッド都市と、個性を伸ばした京都、神戸とが一体となった世界を惹きつける都市をつくります。また、潜水艇・海中物流基地・大深度地下等により交通を効率化するとともに地上や海を人と自然に開放します。</p> <p><提案3>100年後の国際空港 今後の更なる国際化に対応するため、シャトル便の東アジアゲートとなる国際空港を各地域ブロックに整備します。その際、大都市圏では、人流中心の国際空港の他、物流専用の国際空港も整備し、それぞれの特性にあった周辺のまちづくりを推進します。</p> <p><提案4>新しい社会システムにより個性ある発展をとげる国 道州レベルでの地域ポテンシャルを活かした特徴ある「国」づくりを促進し、それぞれが世界、とりわけアジアと直接交流を深め、互いに切磋琢磨することにより、全体として多様な国が実現します。また、ドアtoドア交通システムが、道州地域内での広域生活・経済圏の形成を支えます。</p> <p><提案5>「よるこびの森」創設による命の動脈づくり 都市に残された貴重な自然を市民一人ひとりが育てる「よるこびの森」でネットワーク化することで、新しい市民参加型環境共生社会の実現を目指します。</p> <p><提案6>安全安心な暮らしのための土地利用再編 災害が多発する「災害習慣病」の日本の土地利用を、高精度な未来型危険情報地図を開発・活用して、抜本的に再編するとともに、災害対策施設の多機能化を図ることにより、安全安心な暮らしの実現を目指します。</p> <p><提案7>ひとが主役の交通・物流システム 交通体系を人間本位なものに抜本再編し、地球温暖化やエネルギー枯渇、交通事故、労働力不足などの問題を解決します。このため、車輪から脱却し、排気ガスや騒音から解放された高速交通機関や、安全快適な都市内交通、高速地下物流ネットワークなどを整備します。</p> <p><提案8>循環型まちづくり～持続可能な都市生活を目指して～ 持続可能な都市生活を実現するために、生ゴミ、水や有機野菜の循環、建材やおがくずの循環、熱エネルギーの循環といった3つの循環型システムを都市を中心に形成します。そのためには、まず、循環型水道の整備や循環型トイレの技術開発・普及、高度下水再生処理技術の開発を進めます。</p> <p><提案9>100年かけてつくる新しいまちづくりプロセス 顔のあるまち、住民のライフスタイルに合ったまちをつくるため、従来の「造る人」を重視したまちづくりから「住む人」を重視した新しいまちづくりプロセスを提案します。</p> <p><提案10>大都市近郊での芸術村づくり 今後大都市近郊で増加する未利用空間をつかって、芸術村をつくります。日本の芸術を育て継承する拠点空間をつくるとともに、まちの活力を取り戻します。</p> <p><提案11>世界でもっとも美しく魅力ある「水と緑の大都市圏」の創出 我が国の豊かな自然環境、卓越した美意識と技術を集大成し、東京などの大都市圏を緑豊かに美しく、自然と人工が調和した機能的で快適な世界最先端の庭園都市へと段階的に再編します。</p> <p><提案12>グリーンベルトに囲まれたコンパクトなまちづくり 今後の人口減少へ対応するとともに、良好な自然環境を保全・創出するため、都市中心部への集中、都市外縁部のグリーンベルト化、生活交通と通過交通の分離、水のリサイクルなどを、総合的に推進します。</p>

	<p>< 提案 1 3 > 新たなマリライフを創造する都市沿岸域再生プロジェクト 物流・工業施設等に占拠されている都市沿岸地区を、広大な海洋空間を利用し、抜本的に改革（生活空間周辺より隔離し得る各種施設については、沖合の海上浮体上に移設する等）することにより、100年後における新たなマリライフを創造する空間の再生を目指します。</p> <p>< 提案 1 4 > 安全とふれあいの地域コミュニティ 交通事故や犯罪をなくし、子供が外で安全に遊べるコミュニティを実現します。お年寄りや体の不自由な人の自由な社会活動や、スポーツや文化活動を通じた地域の人々のいきいきとした交流を推進します。</p> <p>< 提案 1 5 > 3 世代先の新・田舎暮らし ライフステージの変化に応じて変わる理想の暮らしを実現するため、特に、都市で生まれた人の誰もが、気軽に、豊かな自然に囲まれた田舎暮らしを実践できる社会を目指します。</p> <p>< 提案 1 6 > 多拠点居住による豊かな暮らしの実現 人が生活する場所と時間にかかる制約を排除し、仕事上の拠点とは別に家族や地域とのつながりを重視した拠点を確保するなど、仕事も家庭も余暇も豊かな暮らしを実現し、失われた創造力を取り戻します。</p> <p>< 提案 1 7 > 個性とゆとりを実現する自由時間大国 自由時間の拡大、休暇制度やワークスタイルの多様化によって、個人の趣味や嗜好に応じた多様なライフスタイルを実現できる社会を目指します。</p> <p>< 提案 1 8 > 美しく元気な ” ふるさと ” の創造 都市と農村との関わりあいを中心に、農村空間の在り方として、農村が活気づき、ローカル資源・エネルギーを活用する社会を目指し、農業が元気になる方策を提案しています。</p> <p>< 提案 1 9 > 百年住宅構想 住宅ストックの質的向上、環境共生等の観点から、良好な居住環境の下に、高耐久性のみならず、保守の容易性、可変性、市場流通性等を備えた百年は優に使える住宅が並ぶ街づくりを目指します。</p> <p>< 提案 2 0 > 交通事故被害者ゼロの交通システム 100年後の我が国から、交通事故被害者を 0 にするため、新しい自動車交通システムを構築します。高齢化社会での新たな交通モデルとして先進国の先陣を切ります。</p> <p>< 提案 2 1 > 復活させようローカル鉄道 自由時間の増大や質的志向への転換に対応し、「移動」に対する意識を手段から楽しみ、個から集団、便利から環境へと転換。ゆっくり走るローカル鉄道の復活により、日本の豊かな自然・景観を味わいながら、文化・伝統を感じながら、豊かで楽しい「移動」を目指します。</p>
実施体制	<p>国土交通大臣が国土交通省内の各部局から意欲・アイデアのある若手・中堅職員を広く募集して、メンバー32名と主査4名から成る大臣直属のタスクフォースを設置し、50年、100年先を見通した国土の将来像について検討した。ここに示されている提案を材料として広く国民の意見を募集した。</p>

【都市・建築・交通】

報告書の名称	都市はこうなる - 30年後の都市環境を観る -		
編纂者	未来予測研究会編		
公表日	2002年5月20日		
予測対象期間	2030年		
予測項目			
エネルギー、環境、情報通信インフラ、交通・運輸、生活・文化	推計結果	1. エネルギー分野 次世代年表(抜粋)	
		シナリオ A	シナリオ B
		<ul style="list-style-type: none"> ・「新エネルギー導入-1996」総供給量 685万kl(一次エネルギーの1.1%) ・石油火力新設禁止 ・分散電源が普及 ・都市広域の電熱供給エネルギーネットワークが普及 ・新エネルギー利用促進 ・未利用エネルギー利用促進 ・「一次エネルギー構成 - 対策ケース - 2010」総供給量 6.16億kl 石油 2.91億kl、天然ガス 5,710万kl、原子力 4,800億kWh、地熱・新エネ 2,290万kl 「新エネルギー導入目標 - 対策ケース - 2010」総供給量 1,910万kl(一次エネルギーの3.1%) 太陽光 500万kw、太陽熱 450万kl、風力 30万kw、廃棄物発電 500万kw ・地下大型蓄熱システム実用化 ・水素エネルギーの利用技術の実用化 ・超伝導応用機器/電力貯蔵機器が実用化 ・電気・ガス供給ハイブリッドシステムの構築 ・国際宇宙月面基地の建設 ・核融合の経済性実証試験が開始 ・高温岩体発電、MHD発電システム実用化 ・海洋・海底(深海)開発が進む ・クリーンエネルギーがプレミアムエネルギーとして市場で取引される ・ビル外壁の有効利用が進む、マイクログ風車が都心で活用 ・大深度地下利用促進 ・宇宙開発基地からの新素材、新製品の搬送 ・最終エネルギー消費 4億klを維持 	<ul style="list-style-type: none"> ・「一次エネルギー構成 - 1996」総供給量 5.97億kl ・大気汚染による酸性雨が広域で降る ・石油火力新設禁止 ・大震災の結果、革新的な都市再建が開始 ・分散電源が普及 ・原油輸送船事故による海洋汚染 ・異常気象対策としてビル壁面の水冷化・屋上緑化開始 ・異常気象、遺伝子操作障害発生によるバイオマス供給の不安定化 ・ダイオキシン・環境ホルモンによる遺伝子異常 ・「一次エネルギー構成 - 基準ケース - 2010」総供給量 6.93億kl ・異常気象による水循環系の異変 ・電磁波公害対策及び送電線の地中化が進む ・オゾン層破壊が進み、紫外線遮断設備が増える ・水素ガス事故の増加により、ガス管の改良工事開始 ・天然ガスの排ガスのCO₂が問題となる ・一次・二次電池・電子機器廃棄による土壌汚染 ・航空機、列車事故多発 ・地球温暖化海面上昇 ・小惑星・流星群など隕石、衛星等宇宙ゴミの衝突 ・原子力発電所レベル4事故 ・都市景観の無機化、防災重視の都市計画 ・クリーンエネルギー促進政策の限界 ・原油高騰・原油生産が大幅に減少 ・停電による都市機能・経済活動マヒ ・火山噴火による都市インフラ機能停止・新交通機能停止が生じる ・最終エネルギー消費右肩上がり
2010年頃	2020年頃	2030年頃	
2. 環境分野 次世代年表(抜粋) シナリオ A ~楽観的シナリオ~			
予想時期	シナリオ A ~楽観的シナリオ~		
2010年頃	<ul style="list-style-type: none"> ・リサイクル率の規制、天然資源に対する課税が環境対策の財源として環境投資が進む ・規制強化(消費者負担、生産者責任、不法投棄徹底取締)と規制緩和(民間参加、競争原理) ・環境教育の充実とライフスタイルの見直し ・廃棄物処理の情報公開、信用力・資力の要求大 ・処理業界の再編、生産者によるリサイクル事業 		

2020年頃	<ul style="list-style-type: none"> ・植生と需要と環境に適応した国内林業の再構築により花粉症やハウスアレルギ－等が減少 ・エコシビルエンジニアリングの流行 ・基礎健康管理のためのミネラル調整が一般化 ・リサイクル製品の性能向上、高付加価値化によってリサイクルブランドのブームが起こる
2030年頃	<ul style="list-style-type: none"> ・輸送業界のクリーン化が進む ・ビル外壁の多機能化（ソーラーシステム、光触媒等） ・都心の空気清浄度が世界一に ・ごみ排出量 2000年比 50%減を達成 ・環境国際会議や NGO の活動、先進国の経済安定と途上国への適切な援助及び途上国の理解で全世界的な環境安定期に

次世代年表（抜粋） シナリオ B ～非観的シナリオ～

予想時期	シナリオ B ～楽観的シナリオ～
2010年頃	<ul style="list-style-type: none"> ・最終処分場の確保が急務 ・ヒートアイランド、温暖化対策が本格化 ・処理場の立地難 ・産業廃棄物の越境移動と不法投棄の増大が国内外の摩擦を生む ・廃棄物パニック発生、事後処理問題 ・水資源の分極化及び季節変動が顕著に表れ自治体間の水利権を巡る争いが始まる
2020年頃	<ul style="list-style-type: none"> ・酸性雨、水源破壊・汚染による水質悪化、新型アレルギー ・自然保護団体や住民の水質及び臭気監視、分析技術の発達による新たな危険物質の発見、環境ホルモン対策が本格化 ・汚染大気中の浮遊粒子状物質に起因する電波障害が深刻化 ・途上国からの汚染大気の流れが激化し、気管支や肺、皮膚を中心とした国民病の発生
2030年頃	<ul style="list-style-type: none"> ・気温上昇と降雨量の増加で熱帯伝染病が発生 ・温暖化対策が本格化 ・大気汚染や地球温暖化の進行で土壌浸食・汚染、植生の変化、水不足、日照不足による食糧生産量が低下 ・空気汚染が深刻化 ・オゾン層破壊が深刻化

3．情報通信インフラストラクチャー分野

変化のロジック A - 先取り型

現在	・情報通信に対する漠然とした期待感 - 「バラ色の IT」
競争の時代～2010年	<ul style="list-style-type: none"> ・企業活動の効率化、競争力強化 ・業種統合進展、新たな産業確立
利用の時代～2020年	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活で広範囲に IT 使用 ・ITによる個人情報管理が一般化 ・セキュリティに対する意識向上 ・企業経営モデル変化
参加の時代～2030年	<ul style="list-style-type: none"> ・NPO、NGO 型組織の役割増大 ・自己アピールによる満足感・達成感の獲得 ・弱者の社会参加 ・新たなコミュニティの設立・連携

変化のロジック B - 後追い型

現在	・情報通信に対する漠然とした期待感 - 「バラ色の IT」
競争の時代～2010年	<ul style="list-style-type: none"> ・効率一辺倒のゆとりのない社会 ・「デジタルディバイド」クローズアップ
利用の時代～2020年	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活で広範囲に IT 使用 ・ITによる個人情報管理が一般化 ・違法行為の温床
参加の時代～2030年	<ul style="list-style-type: none"> ・便利だが猜疑心に満ちた社会 ・主体性を強要される社会 ・「嫌情報権」の主張 ・コミュニティの孤立・対立・緊張

変化のロジック C - 不発型

現在	・情報通信に対する漠然とした期待感 - 「バラ色の IT」
競争の時代～2010年	<ul style="list-style-type: none"> ・限られた用途のみで使用 ・限定的な効果
利用の時代～2020年	・先進的なユーザーがのめり込んで使用
参加の時代～2030年	・情報通信と無関係にコミュニティの創設・運営

4. 交通・運輸分野

次世代年表

シナリオ A	時期	シナリオ B
<ul style="list-style-type: none"> ・環状道路の建設が進み、都市周辺が活性化 ・都市内通過自動車迂回用バイパスの建設が増加 ・鉄道運賃・サービス制度の変更に伴う駅施設のリニューアル開始 ・ホーム・線路上の空間を利用した駅ビル建設が増加 ・郵便事業の民営化に伴い、新しい取引形態に対応した都市内新物流システムが登場 ・ITS の進展により信号・標識など景観障害物を撤去 ・都心 - 空港を直結する大深度地下道路が開通 ・高齢者対策のため車椅子専用道（帯）が増加 ・水素スタンドが普及 ・貨客混載型のミニバスネットワークが増加 ・パーソナルエコカーの普及に伴い駐車場が充実 	<p>2010 年頃</p> <p>2020 年頃</p> <p>2030 年頃</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・都市内高速道路の更新工事がピーク ・環状道路の建設に伴う交差点部での渋滞が深刻化 ・都市内通過自動車の通行規制ゲート建設 ・鉄道の赤字路線を利用した物量事業が増加 ・電動自転車の普及に伴い自転車専用道（帯）が増加 ・駐車場不足に対応して路上駐車が許可され、一方通行路が増加 ・空港利用者増加に対応し、シティエアターミナルが増加 ・税込対策で信号・標識などが広告看板化 ・一定エリア内をサービスする自動タクシーが増加 ・幹線道路に大規模な大気浄化システムが設置される

5. 生活・文化分野

次世代年表

年代	A 変わらない場合	共通の事象	B ドラ化'ソク'フォースが作用した場合
~ 2010	<ul style="list-style-type: none"> ・保育施設・高齢者施設の待機者が増える。 ・子供を持たない夫婦、単身者が増加する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・東京都内、築 40 年以上のマンションが 39200 戸（約 800 棟）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育施設等の育児支援施設や介護支援施設が整備されはじめる。 ・学校や各種資格試験の受験が通信で可能になる。
~ 2020	<ul style="list-style-type: none"> ・研究者・技術者・実業家が国外流出する。 ・マンション建て替えが進まず集合住宅のスラム化が問題になる。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシェアリングが浸透する ・グループホームが多様化する。 ・業種によるサテライト化が進む。 ・早期英語教育により国際化が進む。 ・都市を集中的にゆとりある再開発を行う。
~ 2030	<ul style="list-style-type: none"> ・介護者のいない高齢者が増える。 ・都市の衰退 	<ul style="list-style-type: none"> ・65 歳以上の人口は 28% 	<ul style="list-style-type: none"> ・各都市がそれぞれ個性を持ち始める。 ・国際的観光都市に成長する。 ・海外資本も投入され、経済が活性化する。

推計方法 次世代都市整備技術研究組合（AUI）の研究活動として 2000 年 1 月から 2001 年 3 月にかけて行った分科会：「30 年後の都市未来予測」による検討結果をまとめたものである。
シナリオ・プランニングの手法を用いて、複数ケースのシナリオ（未来についての物語）を描き、さらにそのシナリオに基づいて、次世代予想年を作成した。

【都市・建築・交通】

報告書の名称	50年先の東京のあるべき姿	
編纂者	東京都都市計画審議会	
公表日	2001年4月	
予測対象期間	2050年	
予測項目		
東京都の姿	推計結果	<p>1. 50年先のあるべき姿（前提条件）</p> <p>(1) 地球レベル</p> <p>1) 人口 1990年 60億人 2025年 78億人 2050年 89億人（アジア・アフリカの都市部に集中）</p> <p>2) 国際的安定性 局地的には民族紛争が多発している可能性があるが、全体として世界的戦争はない</p> <p>3) 地球環境問題 環境技術の改善により、酸性雨、オゾン層破壊、CO2増加等の地球環境問題は危機的レベルには達していない。また、エネルギー資源も天然ガス等と新エネルギーの併用により確保されている。 バイオ革命の進展により、食糧は局所的な不足は生じているものの全体的には危機的状況にない。</p> <p>(2) 国家レベル</p> <p>1) 少子高齢化 少子高齢化により2050年人口は1億人程度まで低下</p> <p>2) 環境 環境対策の進展により、概ね日本の自然は保全されている。また、地球温暖化による影響は少なく、海面上昇など陸域を狭めるようなレベルではない。</p> <p>3) 情報 「IT革命」がすべてのシステムに変化をもたらし、ライフスタイルや雇用形態、モビリティ等が大きく変化している。</p> <p>4) 社会制度全般 社会制度（年金、介護等）は適切に運営されており、それが財政、経済、社会全体に対する制約になっていない。</p> <p>5) 広域行政、地方分権 国の政治体制の基本は変わらないが、地方分権はさらに進展し、自立的な地方自治が進む。大都市圏の広域的・一体的な連携が可能となる。</p> <p>(3) 東京圏レベル</p> <p>1) インフラ 東京圏の広域交通ネットワークは完成している。一方、東京都においては、既存基盤の維持更新、管理の重要性が高まっている。</p> <p>2) 首都機能 首都機能は引き続き東京圏で担っている。</p> <p>3) 震災 大震災発生の可能性はあるが、仮に大震災が発生した場合でも東京圏全体での首都機能の分担やハード・ソフト両面での震災対策が進み、社会的影響は少ない。</p> <p>2. シナリオ - 50年先の東京のあるべき姿（項目のみ）</p> <p>(1) 海外出張からの帰途</p> <p>1) 空から見える東京圏 2) にぎわう国際空港</p> <p>(2) 休日の過ごし方</p> <p>1) 歩いて暮らせるまち 2) 活発なコミュニティ活動 3) 都市文化を楽しむ</p> <p>(3) 多彩なビジネス活動</p> <p>1) 臨海部にある本社 2) 都心部での打ち合わせ 3) 多摩への出張</p> <p>(4) 多様なライフスタイル</p> <p>1) 郊外での生活など 2) 余暇を楽しむ</p>
	推計方法	シナリオ手法（有識者の意見をもとに、多様な要素が複雑に絡み合った将来の状況をシナリオの形に収めさせて予測する手法）による。

【都市・建築・交通】

報告書の名称	建築に関するエネルギー需要変化																																																					
編纂者	日建設計 伊加賀俊治																																																					
公表日	2002年8月																																																					
予測対象期間	2050年																																																					
予測項目	<p>工事床面積、建築関連CO2排出量</p>																																																					
推計結果	<p>1. 新築・改修工事床面積の推計</p> <ul style="list-style-type: none"> 一人当たり建築床面積（木造住宅＋非木造住宅） 1970年 20 m²/人程度 2000年 39 m²/人程度 2050年 42 m²/人程度 改築・改修工事床面積 1998年度以降の新築建物耐用年数3倍延伸（100年建築）対策の場合、毎年度の改築・改修工事床面積は2050年頃には新築工事は微量で、改修工事はかりとなる。 <table border="1" style="margin-left: 40px;"> <tr> <td></td> <td>新築工事</td> <td>改修工事</td> <td>新築工事</td> <td>改修工事</td> </tr> <tr> <td>1990年</td> <td>2.7億m²/年</td> <td>2.5億m²/年</td> <td>2050年</td> <td>0.2億m²/年 4.0億m²/年</td> </tr> </table> <p>2. 建築関連CO2排出量の推移</p> <ul style="list-style-type: none"> 無対策 2008～2012年は1990年比15%増 2050年は1990年比10%減 学会声明に対する対策が1998年から全ての建築で実践 2008～2012年は1990年比6%減 2050年は1990年比59%減 <p style="text-align: center;">我が国の建築関連CO2排出量の将来予測</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th rowspan="2"></th> <th colspan="2">建築界の対策シナリオ</th> <th rowspan="2">2010年度の 電力CO2原 単位</th> <th rowspan="2">2008-2012 年度</th> <th rowspan="2">2050年度</th> </tr> <tr> <th>対策内容</th> <th>開始年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>A</td> <td>無対策</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>1.15</td> <td>0.90</td> </tr> <tr> <td>B</td> <td rowspan="3">新築30%＋改修15%省エネ＋寿命3倍＋エ</td> <td rowspan="3">1998年度</td> <td>90年比-0%</td> <td>1.02</td> <td>0.59</td> </tr> <tr> <td>C</td> <td>90年比-10%</td> <td>0.99</td> <td>0.51</td> </tr> <tr> <td>D</td> <td>90年比-20%</td> <td>0.94</td> <td>0.41</td> </tr> <tr> <td>E</td> <td rowspan="2">コマテリアル採用</td> <td>2001年度</td> <td></td> <td>0.97</td> <td>0.42</td> </tr> <tr> <td>F</td> <td>2006年度</td> <td></td> <td>1.01</td> <td>0.45</td> </tr> </tbody> </table> <p>注：1990年度の建築関連CO2排出量（4.1億t-CO2/年）を1.0とする相対値。なお、日本のCO2排出量の1/3は建築関連となっている。</p>						新築工事	改修工事	新築工事	改修工事	1990年	2.7億m ² /年	2.5億m ² /年	2050年	0.2億m ² /年 4.0億m ² /年		建築界の対策シナリオ		2010年度の 電力CO2原 単位	2008-2012 年度	2050年度	対策内容	開始年度	A	無対策	-	-	1.15	0.90	B	新築30%＋改修15%省エネ＋寿命3倍＋エ	1998年度	90年比-0%	1.02	0.59	C	90年比-10%	0.99	0.51	D	90年比-20%	0.94	0.41	E	コマテリアル採用	2001年度		0.97	0.42	F	2006年度		1.01	0.45
	新築工事	改修工事	新築工事	改修工事																																																		
1990年	2.7億m ² /年	2.5億m ² /年	2050年	0.2億m ² /年 4.0億m ² /年																																																		
	建築界の対策シナリオ		2010年度の 電力CO2原 単位	2008-2012 年度	2050年度																																																	
	対策内容	開始年度																																																				
A	無対策	-	-	1.15	0.90																																																	
B	新築30%＋改修15%省エネ＋寿命3倍＋エ	1998年度	90年比-0%	1.02	0.59																																																	
C			90年比-10%	0.99	0.51																																																	
D			90年比-20%	0.94	0.41																																																	
E	コマテリアル採用	2001年度		0.97	0.42																																																	
F		2006年度		1.01	0.45																																																	
推計方法	<p>1. 新築・改修工事床面積の推計</p> <ul style="list-style-type: none"> 一人当たり建築床面積 人口は厚生省の中間推計、1995年度以前の値は固定資産価格等概要調査、公共施設状況調べ、日本エネルギー経済研究所データ等を使用。 2010年頃に欧米水準（フランス、イギリス、ドイツの住宅面積37～38 m²/人）に安定化すると仮定 改築・改修工事床面積 1995年度以前の値を建設省建築着工統計の工事着工予定面積、工事実施率、平均工期に基づいて推計した。 また、将来予測値は毎年度の竣工建築物が残存率曲線に従って減少すると、毎年度の建築総床面積を満足するために必要な新築面積を竣工ベースで推計した。 改修面積は、建物竣工後20年周期で何らかの改修工事が行われるものとして推計した。 <p>2. 建築関連CO2排出量</p> <p>建築用途別・構造別の新築工事CO2原単位には、1990年産業連関表を利用して推計した資本形成成分を含む国内排出原単位を用い、改修工事の原単位は新築工事の30%とした。 また、新築建物の耐用年数3倍対策として、建築資材量を1.05倍、CO2原単位の小さいエコマテリアル等の採用効果を0.9倍と見込んだ。 住宅および非住宅のエネルギー消費に伴うCO2排出量は、1994年度以前の値は環境庁が推計した民生部門の値を用い、将来推計値は、1994年度時点の床面積あたりCO2原単位に各年度のストック床面積を乗じて推計した。 また、省エネ対策の効果を、新築についてはCO2が30%または50%削減、改修については15%または25%削減と仮定した。 さらに電力事業のCO2原単位改善についても考慮した。</p>																																																					

【都市・建築・交通】

報告書の名称	国際化、情報化、高齢化、人口減少等 21 世紀の新しい潮流に対応した都市再生のあり方はいかにあるべきか - 中間とりまとめ -
編纂者	社会資本整備審議会 都市計画分科会
公表日	平成 14 (2002) 年 2 月 7 日
予測対象期間	
予測項目	
調査結果	<p>1 民間の都市活動を促す都市計画の枠組みについて</p> <p>(1) 都市計画・建築規制について</p> <p>民間による都市計画の提案制度の導入</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域住民によるまちづくりの取組や都市再生に資する民間都市開発事業者の創意工夫を都市計画に積極的に反映 ・良好な市街地の整備を実現するための新たな土地利用計画の仕組み ・用途地域に基づく規制に代えて、自由度の高い計画を定めることができる特別の都市計画制度を創設 ・地区計画制度の見直し ・再開発地区計画及び住宅地高度利用地区計画を地区計画に統合し、より分かりやすく使いやすい一般的な制度として再構築 <p>(2) 都市づくりの事業手法について</p> <p>民間の資金、ノウハウを活用する観点からの市街地再開発事業の見直し</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市街地再開発事業の施行者に、一定の要件に該当する株式会社等を追加 ・土地の健全な高度利用のための敷地の集約化 ・土地区画整理事業を活用して、敷地を集約化し、良好な街区形成が可能となる制度を創設 <p>(3) 民間都市活動を支える都市基盤施設の整備について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・優良な民間都市開発を行うための官民協働型の都市基盤施設の整備 <p>2 木造密集市街地解消のための方策について</p> <p>住民主体の防災まちづくりの推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地区防災性能の公表等による住民意識の高揚 ・公的セクター、まちづくり N P O の活用等 ・公共による重点的整備と民間活力活用による防災性向上の促進 ・木造密集市街地内の都市計画道路等の集中整備と沿道市街地の一体的形成促進による「防災環境軸」の整備等 ・木造密集市街地整備推進体制の整備 <p>3 今後の検討の進め方</p> <p>「21 世紀型都市再生のビジョン」、「次世代参加型まちづくりの方策」において、引き続き検討の予定。</p>
調査方法	<p>社会資本整備審議会都市計画分科会において、すべての市民が安全で豊かな生活を営むことができる都市整備を進めることにより、我が国の活力を維持し、国際競争力を確保するという観点から、</p> <p>民間の都市活動を促す都市計画の枠組み</p> <p>木造密集市街地解消のための方策</p> <p>を当面の課題として、6 回の審議を行い、審議の結果明らかにされた主要な課題と検討の方向性について中間的にとりまとめた。</p>

【都市・建築・交通】

報告書の名称	交通需要推計検討資料																																																																																																																																																								
編纂者	国土交通省道路局																																																																																																																																																								
公表日	平成 14 (2002) 年 11 月																																																																																																																																																								
予測対象期間	2050 年																																																																																																																																																								
予測項目	交通需要																																																																																																																																																								
推計結果	<p>1. 乗用車、貨物車将来走行台キロ</p> <ul style="list-style-type: none"> 乗用車の交通量 免許保有人口や乗用車保有台数が増加しモビリティが高まることや、乗用車の機関分担が若干高くなること、利用距離が微増し利用人数は微減などの影響から、交通量は 2030 年前後に現在の 21% 増をピークに減少する。 2000 年 515 2030 年 625 2050 年 580 (10 億台キロ / 年) 貨物車の交通量 GDP が微増するものの産業生産の高付加価値化の影響で貨物輸送量は横這いしないし微減、輸送構造が相対的に効率の良い営業用普通貨物車にシフトすることから、交通量は一貫して減少し、2040 年～2050 年には現在の約 15% 減少する。 2000 年 261 2030 年 237 2050 年 220 (10 億台キロ / 年) 全車の交通量 2000 年 776 2030 年 862 2050 年 801 (10 億台キロ / 年) <p>走行台キロの推計結果と現五箇年計画推計値との比較 (単位 : 10 億台キロ / 年)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2"></th> <th>2000 年</th> <th>2010 年</th> <th>2020 年</th> <th>2030 年</th> <th>2040 年</th> <th>2050 年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="6">今回推計値</td> <td>全車</td> <td>776</td> <td>832</td> <td>868</td> <td>862</td> <td>830</td> <td>801</td> </tr> <tr> <td>今回 / 現五計</td> <td>0.99</td> <td>0.94</td> <td>0.92</td> <td>0.91</td> <td>0.88</td> <td>0.85</td> </tr> <tr> <td>乗用車</td> <td>515</td> <td>581</td> <td>620</td> <td>625</td> <td>605</td> <td>580</td> </tr> <tr> <td>今回 / 現五計</td> <td>1.01</td> <td>0.98</td> <td>0.94</td> <td>0.95</td> <td>0.92</td> <td>0.88</td> </tr> <tr> <td>貨物車</td> <td>261</td> <td>251</td> <td>247</td> <td>237</td> <td>225</td> <td>220</td> </tr> <tr> <td>今回 / 現五計</td> <td>0.94</td> <td>0.88</td> <td>0.88</td> <td>0.84</td> <td>0.80</td> <td>0.78</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">現五計推計値</td> <td>全車</td> <td>787</td> <td>881</td> <td>943</td> <td>943</td> <td>943</td> <td>943</td> </tr> <tr> <td>乗用車</td> <td>509</td> <td>595</td> <td>661</td> <td>661</td> <td>661</td> <td>661</td> </tr> <tr> <td>貨物車</td> <td>278</td> <td>285</td> <td>282</td> <td>282</td> <td>282</td> <td>282</td> </tr> </tbody> </table> <p>2. 乗用車、貨物車将来保有台数</p> <ul style="list-style-type: none"> 乗用車の保有台数 (10 万台) 2000 年 527 2030 年 647 2050 年 581 貨物車の保有台数 (10 万台) 2000 年 197 2030 年 165 2050 年 156 全車の保有台数 (10 万台) 2000 年 724 2030 年 812 2050 年 737 <p>保有台数の推計結果と現五箇年計画推計値との比較 (単位 : 10 万台)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2"></th> <th>2000 年</th> <th>2010 年</th> <th>2020 年</th> <th>2030 年</th> <th>2040 年</th> <th>2050 年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="6">今回推計値</td> <td>全車</td> <td>724</td> <td>796</td> <td>828</td> <td>812</td> <td>777</td> <td>737</td> </tr> <tr> <td>今回 / 現五計</td> <td>0.99</td> <td>0.97</td> <td>0.93</td> <td>0.91</td> <td>0.87</td> <td>0.83</td> </tr> <tr> <td>乗用車</td> <td>527</td> <td>613</td> <td>654</td> <td>647</td> <td>620</td> <td>581</td> </tr> <tr> <td>今回 / 現五計</td> <td>1.02</td> <td>1.00</td> <td>0.95</td> <td>0.94</td> <td>0.91</td> <td>0.85</td> </tr> <tr> <td>貨物車</td> <td>197</td> <td>183</td> <td>174</td> <td>165</td> <td>157</td> <td>156</td> </tr> <tr> <td>今回 / 現五計</td> <td>0.90</td> <td>0.85</td> <td>0.85</td> <td>0.80</td> <td>0.76</td> <td>0.76</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">現五計推計値</td> <td>全車</td> <td>732</td> <td>825</td> <td>890</td> <td>890</td> <td>890</td> <td>890</td> </tr> <tr> <td>乗用車</td> <td>515</td> <td>610</td> <td>685</td> <td>685</td> <td>685</td> <td>685</td> </tr> <tr> <td>貨物車</td> <td>218</td> <td>214</td> <td>206</td> <td>206</td> <td>206</td> <td>206</td> </tr> </tbody> </table>									2000 年	2010 年	2020 年	2030 年	2040 年	2050 年	今回推計値	全車	776	832	868	862	830	801	今回 / 現五計	0.99	0.94	0.92	0.91	0.88	0.85	乗用車	515	581	620	625	605	580	今回 / 現五計	1.01	0.98	0.94	0.95	0.92	0.88	貨物車	261	251	247	237	225	220	今回 / 現五計	0.94	0.88	0.88	0.84	0.80	0.78	現五計推計値	全車	787	881	943	943	943	943	乗用車	509	595	661	661	661	661	貨物車	278	285	282	282	282	282			2000 年	2010 年	2020 年	2030 年	2040 年	2050 年	今回推計値	全車	724	796	828	812	777	737	今回 / 現五計	0.99	0.97	0.93	0.91	0.87	0.83	乗用車	527	613	654	647	620	581	今回 / 現五計	1.02	1.00	0.95	0.94	0.91	0.85	貨物車	197	183	174	165	157	156	今回 / 現五計	0.90	0.85	0.85	0.80	0.76	0.76	現五計推計値	全車	732	825	890	890	890	890	乗用車	515	610	685	685	685	685	貨物車	218	214	206	206	206	206
		2000 年	2010 年	2020 年	2030 年	2040 年	2050 年																																																																																																																																																		
今回推計値	全車	776	832	868	862	830	801																																																																																																																																																		
	今回 / 現五計	0.99	0.94	0.92	0.91	0.88	0.85																																																																																																																																																		
	乗用車	515	581	620	625	605	580																																																																																																																																																		
	今回 / 現五計	1.01	0.98	0.94	0.95	0.92	0.88																																																																																																																																																		
	貨物車	261	251	247	237	225	220																																																																																																																																																		
	今回 / 現五計	0.94	0.88	0.88	0.84	0.80	0.78																																																																																																																																																		
現五計推計値	全車	787	881	943	943	943	943																																																																																																																																																		
	乗用車	509	595	661	661	661	661																																																																																																																																																		
	貨物車	278	285	282	282	282	282																																																																																																																																																		
		2000 年	2010 年	2020 年	2030 年	2040 年	2050 年																																																																																																																																																		
今回推計値	全車	724	796	828	812	777	737																																																																																																																																																		
	今回 / 現五計	0.99	0.97	0.93	0.91	0.87	0.83																																																																																																																																																		
	乗用車	527	613	654	647	620	581																																																																																																																																																		
	今回 / 現五計	1.02	1.00	0.95	0.94	0.91	0.85																																																																																																																																																		
	貨物車	197	183	174	165	157	156																																																																																																																																																		
	今回 / 現五計	0.90	0.85	0.85	0.80	0.76	0.76																																																																																																																																																		
現五計推計値	全車	732	825	890	890	890	890																																																																																																																																																		
	乗用車	515	610	685	685	685	685																																																																																																																																																		
	貨物車	218	214	206	206	206	206																																																																																																																																																		
推計方法	<p>1. 社会経済条件の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> 人口は国立社会保障・人口問題研究所の「日本の将来人口 (平成 14 年 1 月推計)」の中位推計を使用。 2000 年 1 億 2693 万人 2025 年 1 億 2114 万人 2050 年 1 億 59 万人 GDP は 2010 年までは「構造改革と経済財政の中期展望 (平成 14 年 1 月閣議決定)」を用い、2011 年以降は労働力人口の伸びと労働生産性の伸びから求めた。 1990～2002 年平均 0.9% ～2020 年平均 1.5% 2021～2050 年平均 0.6% 免許保有者数及び乗用車保有台数 地域別、男女別、年齢階層別の免許保有人口を予測し、世帯当たりの保有台数を求めた。女性や高齢者の免許保有が高まることから免許保有人口、乗用車保有台数は増加し、2020 年頃に頭打ち、その後は減少に転じると推計される。 <p>2. 乗用車の交通量の推計方法 将来の地域別、個別属性別の人口から、発生交通量 (人) を求め、乗用車とその他の交通手段の機関分担から乗用車発生交通量を推計し、これに平均利用距離や一台当たり人数を考慮して推計。</p> <p>3. 貨物車の交通量の推計方法 将来の品目別生産額、輸入額から、発生交通量 (トン) を求め、他の交通機関との分担、貨物車の車種 (普通・小型)、業態 (営業用・自家用) 別の分担を行い、貨物車の発生交通量を推計。これに平均輸送距離や平均積載トン数を考慮し交通量を推計。</p>																																																																																																																																																								

【都市・建築・交通】

報告書の名称	航空需要予測																																																																					
編纂者	国土交通省航空局 交通政策審議会航空分科会																																																																					
公表日	平成 13 (2001) 年 12 月																																																																					
予測対象期間	2012 年 (参考値 2022 年)																																																																					
予測項目	航空輸送																																																																					
推計結果	<p>1 . 国内線</p> <table border="0"> <tr> <td>旅客</td> <td>2000 年 9,198 万人</td> <td>2012 年 12,700 万人</td> <td>2022 年 14,500 万人</td> </tr> <tr> <td>貨物</td> <td>2000 年 930 千トン</td> <td>2012 年 1,230 千トン</td> <td>2022 年 1,420 千トン</td> </tr> </table> <p>2 . 国際線</p> <table border="0"> <tr> <td>旅客</td> <td>2000 年 5,256 万人</td> <td>2012 年 8,660 万人</td> <td>2022 年 12,660 万人</td> </tr> <tr> <td>貨物</td> <td>2000 年 2,927 千トン</td> <td>2012 年 4,810 千トン</td> <td>2022 年 6,550 千トン</td> </tr> </table> <p style="text-align: center;">航空輸送の実績及び予測 (単位 : 万人、千トン)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">区分</th> <th rowspan="2">年度</th> <th rowspan="2">2000</th> <th rowspan="2">2007</th> <th rowspan="2">2012</th> <th colspan="2">年平均伸び率 (%)</th> <th colspan="2">(参考値)</th> </tr> <tr> <th>00-07</th> <th>07-12</th> <th>2017</th> <th>2022</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">国内線</td> <td>旅客</td> <td>9,198</td> <td>10,730</td> <td>12,700</td> <td>2.2</td> <td>3.4</td> <td>13,720</td> <td>14,500</td> </tr> <tr> <td>貨物</td> <td>930</td> <td>1,080</td> <td>1,230</td> <td>2.2</td> <td>2.6</td> <td>1,330</td> <td>1,420</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">国際線</td> <td>旅客</td> <td>5,256</td> <td>6,750</td> <td>8,660</td> <td>3.6</td> <td>5.1</td> <td>10,570</td> <td>12,660</td> </tr> <tr> <td>貨物</td> <td>2,927</td> <td>3,860</td> <td>4,810</td> <td>4.0</td> <td>4.5</td> <td>5,640</td> <td>6,550</td> </tr> </tbody> </table>							旅客	2000 年 9,198 万人	2012 年 12,700 万人	2022 年 14,500 万人	貨物	2000 年 930 千トン	2012 年 1,230 千トン	2022 年 1,420 千トン	旅客	2000 年 5,256 万人	2012 年 8,660 万人	2022 年 12,660 万人	貨物	2000 年 2,927 千トン	2012 年 4,810 千トン	2022 年 6,550 千トン	区分	年度	2000	2007	2012	年平均伸び率 (%)		(参考値)		00-07	07-12	2017	2022	国内線	旅客	9,198	10,730	12,700	2.2	3.4	13,720	14,500	貨物	930	1,080	1,230	2.2	2.6	1,330	1,420	国際線	旅客	5,256	6,750	8,660	3.6	5.1	10,570	12,660	貨物	2,927	3,860	4,810	4.0	4.5	5,640	6,550
旅客	2000 年 9,198 万人	2012 年 12,700 万人	2022 年 14,500 万人																																																																			
貨物	2000 年 930 千トン	2012 年 1,230 千トン	2022 年 1,420 千トン																																																																			
旅客	2000 年 5,256 万人	2012 年 8,660 万人	2022 年 12,660 万人																																																																			
貨物	2000 年 2,927 千トン	2012 年 4,810 千トン	2022 年 6,550 千トン																																																																			
区分	年度	2000	2007	2012	年平均伸び率 (%)		(参考値)																																																															
					00-07	07-12	2017	2022																																																														
国内線	旅客	9,198	10,730	12,700	2.2	3.4	13,720	14,500																																																														
	貨物	930	1,080	1,230	2.2	2.6	1,330	1,420																																																														
国際線	旅客	5,256	6,750	8,660	3.6	5.1	10,570	12,660																																																														
	貨物	2,927	3,860	4,810	4.0	4.5	5,640	6,550																																																														
推計方法	<p>1 . 国内航空旅客需要予測の前提条件 : メインモデル (他に離島モデルもある)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゾーン 全国 214 ゾーン ・データ 全国幹線旅客純流動調査 2000 年、航空旅客動態調査 1999 年 ・GDP 「政府経済見通し」、「構造改革と経済財政の中期展望について」(平成 14 年 1 月 25 日閣議決定)、参考資料 (内閣府作成) 及び国土交通省推計より 2001 年度 -1.0%、2002 年度 0.0%、2003 年度 0.6%、2004/2005 年度 1.5%、2006 年度 1.6%、2007 ~ 2010 年度 1.9%、2011 年度 ~ 2015 年度 1.5%、2016 年度 ~ 2020 年度 1.3%、2021/2022 年度 1.0% ・人口 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」(平成 14 年 1 月) の中位推計 ・航空ネットワーク 既設空港 2000 年 10 月時刻表を基に設定 新設空港 能登、中部、新北九州、神戸、静岡、百里の空港が 2007 年度までに併用 アクセス鉄道 仙台空港アクセス鉄道が 2007 年度までに併用 ・鉄道ネットワーク 既設路線 2000 年 10 月時刻表を基に設定 整備新幹線 盛岡 ~ 八戸 (フル)、石動 ~ 金沢 (スーパー)、新八代 ~ 西鹿児島 (フル)、品川新駅が、2007 年度までに併用 品川新駅の併用に伴う東海道新幹線の増加本数 4 本 / 時 整備新幹線 八戸 ~ 新青森 (フル)、長野 ~ 富山 (フル)、博多 ~ 新八代 (フル) の整備区間が、2012 年 ~ 2017 年度に併用 ・道路ネットワーク 既設 2000 年時点での高速道路ネットワーク 新設 高規格幹線道路の整備計画区間が 2007 年度までに併用開始 ・LOS (時間、運賃) 2000 年 10 月時刻表を基に設定 ・容量制約 羽田 2007 年 : 275,000 回 / 年、2012 ~ : 407,000 回 / 年 伊丹 ジェット枠 250 便 / 日 神戸 20,000 回 / 年 <p>2 . 国際航空旅客予測の前提条件</p> <ul style="list-style-type: none"> ・GDP 国内と同じ ・実質県内総生産 GDP を基に算出した全国の実質国内総生産をコントロールトータルして、人口変化率により人口増減に伴う経済規模の増減を反映させた方法で推計した。 ・為替レート 130 円 / US ドル ・海外の GDP アジア 9 カ国・アメリカの GDP を設定 ・人口 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」(平成 14 年 1 月)、「都道府県別の将来推計人口 (平成 14 年 3 月)」の中位推計 ・航空サービス 将来の航空サービスを国内、国際ともに 2000 年 10 月時点をベースに反映 ・鉄道サービス 将来の鉄道サービスは 2000 年 10 月時点をベースに反映 ・高規格幹線道路 2007 年頃までに整備計画区間が併用 ・その他 ソウルトランジット利用経路の設定を行った 																																																																					

【都市・建築・交通】

報告書の名称	港湾取扱貨物量試算結果について																																																																													
編纂者	国土交通省港湾局 交通政策審議会港湾分科会																																																																													
公表日	平成 14 (2002) 年 6 月 24 日																																																																													
予測対象期間	2007 年 (参考値 2012 年)																																																																													
予測項目	<p>港湾取扱貨物量</p> <p>推計結果</p> <p>港湾取扱貨物量 (基本ケース)</p> <p>・総貨物量 (万 ft) 2000 年 316,412 2007 年 346,000 2012 年 362,400</p> <p>・外貨貿易量 (万 ft) 2000 年 111,883 2007 年 125,700 2012 年 138,300</p> <p>・内貿貨物量 (万 ft) 2000 年 204,529 2007 年 220,300 2012 年 224,100</p> <p style="text-align: center;">港湾取扱貨物量の実績及び需要予測試算値</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th rowspan="2"></th> <th rowspan="2">1990 年 実績</th> <th colspan="2">(速報値)</th> <th colspan="2">(参考値)</th> <th colspan="3">年平均伸び率 (%)</th> </tr> <tr> <th>2000 年 実績</th> <th>2007 年 試算</th> <th>2012 年 試算</th> <th>1990- 2000</th> <th>2000- 2007</th> <th>2007- 2012</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>総貨物量 (万 ft)</td> <td>325,178</td> <td>316,412</td> <td>334,700 ~ 346,000</td> <td>338,300 ~ 362,400</td> <td>-0.3</td> <td>0.8 ~ 1.3</td> <td>0.2 ~ 0.9</td> </tr> <tr> <td>外貿 (万 ft)</td> <td>96,877</td> <td>111,883</td> <td>115,500 ~ 125,700</td> <td>121,100 ~ 138,300</td> <td>1.5</td> <td>0.5 ~ 1.7</td> <td>0.9 ~ 1.9</td> </tr> <tr> <td>外貨コンテナ 個数 (万 TEU)</td> <td>736</td> <td>1,266</td> <td>1,500 ~ 1,680</td> <td>1,850 ~ 2,200</td> <td>5.6</td> <td>2.5 ~ 4.1</td> <td>4.2 ~ 5.5</td> </tr> <tr> <td>内貿 (万 ft)</td> <td>228,301</td> <td>204,529</td> <td>219,200 ~ 220,300</td> <td>217,200 ~ 224,100</td> <td>-1.1</td> <td>1.0 ~ 1.1</td> <td>-0.2 ~ 0.3</td> </tr> <tr> <td>うち内貿コ ンテナロード (万 ft)</td> <td>100,406</td> <td>90,638</td> <td>101,000 ~ 102,000</td> <td>101,000 ~ 106,000</td> <td>-1.0</td> <td>1.6 ~ 1.7</td> <td>0.0 ~ 0.8</td> </tr> <tr> <td>実質 GDP の 伸び (%)</td> <td>5.3</td> <td>2.3</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>1.4</td> <td>0.2 ~0.9</td> <td>0.6 ~1.7</td> </tr> <tr> <td>人口 (万人)</td> <td>12,361</td> <td>12,693</td> <td>12,773</td> <td>12,711</td> <td>0.3</td> <td>0.1</td> <td>-0.1</td> </tr> </tbody> </table> <p>1990 年の内貿ユニットロードの実績値には、RO/RO 及びコンテナを含まない。 将来試算値は 2000 年速報値をもとに算定。 2007 年及び 2012 年については、下段が基本ケース、上段が参考ケース。</p>								1990 年 実績	(速報値)		(参考値)		年平均伸び率 (%)			2000 年 実績	2007 年 試算	2012 年 試算	1990- 2000	2000- 2007	2007- 2012	総貨物量 (万 ft)	325,178	316,412	334,700 ~ 346,000	338,300 ~ 362,400	-0.3	0.8 ~ 1.3	0.2 ~ 0.9	外貿 (万 ft)	96,877	111,883	115,500 ~ 125,700	121,100 ~ 138,300	1.5	0.5 ~ 1.7	0.9 ~ 1.9	外貨コンテナ 個数 (万 TEU)	736	1,266	1,500 ~ 1,680	1,850 ~ 2,200	5.6	2.5 ~ 4.1	4.2 ~ 5.5	内貿 (万 ft)	228,301	204,529	219,200 ~ 220,300	217,200 ~ 224,100	-1.1	1.0 ~ 1.1	-0.2 ~ 0.3	うち内貿コ ンテナロード (万 ft)	100,406	90,638	101,000 ~ 102,000	101,000 ~ 106,000	-1.0	1.6 ~ 1.7	0.0 ~ 0.8	実質 GDP の 伸び (%)	5.3	2.3	-	-	1.4	0.2 ~0.9	0.6 ~1.7	人口 (万人)	12,361	12,693	12,773	12,711	0.3	0.1	-0.1
	1990 年 実績	(速報値)		(参考値)		年平均伸び率 (%)																																																																								
		2000 年 実績	2007 年 試算	2012 年 試算	1990- 2000	2000- 2007	2007- 2012																																																																							
総貨物量 (万 ft)	325,178	316,412	334,700 ~ 346,000	338,300 ~ 362,400	-0.3	0.8 ~ 1.3	0.2 ~ 0.9																																																																							
外貿 (万 ft)	96,877	111,883	115,500 ~ 125,700	121,100 ~ 138,300	1.5	0.5 ~ 1.7	0.9 ~ 1.9																																																																							
外貨コンテナ 個数 (万 TEU)	736	1,266	1,500 ~ 1,680	1,850 ~ 2,200	5.6	2.5 ~ 4.1	4.2 ~ 5.5																																																																							
内貿 (万 ft)	228,301	204,529	219,200 ~ 220,300	217,200 ~ 224,100	-1.1	1.0 ~ 1.1	-0.2 ~ 0.3																																																																							
うち内貿コ ンテナロード (万 ft)	100,406	90,638	101,000 ~ 102,000	101,000 ~ 106,000	-1.0	1.6 ~ 1.7	0.0 ~ 0.8																																																																							
実質 GDP の 伸び (%)	5.3	2.3	-	-	1.4	0.2 ~0.9	0.6 ~1.7																																																																							
人口 (万人)	12,361	12,693	12,773	12,711	0.3	0.1	-0.1																																																																							
推計方法	<p>【外貨貿易の需要予測試算方法】</p> <p>外貨貨物の推計については、水平分業化の影響、海外 GDP の影響を考慮した競争型モデル等による推計 (ミクロ推計) を品目別に行うとともに、多地域における資本・労働の移動を考慮した多地域間応用一般均衡モデル (マクロ推計) を用いることによりミクロ推計の妥当性の確認を行い、その結果、ミクロ推計の結果を採用することにした。また、コンテナ貨物量の予測は、ミクロ推計により予測された将来外貿貨物量、およびトレンドから別途予測した将来のコンテナ化率から将来コンテナ貨物量を推計し、更に別途予測した将来のトランシップ貨物を加算することにより推計した。</p> <p>【内貿貨物の需要予測試算方法】</p> <p>内貿貨物の需要予測試算については、平成 12 年度に運輸政策審議会総合部会長期輸送需要予測小委員会において用いられた手法に、最新のデータ及び社会経済フレームを適用して行った。予測手法の概要は次のとおりである。</p> <p>推計にあたっては、以下に示す四段階推定法を用いる。なお、海運の内数として、内貿ユニットロード貨物量についても推計する。</p> <p>社会経済フレームを用いて、将来の物流量を算定する。</p> <p>物流センサス (貨物流動の実態データ) の結果を用い、全国を 50 地域に分けて地域別の貨物の出荷量、入荷量を予測する。</p> <p>さらに、その貨物がどの地域からどの地域まで運ばれるのかを予測する。</p> <p>各地域間を運ばれる貨物について、運賃、時間等を考慮してどの輸送機関によって運ばれるかを予測し、海運の輸送量を推計する。</p> <p>【社会経済フレームの設定】</p> <p>・ GDP の伸び</p> <p>基本ケース 「平成 14 年度の経済見通しと経済財政運営の基本的態度 (平成 13 年 12 月 19 日閣議了解)」「構造改革と経済財政の中期展望」(平成 14 年 1 月 25 日閣議決定) 同参考資料 (内閣府作成) 及び国土交通省推計 (平成 14 年) による。</p> <p>参考ケース 「平成 14 年度の経済見通しと経済財政運営の基本的態度」、「構造改革と経済財政の中期展望」の「構造改革が仮に実行されない場合」の推計及び国土交通省推計 (平成 14 年) による。</p> <p>・ 人口</p>																																																																													

	<p>国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成14年1月）」の中位推計値</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海外実質経済成長率 2010年まで <ul style="list-style-type: none"> 合衆国「Session Review, Budget of the United States Government, Fysical Year 2002」 大統領府管理予算局(2001年8月) その他「アジア経済1999（経済企画庁1999年6月）」、「経済審議会報告書（経済企画庁1998年7月）」 2010年以降 <ul style="list-style-type: none"> 「2020年の世界経済（OECD1997）」の低成長シナリオ <ul style="list-style-type: none"> ・為替レート 現状値を参考に設定 130円/ドル ・運賃レベル 相対的な運賃レベルは将来も変わらないものとして設定
--	--

【都市・建築・交通】

報告書の名称	次世代内航海運ビジョン ～ 21世紀型内航海運を目指して～	
編纂者	次世代内航海運懇談会	
公表日	平成 14 (2002) 年 4 月	
予測対象期間	2010 年	
予測項目		
内航海運	推計結果	<p>1．国内海運の輸送分担率の向上とモーダルシフトの推進 内航海運の国内貨物輸送量（トンキロベース）に占める割合 1998年 4.1% 2010年 4.4%</p> <p>参考：内航海運の事業規模 許可事業者数 3,753 事業者 許可船腹数 4,953 隻、367 万総トン 総売上高 1 兆 7,500 億円 （鉄鋼、石油、セメント等の産業基盤物資の輸送の 8 割を占める）</p> <p>2．環境保全への寄与 CO2 排出量 100 万トン（炭素換算）削減 （CO2 排出量はトラックの 5 分の 1）</p>
	推計方法	国土交通省からの依頼により、次世代内航海運懇談会が、10回にわたり検討した成果である。

【技術】

報告書の名称	第7回技術予測調査 - 我が国における技術発展の方向性に関する調査 - 「資源・エネルギー分野」	
編纂者	文部科学省科学技術政策研究所科学技術動向センター	
公表日	2001年7月	
予測対象期間	予測期間は、2001年から2030年までの30年間	
予測項目		
資源	調査結果	<p><重要度の高い上位10課題：実現予測時期> (鉱物資源)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. LCAの観点に立った都市ゴミから有価物の合理的な回収利用法の実用化：2014年 2. マンガン団塊等重金属泥、熱水鉱床、コバルト・クラフト等の深海底金属資源を経済的に採取する技術が実用化：2022年 3. 水素またはメタン等を用いて燃料消費量が現在の半分以下の製鉄技術が実用化：2018年 4. サブミクロン以下の極薄金属箔の製造技術が開発：2012年 5. アルカリ金属またはアルカリ土金属のリサイクルが国内で普及：2017年 6. 高分子物質等の有機物系の電気伝導体が銅やアルミニウムの一部におきかわる：2015年 7. 人工衛星による鉱物資源賦存量の半定量的予測技術が開発される：2016年 8. 組織制御によって高強度銅等の新機能材料が実用化される：2015年 9. 400 mまでの耐熱および深度15kmを基本仕様とする超深度試錐掘削技術が実用化される：2019年 10. 銅および貴金属の採取率が選鉱-乾式精錬プロセス並み(例、85%×98% 83%)の湿式精錬技術が普及する：2015年 <p>(水資源)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 迅速な水害、土砂災害予測情報が提供できるような精度の良い降雨予測技術が確立する：2013年 2. 下水道等の排水処理において、リン化合物や窒素化合物などの通常の汚濁物質に加え、内分泌かく乱物質等さらに広範囲な汚濁物質を除去する技術が普及する：2016年 3. 河川、湖沼等の環境改善に資するとともに水利用を促進するための水質浄化技術が広範囲に実用化される：2013年 4. 気候変動による異常降水(豪雨、小雨)現象の生起についての知見が得られ、降雨特性の変化に対し水資源確保のための対策が広くとられるようになる：2017年 5. 発ガン性および内分泌かく乱性を持つ微量水質汚染物質に関する精度の良い環境影響予測技術が開発される：2015年 6. 地震災害等に対して耐久性の高い新素材を用いた水道管やその施工技術が普及する：2013年 7. ダム機能の長寿命化、若返りを図るため、流送土砂をダム貯水池に堆砂させないで適正な量を下流に流したり、堆積した土砂を効率的に排除する技術が普及する：2014年 8. スーパー堤防や新素材の利用により、越水しても破堤しない構造の堤防が普及する：2014年 9. 下水および排水の処理技術が進歩し、団地や小規模な事業所等における再生水利用が普及する：2013年 10. 地下水流動や地下水位分布観測技術が発達し、地下水の保全と適正利用が広く行われる：2017年
エネルギー	調査結果	<p><重要度の高い上位20課題：実現予想時期></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 高レベル放射性廃棄物の固化体の処分技術が実用化される：2021年 2. 環境性の良い高効率可搬型電源(電気自動車電源等)として燃料電池が普及する：2015年 3. 廃棄物選別回収システムが構築され、新たな経済尺度・基準に基づき再生した原料や再生品を生産・流通・消費する循環システムが普及する：2016年 4. メタンハイドレードの採掘技術が実用化される：2022年 5. 変換効率20%以上の大面積薄膜太陽電池が実用化される：2015年 6. ガソリン自動車なみの走行性能を有する電気自動車が普及する：2018年 7. 自動車用高エネルギー密度(200Wh/kg：鉛電池の5倍程度)の二次電池(Ni/MH電池、Li電池等)が普及する：2015年 8. 家庭用固体高分子型燃料電池のコジェネレーション利用が普及する：2017年 9. 現在の平均的な住宅に比べて冷暖房エネルギー消費が半分以下の省エネルギー住宅が普及する：2016年 10. 分散型電源を需要側で有効に使うために、電力貯蔵技術を有効に使ったエネルギー管理技術が実用化される：2014年 11. 高効率ガスタービン(入口温度1700℃以上)による大型複合サイクル発電が実用化される：2015年 12. 二次電池を用いた電力の負荷平準化のための電力貯蔵設備が実用化される：2015年 13. 核燃料サイクルを含めたFBR(高速増殖炉)システムが実用化される：2031年以降 14. 住宅電力供給用に太陽電池が普及する：2014年 15. クリーンエネルギーを水素等のエネルギー媒体に転換して輸送する国際的エネルギー供給システムが実用化される：2027年

	<p>16. 地域コジェネレーション用および分散型電気事業用として数十MW級固体電解質型燃料電池が実用化される：2018年</p> <p>17. 核融合発電炉が開発される：2031年以降</p> <p>18. 企業における環境会計の概念およびシステムが普及する：2010年</p> <p>19. 非化石性の水素を用いて、石炭やバイオマスからメタン、メタノールあるいはDME（ジメチルエーテル）などの合成燃料を製造する技術が実用化される：2018年</p> <p>20. 熱化学分解法によるエネルギー用水素製造プロセスが実用化される：2022年</p>
調査方法	<p>科学技術政策研究所に技術予測委員会を、(財)未来工学研究所に技術予測委員会の委員を主査とする14技術系分科会並びに3ニーズ系分科会を設置した。技術予測委員会では、調査計画、実施方針など全般的な事項の検討及び調査結果の全分野横断的な検討を行った。技術系分科会では、担当の技術分野について、課題の設定、調査対象者の選出、調査結果の分析などを行い、ニーズ系分科会では、今後30年間の将来像を想定した社会・経済ニーズの抽出などを行った。調査はデルファイ法により行い、2回のアンケート調査により回答を収れんさせた。第1回アンケート対象者4,448名、第2回アンケート対象者3,809名。</p>

【技術】

報告書の名称	第7回技術予測調査 - 我が国における技術発展の方向性に関する調査 - 「農林水産・食品分野」	
編纂者	文部科学省科学技術政策研究所科学技術動向センター	
公表日	2001年7月	
予測対象期間	予測期間は、2001年から2030年までの30年間	
予測項目		
農林水産・食品	調査結果	<p><重要度の高い上位20課題：実現予測時期></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 作物(稲を例として)の全DNAの塩基配列が決定され、有用遺伝子が単離される：2008年 2. 主要漁業資源の再生産過程が明らかになるとともに長期(10年～20年)変動予測が可能となり、適正な資源管理技術が実用化される：2024年 3. 内分泌かく乱化学物質の毒性発現メカニズムならびに生殖機能、行動、脳機能、免疫機能等に及ぼす影響が解明され、ヒトと家畜への安全限界が設定される：2015年 4. 遺伝子組換え農作物の安全性を食品・環境の両面で検討し、消費者にも理解してもらえる評価手法が開発される：2011年 5. 食品安全行政が一元化されるとともに、広範に食品の安全を議論し、その結果が行政に活かされる場が設置される：2009年 6. ダイオキシンなどの内分泌かく乱化学物質を分解する菌を、多孔質木炭などの担体に固定化して河川の水質を浄化するプラントが開発される：2015年 7. 森林およびその機能(生物多様性維持、環境浄化、景観や快適性の供与等)を保全しつつ、森林を適正に利用するための技術体系と制度が実用化される：2017年 8. 高齢者に特有の抗酸化機能、脳機能、咀嚼機能の低下を防ぎ、健康な高齢社会を食から支える食品が開発される：2012年 9. 霞ヶ浦等の閉鎖水域の汚染に対して、生物や生態系の機能を利用して戦前のレベルまで浄化する環境修復技術が普及する：2018年 10. 生物学的な方法(天敵生物、フェロモン、アレロパシー等の利用)を主とした作物保護の技術体系により、化学合成農薬の利用が半減する：2015年 11. 生分解性の素材を利用した露地栽培用マルチフィルム、漁具等の農林漁業資材や包装容器が普及する：2011年 12. 局地的気象観測システムおよび、冷害、水害、干害、風害等の被害を低減させる技術システムが普及する：2015年 13. 農業生産物および農業副産物を利用したバイオマスエネルギーの利用技術が普及する：2014年 14. 土壌の微生物相の制御等の生物学的方法によって、作物の連作障害回避技術が実用化される：2016年 15. 医薬品等有用物質の動物培養細胞による効率的生産技術が開発される：2011年 16. タンパク質の一次構造から高次構造を正確に推定し、生理活性機能を持つ立体構造を自由にデザインできる技術が開発される：2016年 17. 土壌中に固定されている不可給態リンを微生物等の利用により溶解し作物に吸収させる技術が普及する：2014年 18. 解像度の高いリモートセンシング技術の進歩により、地球規模の農林水産資源や農林水産環境の情報を常時提供するシステムが実用化される：2013年 19. 家畜排泄物や食品廃棄物などからバイオガスを生成し、これを燃料電池として使用するエコ発電システムが普及する：2015年 20. 個人の体質に応じて、生活習慣病の予防が可能となる機能性食品が普及する：2015年
	調査方法	<p>科学技術政策研究所に技術予測委員会を、(財)未来工学研究所に技術予測委員会の委員を主査とする14技術系分科会並びに3ニーズ系分科会を設置した。技術予測委員会では、調査計画、実施方針など全般的な事項の検討及び調査結果の全分野横断的な検討を行った。技術系分科会では、担当の技術分野について、課題の設定、調査対象者の選出、調査結果の分析などを行い、ニーズ系分科会では、今後30年間の将来像を想定した社会・経済ニーズの抽出などを行った。調査はデルファイ法により行い、2回のアンケート調査により回答を収れんさせた。第1回アンケート対象者4,448名、第2回アンケート対象者3,809名。</p>

【技術】

報告書の名称	第7回技術予測調査 - 我が国における技術発展の方向性に関する調査 - 「都市・建築・土木分野」	
編纂者	文部科学省科学技術政策研究所科学技術動向センター	
公表日	2001年7月	
予測対象期間	予測期間は、2001年から2030年までの30年間	
予測項目		
都市・建築・土木	調査結果	<p><重要度の高い上位20課題：実現予測時期></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 高レベル放射性廃棄物の処分技術が実用化される：2021年 2. 地殻の歪みの分布や過去の地震履歴の分析等により、中期的(5～10年程度先)な大規模地震(M8以上)の発生を予測する技術が日本で実用化される：2026年 3. 地震検知の全国ネットワークが構築され、50km程度以上離れた地震に関して地震到達前に情報が伝達される防災システムが日本で普及する：2016年 4. 巨大地震発生時の構造物や地盤の挙動を正確にシミュレートする技術が日本で普及する：2012年 5. 局地的な気象の予報に基づき、河川、道路等における災害による人的被害を大幅に減少させる、警報・予報・避難・規制システムが日本で普及する：2012年 6. 大都市における大規模な地震、火災時のパニック防止のため、社会心理学、行動心理学に基づく災害予報、情報伝達システムが実用化される：2014年 7. 商用原子力発電所の廃止措置に対応できる、安全でかつ合理的な解体撤去技術が日本で実用化される：2015年 8. 非破壊検査により、既存構造物の基礎構造の健全性を調査し、合理的な耐震補強をする技術が日本で普及する：2012年 9. 開発が生態系に与える影響のメカニズムが明らかになり、自然との共存(生態系の保全や生物生息空間の創造等)を目的とした開発技術が日本で普及する：2019年 10. 自然災害発生時に都市基盤施設・ネットワークの被害状況をリアルタイムでモニタリングする技術が日本で開発される：2012年 11. CO₂、NO_x、フロン等を、主発生源である都市部において吸収・固定化するアクティブ環境浄化施設が日本で普及する：2018年 12. バイオテクノロジーを活用して、難分解性物質や有害物質を高効率に処理できる、コンパクトな排水処理システムが日本で普及する：2015年 13. コミュニティ単位での未利用エネルギーの活用や廃棄物その他のリサイクルが日本で普及する：2014年 14. 上下水道、電気、ガス等のライフラインの防災性を向上するための遠隔監視、制御システムが日本で普及する：2011年 15. 地域づくりや社会資本の整備・管理に対する国民の参加が進み、その過程で国民が自らの役割を果たすことにより充足感を覚えるようなシステムが日本で普及する：2015年 16. 河川、ダム等の水の広域総合管理技術が確立され、日本の大都市圏において水資源を有効利用するシステムが普及する：2014年 17. 汚染・汚濁が進行した大都市圏近傍の閉鎖系海域に、各種浄化施設、海水交換施設等を建設し、海域を浄化する技術が日本で実用化される：2016年 18. 構造物の安全性・耐久性などの定量的な評価に基づいて、構造物の性能を保証・確保する設計法が日本で普及する：2011年 19. 建築物や土木構造物の耐久性を大幅に向上させるため、コンクリートや鋼材の長期耐用技術(100年以上)が日本で実用化される：2013年 20. 国際的プロジェクトの契約・施工全般に関する国際基準が世界的に普及する：2012年
	調査方法	<p>科学技術政策研究所に技術予測委員会を、(財)未来工学研究所に技術予測委員会の委員を主査とする14技術系分科会並びに3ニーズ系分科会を設置した。技術予測委員会では、調査計画、実施方針など全般的な事項の検討及び調査結果の全分野横断的な検討を行った。技術系分科会では、担当の技術分野について、課題の設定、調査対象者の選出、調査結果の分析などを行い、ニーズ系分科会では、今後30年間の将来像を想定した社会・経済ニーズの抽出などを行った。調査はデルファイ法により行い、2回のアンケート調査により回答を収れんさせた。第1回アンケート対象者4,448名、第2回アンケート対象者3,809名。</p>

【技術】

報告書の名称	第7回技術予測調査 - 我が国における技術発展の方向性に関する調査 - 「交通分野」	
編纂者	文部科学省科学技術政策研究所科学技術動向センター	
公表日	2001年7月	
予測対象期間	予測期間は、2001年から2030年までの30年間	
予測項目		
交通	調査結果	<p><重要度の高い上位20課題：実現予測時期></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 大型貨物自動車の排ガスの有害成分を1/10に低下させるため、ディーゼル用排気触媒、パティキュレートトラップ、リーンNOx触媒や高精度燃焼技術などの排気対策技術が普及する：2011年 2. 燃料電池(Fuel Cell)を搭載した、電気自動車が普及する：2014年 3. 自動車のリサイクル技術が進んで、廃車のごみ問題が解決する：2015年 4. ITS技術を応用した衝突防止システムにより、交通事故死者数が半減する：2015年 5. プレート境界地震の初期微動を適切な箇所で見出し、(予測される地震動に対応する)破壊危険箇所を避けて列車を安全に停止させるシステムが開発される：2014年 6. 省エネや環境改善のため、方向別交通量等を把握して最適な交通流を実現する都市内道路交通管理システムが普及する：2012年 7. 高齢者や障害者が気軽かつ安全に日常生活圏を自由に移動できる公共交通機関と環境が整備される：2015年 8. FRP船の、機械的粉砕、焼却、薬物等による、安全で簡易な廃棄処理技術が実用化される：2013年 9. エンジン、トランスミッション、消音装置、タイヤおよび路面の改良等によって、大型貨物自動車の騒音が現在の普通乗用車なみに改善される：2014年 10. レール、車輪への新材料の利用や構造物、車両構造の技術改善により、新幹線において、時速350kmで騒音の環境基準(住宅地で70デシベル以下)を満たした連続走行が可能となる：2014年 11. コンピュータ技術の進歩により、航空管制が大幅に自動化され、現在の半分程度にまで省力化されたシステムが実用化される：2014年 12. 公共交通や道路交通に関するリアルタイムの情報の利用により、パークアンドライド方式をはじめとして、異種交通機関の乗り換え利用が促進される：2011年 13. 労働力不足への対応および安全性向上のため、ロボット技術等の利用により、車両、構造物、線路、電車路等の検査・保守の効率化・自動化が普及する：2012年 14. 外海で60年程度の使用に耐える3000メートル級の滑走路を持つ浮体式海上空港が実用化される：2013年 15. 透水性道路舗装が普及し、地下水の涵養、ヒートアイランドの抑制等都市環境が改善される：2011年 16. 船舶の安全基準等を定めるために、過去の事故データや災害シミュレーションにより船舶の客観的な安全評価手法が確立される：2012年 17. 大規模製品データベースを中心に、ネットワーク上にインテリジェントな設計生産モジュールが分散配置された造船システムが実用化され、現在と同量の船舶が半分の人手で建造されるようになる：2013年 18. 東京湾内航路等の混雑域で、漁船・プレジャーボート等を含めたすべての船舶が管制下におかれ、安全かつスムーズに運航されるような海上交通管制システムが実用化される：2013年 19. 電車等において回生エネルギーの蓄積や変電所のピーク時負荷軽減を図るため、フライホイールや燃料電池などの車載用エネルギー装置が実用化される：2014年 20. 船舶のライフサイクルに渡る安全管理を可能にするための、船舶の板厚計測、クラックの検出や進展予測等のメンテナンス技術が実用化される：2012年
	調査方法	<p>科学技術政策研究所に技術予測委員会を、(財)未来工学研究所に技術予測委員会の委員を主査とする14技術系分科会並びに3ニーズ系分科会を設置した。技術予測委員会では、調査計画、実施方針など全般的な事項の検討及び調査結果の全分野横断的な検討を行った。技術系分科会では、担当の技術分野について、課題の設定、調査対象者の選出、調査結果の分析などを行い、ニーズ系分科会では、今後30年間の将来像を想定した社会・経済ニーズの抽出などを行った。調査はデルファイ法により行い、2回のアンケート調査により回答を収れんさせた。第1回アンケート対象者4,448名、第2回アンケート対象者3,809名。</p>

【技術】

報告書の名称	第7回技術予測調査 - 我が国における技術発展の方向性に関する調査 - 「情報・通信分野」	
編纂者	文部科学省科学技術政策研究所科学技術動向センター	
公表日	2001年7月	
予測対象期間	予測期間は、2001年から2030年までの30年間	
予測項目		
情報・通信	調査結果	<p><重要度の高い上位20課題：実現予測時期></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 悪質なハッカーの攻撃から個人や集団のプライバシーや機密が保護されるような信頼度の高いネットワークシステムが普及する：2010年 2. 一月2000円以下で大容量ネットワーク(150Mbps)を自由に利用できる環境が実現する：2009年 3. ソフトウェア検証技術が進み、誤りのない大規模ソフトウェアの短期開発が可能となる：2019年 4. 地震検知システムに連動し、非直下型地震の地震波到達までの時間を利用して人命の安全確保を図るビルディング統合管理システムやホームセキュリティシステムが実用化される：2016年 5. 機密保護と認証を実現するセキュリティ技術により、印鑑(署名)なしで契約書等の各種文書がネットワークを介してオンラインで作成できるサービスが普及する：2010年 6. 手帳サイズの携帯端末を用いて世界中どこからでもマルチメディア通信ができるシステムが普及する：2008年 7. ディスプレイを含むパソコンの新製品において再利用の部品数が90%を超える：2012年 8. 1本の光ファイバあたり1Peta bps以上の大容量伝送を可能とする光伝送システムが開発される：2013年 9. 関連企業間における情報管理(受注、設計、製造・運用・保守)を統一的に取り扱うSCM(Supply Chain Management)システムが普及する：2008年 10. 数十Gbpsのスループットを実現する超高速コンピュータ通信プロトコルが開発される：2009年 11. 悪性ウイルスを自動検知し、これに対処するワクチンを自動生成する技術が開発される：2013年 12. 屋外使用時の通信速度が30Mbpsの移動通信端末が普及する：2011年 13. 世界中どこからでも通話可能な携帯端末が普及する：2007年 14. ネットワーク上におけるマルチメディアソフトの著作権、プライバシー保護等の情報通信倫理に関わる不法行為を自動的に監視するセキュリティ技術が普及する：2012年 15. オフィスの仕事の大部分が電子化・ネットワーク化され、企業規模に関わらず大部分の企業において、ペーパーレスに加えて業務効率向上が実現する：2011年 16. 届出、手続き等に関してネットワークによる役所の窓口サービスが普及する：2009年 17. 光信号を電気信号に変換しないで光のまま交換する光交換機が実用化される：2011年 18. 様々な言語によって書かれたウェブ上のページ群の大半を自国語で読める多言語自動翻訳機能をもつブラウザが開発される：2011年 19. 1個のボタン電池で1年間使える低電力パソコンが普及する：2016年 20. 金銭の授受を行うための電子マネーが従来のお金と同様な感覚で使われるまでに普及する：2013年
	調査方法	<p>科学技術政策研究所に技術予測委員会を、(財)未来工学研究所に技術予測委員会の委員を主査とする14技術系分科会並びに3ニーズ系分科会を設置した。技術予測委員会では、調査計画、実施方針など全般的な事項の検討及び調査結果の全分野横断的な検討を行った。技術系分科会では、担当の技術分野について、課題の設定、調査対象者の選出、調査結果の分析などを行い、ニーズ系分科会では、今後30年間の将来像を想定した社会・経済ニーズの抽出などを行った。調査はデルファイ法により行い、2回のアンケート調査により回答を収めさせた。第1回アンケート対象者4,448名、第2回アンケート対象者3,809名。</p>

【技術】

報告書の名称	エネルギー分野の技術戦略マップの検討状況（策定にあたっての考え方）				
編纂者	資源エネルギー庁（超長期エネルギー技術研究会・超長期エネルギー技術戦略研究会）				
公表日	平成 17（2005）年 7 月				
予測対象期間	2100 年				
予測項目					
エネルギー量 CO2 原単位	推計結果	2000	2030	2050	2100
	1. 産業				
	・製造量×製品の価値	1 倍		1.5 倍	2.1 倍
	・必要エネルギー量	-	20%削減	30 削減	50%削減
	・物質・エネルギー再生率		50%	60%	80%
	・高機能化（強度等） （機能/物質量）	1 倍	2 倍	3 倍	4 倍
	製造量×製品の価値の伸びで必要エネルギー量が增大すると想定した値からの削減率				
	2. 家庭・業務				
	・全必要エネルギー量	2000 1 倍	2030	2050 1.5 倍	2100 2.1 倍
	・外部に依存する 必要エネルギー量 （家庭/業務）		45% / 35%	60% / 55%	80% / 80%削減
	・CO2 原単位 （家庭）	3.5t-CO2/世帯（1 倍）	1.9（1/2 倍）	1.1（1/3 倍）	0
	（業務）	18kg-CO2/m2（1 倍）	77（2/3 倍）	40（1/3 倍）	0
	全必要エネルギー量の伸びで必要エネルギー量が增大すると想定した値からの削減率				
	3. 運輸				
	・効用（人・km、トン・km）	2000 1 倍	2030	2050 1.5 倍	2100 2.1 倍
	・必要エネルギー量 （運輸全体）		20%削減	50%削減	70%削減
	・自動車 必要エネルギー量		30%削減	60%削減	80%削減
	電化・水素化率	0%	1%以上	40%	100%
	CO2 原単位	160g-CO2/km（1 倍）	100(2/3 倍)	50（1/3 倍）	0
	・航空機・船舶・鉄道 必要エネルギー量		10%削減	20%削減	30～40%削減
	効用の伸びで必要エネルギー量が增大すると想定した値からの削減率				
	4. 転換				
	・需要端での全エネルギー需要 （最大ケース）	2000 1 倍	2030	2050 1.5 倍	2100 2.1 倍
	・電化・水素化率	1 倍		2 倍	4 倍
	・CO2 原単位	370g-CO2/kWh （1 倍）	270 (2/3 倍)	120 (1/3 倍)	0 #
	# CCS 併用化石燃料使用時 110g-CO2/kWh（1/3 倍）				
推計方法	<p>効用（経済活動量、生活の質）を落とすのではなく人類が豊になるとの前提で、資源制約、環境制約を、技術の開発・利用によって長期的に解決するために、技術に求められる将来の姿を描き出した。2100 年から逆算（バックキャスト）することにより、必要となる技術スペック、時期等を整理した。主な条件は次のとおりである。</p> <p>経済成長：日本の GDP は 2050 年で 2000 年の 1.5 倍、2100 年で同 2 倍程度 （世界の GDP は 2050 年で 2000 年の 3 倍程度、2100 年で 10 倍程度）</p> <p>資源制約：世界の石油生産のピークは 2050 年、天然ガス生産のピークは 2100 年</p> <p>環境制約：GDP 当たりの CO2 排出原単位を、2050 年に 1/3、2100 年に 1/10 以下</p>				

【技術】

報告書の名称	情報通信技術（ICT）サービスの環境効率事例収集及び算定基準に関する検討成果報告書																																																			
編纂者	（社）産業環境管理協会																																																			
公表日	平成 16（2004）年 3 月																																																			
予測対象期間	2010 年																																																			
予測項目	<p>エネルギー消費量、CO2 排出量</p> <p>推計結果</p> <p>1. マクロ的解析 (1) ICT 普及による社会全体のエネルギー消費削減量 ・IT のエネルギー消費量 2000 年 106PJ 2010 年 163PJ (57PJ 増加) ・IT 活用によるエネルギー削減量 2000 年 106PJ 2010 年 611PJ (505PJ の増加) ・2010 年の社会のエネルギー削減量 (=IT 活用によるエネルギー削減量 - IT のエネルギー消費量変化量) 448PJ (2) ICT 普及による環境影響評価 (CO2 排出量) ・2010 年での ICT 普及による CO2 削減量 3,600 万トン-CO2 (そのうち ICT アプリケーションの社会普及による削減量 2,000 万トン-CO2) IT 活用によるエネルギー消費削減</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">サービス分類</th> <th rowspan="2">定式化項目</th> <th colspan="2">エネルギー消費削減量(PJ)</th> </tr> <tr> <th>2001 年推計値</th> <th>2010 年予測値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>個人向け EC(BtoC)</td> <td>中間流通の不要化 / 小売販売の不要化 / 在庫スペースの削減 / 販売物流の削減 / 返品物流の削減 / 過剰生産の抑制 / 消費者移動の削減 / コンビニ利用者の移動手段の削減</td> <td>28</td> <td>100</td> </tr> <tr> <td>法人向け EC(BtoB)</td> <td>人・鉄道移動・自動車移動の削減 / 卸売り中抜き / 会計効率化 / 物流効率化不必要生産の抑制 / 中間流通の効率化 / 小売流通の効率化 / 建物の削減 / 倉庫建物の削減 / 販売・返品物流の削減 / 自動車部品・産業機械・建設機械・電子機器の削減</td> <td>59</td> <td>394</td> </tr> <tr> <td>官庁向け(GtoB)</td> <td>自動車移動の削減</td> <td>0.0</td> <td>0.3</td> </tr> <tr> <td>ITS</td> <td>渋滞削減 / インフラ整備 / 車載電子機器</td> <td>5</td> <td>21</td> </tr> <tr> <td>情報伝達の電子化</td> <td>中間流通の不要化 / 小売販売の不要化 / 在庫スペースの不要化 / 小売店舗の不要化 / 販売物流の削減 / 返品物流の削減 / 媒体生産の削減</td> <td>0.2</td> <td>39</td> </tr> <tr> <td>テレワーク・遠隔会議・遠隔管理</td> <td>テレワークによる通勤・オフィス利用の削減 / 遠隔会議による交通手段の削減 / 自販機遠隔管理</td> <td>14</td> <td>57</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td></td> <td>106</td> <td>611</td> </tr> <tr> <td></td> <td>内訳</td> <td>物流・流通の効率化</td> <td>35</td> <td>232</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>人の流れの削減</td> <td>36</td> <td>100</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>生産の効率化</td> <td>36</td> <td>279</td> </tr> </tbody> </table> <p>(注) 個人向け EC : オンライン販売、コンビニでのネットサービスなど 法人向け EC : サプライチェーンマネジメント、リユース市場の IT 化など 官庁向け EC : 電子入札 ITS (高速道路交通システム) : VICS システム 情報伝達の電子化 : 書籍、音楽系、映像系、PC ソフト</p>			サービス分類	定式化項目	エネルギー消費削減量(PJ)		2001 年推計値	2010 年予測値	個人向け EC(BtoC)	中間流通の不要化 / 小売販売の不要化 / 在庫スペースの削減 / 販売物流の削減 / 返品物流の削減 / 過剰生産の抑制 / 消費者移動の削減 / コンビニ利用者の移動手段の削減	28	100	法人向け EC(BtoB)	人・鉄道移動・自動車移動の削減 / 卸売り中抜き / 会計効率化 / 物流効率化不必要生産の抑制 / 中間流通の効率化 / 小売流通の効率化 / 建物の削減 / 倉庫建物の削減 / 販売・返品物流の削減 / 自動車部品・産業機械・建設機械・電子機器の削減	59	394	官庁向け(GtoB)	自動車移動の削減	0.0	0.3	ITS	渋滞削減 / インフラ整備 / 車載電子機器	5	21	情報伝達の電子化	中間流通の不要化 / 小売販売の不要化 / 在庫スペースの不要化 / 小売店舗の不要化 / 販売物流の削減 / 返品物流の削減 / 媒体生産の削減	0.2	39	テレワーク・遠隔会議・遠隔管理	テレワークによる通勤・オフィス利用の削減 / 遠隔会議による交通手段の削減 / 自販機遠隔管理	14	57	合計		106	611		内訳	物流・流通の効率化	35	232			人の流れの削減	36	100			生産の効率化	36	279
サービス分類	定式化項目	エネルギー消費削減量(PJ)																																																		
		2001 年推計値	2010 年予測値																																																	
個人向け EC(BtoC)	中間流通の不要化 / 小売販売の不要化 / 在庫スペースの削減 / 販売物流の削減 / 返品物流の削減 / 過剰生産の抑制 / 消費者移動の削減 / コンビニ利用者の移動手段の削減	28	100																																																	
法人向け EC(BtoB)	人・鉄道移動・自動車移動の削減 / 卸売り中抜き / 会計効率化 / 物流効率化不必要生産の抑制 / 中間流通の効率化 / 小売流通の効率化 / 建物の削減 / 倉庫建物の削減 / 販売・返品物流の削減 / 自動車部品・産業機械・建設機械・電子機器の削減	59	394																																																	
官庁向け(GtoB)	自動車移動の削減	0.0	0.3																																																	
ITS	渋滞削減 / インフラ整備 / 車載電子機器	5	21																																																	
情報伝達の電子化	中間流通の不要化 / 小売販売の不要化 / 在庫スペースの不要化 / 小売店舗の不要化 / 販売物流の削減 / 返品物流の削減 / 媒体生産の削減	0.2	39																																																	
テレワーク・遠隔会議・遠隔管理	テレワークによる通勤・オフィス利用の削減 / 遠隔会議による交通手段の削減 / 自販機遠隔管理	14	57																																																	
合計		106	611																																																	
	内訳	物流・流通の効率化	35	232																																																
		人の流れの削減	36	100																																																
		生産の効率化	36	279																																																

IT のエネルギー消費			
分類	定式化項目	エネルギー消費量(PJ)	
		2001	2010
情報通信ネットワーク	交換機、ターミナルアダプター、DSU など	67	101
情報通信端末	電話、FAX、PC 等	39	62
合計		106	163

IT エネルギー消費の総合評価	
	変化量(PJ)
IT 活用によるエネルギー削減量変化(2010年-2001年)	505
IT のエネルギー消費量変化量(2010年-2000年)	57
社会のエネルギー削減量 = IT 活用によるエネルギー削減量変化 - IT のエネルギー消費量変化量	448

ICT 普及の環境影響評価の結果(有効数字2桁)		
	CO2 増減(万トン-CO2)	増減割合(%)
電力需要の増加	+1,800	+1.5
経済構造の変化(ICT 関連産業の拡大)	-3,400	-2.9
ICT アプリケーションの社会普及	-2,000	-1.7
合計	-3,600	-3.1

IT システムの社会普及の環境影響評価結果(有効数字2桁)		
	CO2 増減(万トン-CO2)	増減割合(%)
BtoC E コマース	-4.0	-0.0
SCM	-1,200	-1.1
物流効率化	-440	-0.36
業務効率化による紙削減	-29	-0.03
情報電子化	+3	+0.0
テレワーク	-290	-0.25
合計	-2,000	-1.7

2. ミクロ解析

- ・ 日立による行政機関用電子申請システム：ファクター()7.9 の改善
- ・ NTT によるテレビ会議：ファクター6.8 の改善
- ・ 富士通による企業用人事・総務申請・決済システム：ファクター1.4 の改善、CO2 排出量 28% 削減
- ・ NEC によるインターネットショッピングシステム
インターネット活用による書籍販売：ファクター1.8 の改善、CO2 排出量 43% 削減
ソフトウェア販売：ファクター5.9~7.7 改善、CO2 排出量 83~87% 削減
- ・ 松下電器の電子書籍：ファクター2.5 の改善
ファクター = (対象とするサービスの環境効率) / (基準となるサービスの環境効率)

推計方法

1. ICT 普及による社会全体のエネルギー消費削減量
2010 年までの日本全体での情報通信サービスや民生系通信関連機器の電力消費量を 3 つのシナリオを作成して検討した。
シナリオ 1 (ICT 社会への進展が著しい)
超高速アクセス(光)：6000 万、第 3 世代移動体：7000 万、従来型移動体：1300 万、SI 系サーバー：130 万台、など
シナリオ 2 (と の中間)
超高速アクセス(光など)：4000 万、高速アクセス(ADSL など)：1000 万、第 3 世代移動体：7000 万、従来型移動体：1100 万、SI 系サーバー：100 万台など
シナリオ 3 (ICT 社会への進展が緩やかな場合)
超高速アクセス(光など)：2000 万、高速アクセス(ADSL など)：2000 万、第 3 世代移動体：4050 万、従来型移動体：4050 万、SI 系サーバー：70 万台など
2. ICT 普及による環境影響評価(CO2 排出量)
応用一般均衡モデルと呼ばれるマクロ経済分析手法による試算

【ライフスタイル】

報告書の名称	生活・地域ワーキング・グループ報告書 - 政策の選択と集中で成熟した国民生活と多様な地域社会を目指す -																								
編纂者	生活・地域ワーキング・グループ																								
公表日	平成 17 (2005) 年 4 月																								
予測対象期間	2030 年																								
予測項目	生活・地域																								
推計結果	<p>要旨：人口が減少する中で、利用者の選択が尊重される市場機能の活用、地域の創意工夫、政策の選択と集中などにより、社会の中の競争と安心、自己責任の確立と異質性の尊重などがバランスよく実現された成熟した国民生活と多様な地域社会を目指す。</p> <p>1. 豊かで多様な生活に必要なサービス 新たな「三種の神器（生活サービス）」が出現し、これらを積極的に活用することにより、豊かで多様な生活が実現する。 ・質の高い健康サービス 健康管理のための総合的なサービスが提供されるようになり、年齢にかかわらず健康を維持できるようになる。 ・年齢にかかわらず誰でも楽しめる生涯学習サービス 画一的ではない個人の選択に基づく生涯学習サービスが充実し、若年期だけでなく生涯にわたり、スキルアップを図るとともに、多様な教養を多くの人々が楽しめるようになる。 ・夫婦が共同で子育てを行うためのサービス 利用者の置かれた状況に対応した子育てに関する様々なサービスが利用可能となり、親族の支援のない共働き世帯でも子育てが容易にできるとともに、多くの子供を育てることが社会的にも評価されるようになる。</p> <p>2. 「80 歳健康大国」 ・「健康寿命」 経済社会の持続的発展を根幹から支える基盤の強化に向け、平均寿命のみならず、すでに世界最高となっている「健康寿命」 - 生活と健康の質を考慮して心身共に健康で自立している期間 - を 80 歳に延ばす。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>2002 年</th> <th>2030 年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>健康寿命 (平均寿命)</td> <td>75.0 歳 (81.8 歳)</td> <td>80 歳程度 (84.0 歳)</td> </tr> </tbody> </table> <p>(注) いずれも男女の単純平均。 ・労働者の生涯可処分時間 個人の生活は、健康寿命の延長などにより、自由に活動できる時間(可処分時間)が約 12 % (年率約 0.64%) 増加し、「時持ち」が健康で教養豊かな長寿を楽しむ高齢社会のモデルとなる。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>2002 年</th> <th>2030 年</th> <th>備考</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>労働者の生涯 可処分時間</td> <td>18 万 3000 時間程度 (20.9 年)</td> <td>20 万 5400 時間程度 (23.4 年程度)</td> <td>・健康寿命延長 ・61～65 歳労働時間はパート タイマ-並 (1,184 時間) ・大学院などへ 2 年間在学</td> </tr> </tbody> </table> <p>(注) 括弧内は、可処分時間を 24 (時間) × 365 (日) で割り年換算したもの。更に 2030 年の年間労働時間 (2002 年現在：1,954 時間) が、2002 年の欧米並み (1,726 時間) に移行したと想定した場合は 21 万 3,600 時間 (24.4 年) となり、約 17% 増加する。</p> <p>3. 「人間力」の向上を目指す教育の姿 ・自己責任能力を養成する観点から、教育システムにおいて、個人の基礎的な能力形成とともに、学力・職業能力、更に倫理・教養といった人間関係を形成する力など、「人間力」の向上を目指す。 ・高等教育においては、学生のキャリアアップに役立ち、その学校で習得したことがよりよい仕事につながっていく、より実践的な人材育成を重視する。特に、仕事や家庭との両立を望むパートタイムの学生が参加しやすい環境整備と、多様な専門職大学院などの発展により、年齢にかかわらず再挑戦できる社会が実現する。こうしたことにより、大学院在学者は社会人が増加し、現在の米国並みの水準へと約 4 倍に増加することを見込む。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>2004 年</th> <th>2030 年</th> <th>備考</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>人口千人当たりの 大学院在学者数</td> <td>1.99 人</td> <td>8 人程度</td> <td>米国 (2000 年) の人口千人当たりの大学院在学者数：7.66 人</td> </tr> </tbody> </table> <p>(注) 2004 年の数値には、通信教育による大学院在学者を含むが、それ以外のパートタイムの在学者は統計がないため含んでいない。</p> <p>4. 楽しみながら子育てができる社会環境の形成</p>				2002 年	2030 年	健康寿命 (平均寿命)	75.0 歳 (81.8 歳)	80 歳程度 (84.0 歳)		2002 年	2030 年	備考	労働者の生涯 可処分時間	18 万 3000 時間程度 (20.9 年)	20 万 5400 時間程度 (23.4 年程度)	・健康寿命延長 ・61～65 歳労働時間はパート タイマ-並 (1,184 時間) ・大学院などへ 2 年間在学		2004 年	2030 年	備考	人口千人当たりの 大学院在学者数	1.99 人	8 人程度	米国 (2000 年) の人口千人当たりの大学院在学者数：7.66 人
	2002 年	2030 年																							
健康寿命 (平均寿命)	75.0 歳 (81.8 歳)	80 歳程度 (84.0 歳)																							
	2002 年	2030 年	備考																						
労働者の生涯 可処分時間	18 万 3000 時間程度 (20.9 年)	20 万 5400 時間程度 (23.4 年程度)	・健康寿命延長 ・61～65 歳労働時間はパート タイマ-並 (1,184 時間) ・大学院などへ 2 年間在学																						
	2004 年	2030 年	備考																						
人口千人当たりの 大学院在学者数	1.99 人	8 人程度	米国 (2000 年) の人口千人当たりの大学院在学者数：7.66 人																						

- ・子育てには、家庭の責任だけでなく社会的な扶養も重要であるという観点から、「育児保険」創設の検討を含め、適正な自己負担を前提とした上で様々な公的支援策を統合する。
- ・効率的な中古住宅市場の整備などにより、持家と借家との居住サービスに差がなくなり、持家という呪縛から解放されることから、家族構成の変化などに応じた住み替えが容易となる。借家に住む世帯（4人家族）当たりの平均延べ面積が、現在の持家並みの水準になることを目指すことにより、ゆとりある子育て環境が実現される。

	1998年	2030年	備考
関東大都市圏の4人家族の借家1戸当たりの平均延べ面積	59㎡ (全国の4人家族の借家1戸当たりの平均延べ面積)	100㎡程度	関東大都市圏の持家1戸当たりの平均延べ面積(2003年): 104㎡

(注)「関東大都市圏」とは、東京都特別区、千葉市、さいたま市、川崎市、横浜市、及び周辺市町村をいう。

5. 自立的な共(つながり)の構築

- ・増加し続ける引きこもり、フリーター、ニートなど社会的につながりやを欠いた人たちに対しては、多様な価値観を持つ他人との緩やかな関係である社会的な共(つながり)を広げることにより、就業への働きかけなどを通じて、社会との適切な連携を築く。
- ・NPOなど行政以外の主体による公益的活動の発展に向け、徹底したNPOの情報公開を前提とした上で、寄付控除の拡大や納税額の一定割合を助成する制度などにより、「寄付文化」が形成される。こうしたことにより、納税者の不公平感や無力感を解消し、成熟した「参加型民主主義」を実現する。

	2003年	2030年	備考
家計支出に占める寄付金の割合	0.54%	2.5%程度	米国(2000年)の家計支出に占める寄付金の割合: 2.26%

(注)寄付金には、総務省「家計調査」における「寄附金」及び「信仰・祭祀費」を用いた。

6. 透明で公正な競争社会の実現

- ・有期雇用や派遣労働などの多様な働き方を、長期雇用と対等に社会が評価するなど、雇用機会の均等を一層推進することにより、働く意思と能力を持つ人材が最大限に活用されるようになる。
- ・世帯主年間収入のジニ係数は、高齢化進展に伴い、0.30(1999)から0.32程度(2025年)に高まる(格差が拡大する)中で、働く意欲の低下した低所得者がその社会階層に固定化しないよう、将来に対する希望の格差が拡大しない社会を形成する。そのため、労働市場における雇用機会の均等、同一労働・同一賃金の原則確保とともに、個人の間力・職業能力の向上、更に社会的な共(つながり)を組み合わせることにより、格差が生じてもそこから脱却することが容易であるやり直しが可能な社会を目指す。

7. 都市と地方の新しいビジョン

- ・2030年には総人口が約935万人(約7.4%)減少する中で、地域政策の集中と選択を進める。人口が安定的に推移する地域では、「コンパクトなまちづくり」がより一層促進される。人口が著しく減少する地域(過疎地域やゴーストタウン化が懸念されるニュータウンなど)では、集落の統合や外部からの居住者受け入れにより、コミュニティが維持可能な地域などへの人口の集約が進む。

人口が著しく減少すると見込まれる地域 (2000年 2030年)	<ul style="list-style-type: none"> ・地方中核・中枢都市の1時間圏外(20%減) ・人口規模3万人未満の市町村(20%減) ・高齢化が進む大都市圏の郊外
-------------------------------------	--

- ・農村地域においては、地域の主体性の下での個性・多様性を発揮することを目指すとともに、中山間地域における農地としての利用が困難な土地については、国土保全、自然環境保全などの公益的機能を持つ山林への転換を誘導する。

8. 地方分権の推進と「地域間競争時代」への転換

- ・地方分権の推進と自主財源の充実により、「現場の判断」が最優先される「地域の主体性」が確立する。そうした中で、市町村は、離島や広大な面積を持つ過疎地域を除いた30万人規模人口の地域を前提とし、直接、住民に対するサービスの提供に関わる行政責任を負う。特に、効率性と責任の所在の明確化のため、「1サービス、1行政機関」の原則を推進する。
- ・地方自治体における情報公開と説明責任が徹底し、自治体間の公正で透明な競争が進む。こうしたことにより、地域サービスの受益と税負担を比較した上で、住む地域をある程度自由に選択する「足による投票」が容易となる。

9. 地域社会の再生に向けた住民・企業・行政のパートナーシップの構築

- ・文化資本は、地域再生のグランドデザインを描く上で有力な手段である。特に地元住民、観光客、関連事業者などの文化活動に対する投資意欲の向上などにより、「文化資本立国」が実

	<p>現される。・社会資本の整備については、公共事業における選択と集中が進む。また、公的助成は必要最小限のみとし残りは市場で資金調達する手法を選択することにより、「市民型公共事業」が進む。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・治安の再生について、地域社会や民間事業との適切な役割分担の下に、警察機能の強化が図られ、犯罪に強い街づくりが進む。 ・インターネット技術は、高齢者や障害者の社会進出を支援するなど、個性豊かで創意工夫あふれる地域社会を創り上げる有効な手段となる。また、生活者の視点に立った技術革新が続けられることにより、地域社会の活性化や安全・安心につながっていく。 ・外国人に対する医療保障の確保、外国人の子どもへの教育機会の確保などにより、地域社会レベルでの国際化が進む。
推計方法	<p>経済財政諮問会議では、2004年9月に「日本21世紀ビジョン」に関する専門調査会を設けた。専門調査会の下には、「経済財政展望」「競争力」「生活・地域」「グローバル化」の4つのワーキング・グループが設けられ、広範な課題について精力的に審議が行われた。</p> <p>生活・地域ワーキング・グループ（主査：八代尚宏日本経済研究センター理事長）は、2004年9月以降、生活・地域の観点から2030年の経済社会のビジョンについて10回にわたる審議を重ね、自由闊達に掘り下げた議論を行った。本報告はその成果について当ワーキング・グループの議論を踏まえ、主査の下で取りまとめたものである。</p>

【ライフスタイル】

報告書の名称	2025年の日本の姿	
編纂者	厚生労働省「2025年の社会の姿ワーキングチーム」	
公表日	2002年6月14日	
予測対象期間	2025年	
予測項目		
日本の社会の姿	推計結果	<p>2025年の日本の姿（要約）</p> <p>1. 社会経済</p> <p>日本の総人口は減少。平均余命が伸長し、高齢化率は上昇。出生率は依然低迷するが（本報告書で描いたような社会が現実に達成されれば）上昇傾向。一方、都市部の人口はほとんど変化なし。</p> <p>マクロ経済は安定成長。一人当たりの国民所得は上昇。</p> <p>（供給側）女性、高齢者、学生が労働力化し、労働力人口の減少は比較的緩やか。あわせて、科学技術の進歩やIT化の一層の進展により生産性も向上。国内生産は維持。</p> <p>（需要側）持続可能な社会保障制度の確立など将来に対する安心感から、過剰な貯蓄が消費に回り一人当たりの消費量が増加。あわせて、一層の高付加価値化により国際競争力を高め海外需要が拡大。</p> <p><現状認識></p> <ul style="list-style-type: none"> ・出生率は更に減少し、高齢化率は一層上昇。 ・経済はゼロ成長又は若干のマイナス成長。失業率が高止まり。治安が悪化。 ・将来に対する不安から、過剰な貯蓄が生じ、消費が低迷。 <p>2. 価値観・生活スタイル</p> <p>性別、年代を問わず、結婚するかしないか、子どもを持つか持たないかは本人の自由という意識が浸透するとともに、子どもを産み育てることは社会全体で支えるものという認識が高まる。</p> <p>男女の役割分業意識はほぼなくなり、夫婦による家事、育児の分担が一般化。</p> <p>仕事優先という考え方が少なくなり、それに伴い、家族とのふれあい、趣味、地域活動などに充てる時間が増加。</p> <p>親子のふれあいが、子どもの人間性を高めるという考え方から、家庭の機能が見直され、家庭学習や親子での地域活動などが盛んに。</p> <p>子育て期間中も、自らの趣味や夫婦だけの時間を大切にしている人が増える。</p> <p>高校卒業後は、親から自立し、働きながら学ぶことが一般的に。その結果、若者の就労意欲が高まる。</p> <p><現状認識></p> <ul style="list-style-type: none"> ・男女の役割分業意識はなくなりつつあるものの、依然として、男は仕事、女は家庭（家事、育児）という意識が強いいため、女性の社会参画が制限的。また家庭における教育やしつけは母親任せ。 ・仕事かプライベートかといえば、社会的には「仕事優先」が求められている。 ・大学生時代の学費や生活費は、親にみてもらう人が多い。その結果、子どもには自立心が養われないし、親も子育て費用に重い負担感。社会に出てからも自立できないフリーターやパラサイトシングルが増加。 ・誰も結婚し、子どもを持つものという考え方や結婚適齢期という考え方が根強い。 <p>3. 社会保障全般</p> <p>社会保障負担が勤労意欲や経済活力を阻害しない程度の水準で安定し、持続可能で安定的な社会保障制度が確立。</p> <p>児童・家庭に対する社会保障給付の割合が増加。</p> <p>社会保障制度の個人単位化が進むとともに、被用者保険の適用が大幅に拡大し、就労の選択に中立的に。</p> <p>各個人の保険料納付記録や給付に関する情報を提供できるようになることにより、その人の生活スタイルに合わせて若い頃から老後までの生活設計が容易に。</p> <p>一人当たり国民所得の増加により、国内外の様々な資産に投資するなど、私的な老後への備えが進み、高齢者になっても公的年金等に依存する割合は減少。</p> <p><現状認識></p> <ul style="list-style-type: none"> ・年金制度の持続可能性に対する不信感があり、将来に対する不安、世代間の不公平感が強い。 ・児童・家庭に対する社会保障給付はわずか。 <p>4. 子育て支援</p> <p>多様な働き方の普及に伴って、保育所の預かり時間が弾力化。</p> <p>年間を通じて入所が容易になるとともに、一時預かり、在宅保育など多様な保育サービスが充実。多様な就業時間に的確に対応。子どもの急な病気時に良質な保育を行うサービス（病児保育）も充実。また、これらのサービスを専業主婦や育児休業中の親も外出などの際に利用。</p> <p>育児に関する相談、情報提供の充実により、育児不安が解消。</p> <p>地域のボランティアによる子育て支援活動が活発化。</p> <p><現状認識></p> <ul style="list-style-type: none"> ・延長保育は増えているが、就業時間の多様化などに十分対応できない状態。遠方の長時間保育

	<p>を行う保育園へ送り迎えする親が多い。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・専業主婦や育児休業中の親など育児に付きっきりの親は、育児の悩みを一人でかかえてしまったり、気分転換ができず苦悩。 ・子どもの病気が長引くと長期間の休暇を取らざるを得ない状況。 <p>5．雇用管理及び働き方</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>(雇用管理)</p> <p>同一企業、同一職種における時間当たり賃金は、能力や成果を反映したものとなり、フルタイムやパートといった1日の勤務時間による違いはなくなる。</p> <p>子育てに対する職場内での理解が進み、男女問わず、育児休業や子どもの看護休暇、勤務時間の短縮などの制度が利用しやすくなる。</p> <p>労働者が育児期間中に短時間勤務を選択しやすいよう、午前・午後のようなシフト制などを取り入れるとともに、派遣労働の活用や退職者の再雇用などで代替要員を確保。</p> <p>(働き方)</p> <p>男女問わず、個人のライフスタイルに応じた多様な働き方の選択が可能。</p> <p>労働市場の整備により、転職や再就職が容易になる。</p> <p>価値観の変化を反映し、夫婦の働き方として、育児期間中を中心に、共にフルタイム(2人分)で働くのではなく、夫婦で1.5人分の働き方を選択するケースが増加。</p> <p>夫婦共にフルタイムの場合も、どちらかが在宅勤務を活用するケースも増加。</p> <p>多様な働き方の普及により、高齢者の雇用の場が拡大。</p> </div> <p><現状認識></p> <ul style="list-style-type: none"> ・時間外労働も含めた労働時間が長く、家族との時間がもてない。 ・働き方として、フルタイムの正規社員でなければ、パートタイムの非正規社員しかなく、労働条件(給与・社会保険・福利厚生等)にも大きな格差があるため、 (1)夫婦の働き方として、「夫が仕事、妻が家事・育児=1人分」又は「夫婦共働き=2人分」のどちらかの限定的な選択に。 (2)高齢者が生活スタイルに合わせて意欲的に働くことができる場が少ない。 ・上司や同僚に気兼ねし、育児休業や看護休暇が取りづらい雰囲気。企業側も他の労働者へのしわ寄せや代替要員の確保が困難という理由から消極的。 ・育児などでいったん退職すると正規社員としての再就職が困難。 <p>6．教育</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>少子化に伴い、私立を中心に学校間で、教育内容や学費面での差別化が進む。</p> <p>学歴ではなく物事への対応能力や人間性で人物を評価する社会に。学習の目的意識が明確になり学び方が多様化。社会人教育や生涯学習が一般化。</p> <p>大学生は働きながら学ぶことが主流となり、本人に対する奨学金制度が充実。</p> <p>小学生の遊び場と安全の確保のため、学校施設内で地域による子育て支援活動が活発化。</p> </div> <p><現状認識></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学歴偏重。全般的に学費が高い。子育てコストのうち教育費に対する負担感が強い。 ・大学生が自立しておらず、学費のみならず生活費まで親が工面。 ・小学生が安全に思いきり遊べる場所が少ない。 <p>7．住宅及び自然環境</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>(住宅)</p> <p>土地の高度利用(高層化、地下化)で都市部の地価が抑制されたことにより、1人当たりの居住面積は拡大。</p> <p>都市部では、住宅は、購入よりも家族の事情に合わせて住み替えできる賃貸が一般的。</p> <p>(自然・環境)</p> <p>下水道等の普及や汚水処理技術の向上により、都市を流れる河川の水質が改善し、自然とふれあう場となる。</p> <p>電線が地中化されるとともに、河川や運河に建設された高速道路が改修で地下化されるなど都市における景観が重視される。</p> </div> <p><現状認識></p> <ul style="list-style-type: none"> ・地価は下落しているが、サラリーマンが自宅を購入するのは未だに困難。 ・都市部を流れる河川や水路は、経済面や防災面、安全面など機能的な側面が強調されすぎており、人と自然のふれあいや景観などへの配慮がない。
推計方法	<p>本報告書は、20歳代後半から30歳代前半の厚生労働省職員で構成する「2025年の社会の姿ワーキングチーム」(以下「WT」という。)が、約2か月半の議論を経て作成したものである。作成に当たっては、各メンバーの友人関係を頼り、省外の同年代から多数の有意義な意見をいただいた。</p>

【ライフスタイル】

報告書の名称	生活大航海、未来生活への指針 ～未来生活懇談会報告書～	
編纂者	未来生活懇談会	
公表日	平成 14 (2002) 年 12 月	
予測対象期間		
予測項目		
未来生活	推計結果	<p>【未来に夢を描く】</p> <p>明るい未来生活を思い描き、その実現に向けて、高い基礎学力や豊かな自然などの強みを活かしながら思い切った構造改革を進めていけば、自分なりの「夢」を追い求めることができる社会が実現する。</p> <p>【未来生活について】</p> <p>1．美意識～多様性の共存～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・経済的には負担になる行動にも価値を見出すような、公益意識を含んだ「美意識」が生まれている。 ・お互いの「美意識」を理解し尊重するような多様性の共存が実現。 <p>2．選択～魅力的な生活の追求～ (働き方を選ぶ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会社からの拘束から解放されて、男性の長期育児休暇取得、複数の仕事の掛け持ち、職務の自己選択などの多様な働き方が可能になる。 ・同一労働同一賃金の原則の下、年齢や性別に関係なく、誰もが意欲と能力に応じ、ライフスタイルにあわせて働き方を選択できる。 <p>(活力ある地域に生きる)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の個性が魅力として評価され、特色ある地域が賑わいをみせる。 ・例：美しい自然、ケヤキ並木や黒壁の古い街並み、職住近接の先端的な研究機関、先駆的な介護・医療サービス、自治体の丁寧な情報開示、外国人の住みやすい街づくり。 <p>(楽しく学んで個性を育てる)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育内容の多様化、職業教育や体験学習の充実、学校情報の公開と評価の充実などによって学ぶ側の選択肢が拡大 ・自分の個性と自主性に応じて、社会人や高齢者を含め、誰もが学ぶことを楽しめる。 <p>(介護・育児の社会化が選択の幅を広げる)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行政だけでなく民間企業や NPO、地域コミュニティも高齢者ケアサービスや育児サービスを提供することにより、介護・育児の社会化が進む。 ・高齢者が安心して暮らせ、また夫婦そろって育児を楽しむことができる。 <p>3．安心～新しい時代のセーフティネット～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育が再挑戦の支援がセーフティ・ネットとして機能 ・行政だけでなく NPO やボランティア団体も、介護や育児、防災や防犯など担い手に ・商品やサービスの情報開示、行政の制度の透明性の確保が安全で安心な暮らしの基礎 <p>【明るい未来生活の実現に向けて】</p> <p>働き方、住まい方、学び方といった暮らし方に多様性のある、女性や子ども、高齢者、障害者など、誰でも自由に社会参加し自己実現できる、そうした生きがいがあり夢を追求できる社会の構築に向けた抜本的な対応の中に、新たな発展の芽を見出すことができる。</p>
	推計方法	<p>未来生活懇談会（人口構造の変化、IT化の進展等の時代の潮流変化を踏まえ、構造改革を通じてすべての国民が生きがいのある人生を送ることができるような「未来の生活」を実現するために、内閣官房長官と経済財政政策担当大臣の共催により開催される懇談会です。）による検討結果。</p>

【ライフスタイル】

報告書の名称	男女共同参画社会の将来像検討会報告書 男女共同参画は日本社会の希望 - 多様な価値観の下、個性を生かし、共に生きる社会へ -	
編纂者	男女共同参画社会の将来像検討会	
公表日	平成 16 (2004) 年 6 月	
予測対象期間	2020 年	
予測項目	男女共同参画社会の将来像	
	推計結果	<p>【2020 年頃の姿】</p> <p>男女共同参画社会は、多様性を価値とする 2 1 世紀社会の中心に位置すべき重要な概念であり、男女ともに全ての人にとって、個々人の資質能力が十全に開発・発揮され得る社会の構築に他ならず、個々人の選択に応じて納得のいく生き方を可能にすることを目的としている。男女共同参画が順調に推進されれば、次のような社会生活上の変化が生じて、2 0 2 0 年頃には、希望のもてる社会が訪れているであろうと推測した。</p> <p>そのような社会では、性別・年齢・国籍に関わりなく、自分らしい生き方を選択し、生を充足することができると思われる。また、充足した人々が増え、様々なネットワークが創られるとともに、個々人の自主的な選択を迷う人のためにも多様なサポートシステムが有効に機能し、社会のセーフティネットも広がり、疎外感を持つ人が減ることも期待される。</p> <p>「政策・方針決定過程の場に女性が参画すること」によって、新しい視点が提起され、様々な人の立場を考慮した政策の立案・実施が可能になる。</p> <p>「職場における性差別が解消すること」によって、女性の労働力が確保されるだけでなく、男性にとっても働きやすい職場環境が確保され、多様に富んだ職場環境が人々を活性化させることで企業活動も活発となる。</p> <p>「家庭における男女共同参画が促進されること」によって、親と子どもの関係が改善され、男女とも子どもと関わる喜びを体験し得る。また、女性の家事・育児関係の負担が軽減されて、家庭と職場との両立が可能になり、少子化にも歯止めがかかる。</p> <p>「地域社会の活動が評価されて男女共同参画が促進されること」によって、人々は職場中心の生き方だけでなく、男女とも、多様な価値観に基づいて、地域活動、ボランティア、家庭生活、学習活動等、様々な生き方を自ら選択することが可能になる。</p> <p>「国際的な動向を踏まえつつ男女共同参画を推進し、支援や発言を積極的に行うこと」によって、地球社会における男女共同参画にも貢献し、また、世界での活躍の場も広がっていく。</p> <p>【我が国の経済と社会の現状と課題】</p> <p>長期にわたった経済活動の低迷と新たな飛躍への兆し</p> <p>日本経済は、バブル崩壊後 1 0 数年の間、低迷を続けてきたが、最近では企業部門の前向きな動きが家計に波及し、新たな飛躍の段階を迎えつつある。これまでの雇用環境の悪化は女性に大きな影響を及ぼした。</p> <p>グローバル化・情報化に伴う競争激化</p> <p>90 年代前半の冷戦終結以降、中国、東欧等旧共産主義諸国の市場経済化が進展し、世界経済では市場競争が激化している。また、情報通信化も、情報通信機器やソフト・サービスの飛躍、通信インフラの拡充をもたらし、市場競争を更に激化させている。</p> <p>少子・高齢化と家族形態の変化</p> <p>日本の合計特殊出生率は、人口置換水準を大きく下回り 2020 年には 1.38(低位推計では 1.11)になると予測されている。人口が 2006 年をピークに減少を始めるとともに、65 歳以上の老年人口比率が 2025 年には 28.7%となるなど高齢化の進展も早く高水準である。単独世帯、夫婦のみ世帯が増加するなど世帯規模の縮小が継続している。</p> <p>地域社会の変化</p> <p>経済成長や都市化の進展に伴い、個人の職場、家庭、地域等への帰属意識が多様化している。地方の厳しい経済状態が続く中、人材や歴史といった多様な資源を生かし、知恵と工夫で地域の魅力・個性を発揮する必要がある。</p> <p>【男女共同参画社会形成の障壁 将来像の展望に当たっての留意事項】</p> <p>将来像の展望にあたっては、以下に掲げるような男女共同参画社会形成の障壁をいかに乗り越えていくか検討する必要がある。</p> <p>女性が活躍する機会が十分でない国日本</p> <p>性別による固定的な役割分担意識</p> <p>仕事と子育ての両立困難</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長時間労働・育児や地域社会への参加が低い男性 ・仕事と家事・育児の双方を担う女性 <p>働く場における男女間格差</p> <ul style="list-style-type: none"> ・限定的な女性の就業形態 ・処遇における男女間格差 <p>進学率・有業率における男女間格差</p> <p>ライフスタイルに中立でない制度</p>
	推計方法	男女共同参画社会の将来像検討会による検討結果。本検討会は、国民に将来の男女共同参画社会の姿を広く考えていただくための材料を提示することを目的として報告書の取りまとめを行った。男女共同参画社会基本法が制定されて約 20 年後に当たる 2020 年頃をおおよその目途に、将来の日本の目指すべき姿として、基本法が定義する男女共同参画社会の具体像を描いた。

【ライフスタイル】

報告書の名称	超高齢社会の雇用・就業システムと諸支援策に関する調査研究	
編纂者	高齢・障害者雇用支援機構	
公表日	平成 13 (2001) 年 3 月	
予測対象期間	2025 年	
予測項目		
雇用・就業システム	推計結果	<p>1. シナリオ</p> <p>(1) 焦点課題 焦点課題は「意欲と能力がある人が年齢に関わりなく、働き続けることができる社会」の実現である。焦点課題の視点は次のとおり。 働きつづけることが出来る “働きつづける”事が強制的、非消極的な強制労働であってはならないことは言うまでもない。まさに働くことに対する“意欲と能力がある人”が“働きつづける”ことが出来る社会の実現こそわれわれの目標である。それは個人に委ねられる問題であるが、それを支援する社会環境、すなわち、働くことが意義があり、挑戦的で魅力的であり、楽しいものであり、また働くことが可能な能力を開発し続けられる環境整備、支援がなされる必要がある。 年齢に関わりなく 雇用・労働の側面では定年制、年功序列、採用時の年齢制限が代表的な年齢基準施策であり慣行であるが、“能力、意欲がある人が働きつづける事が出来る”上では、年齢依存から、年齢にフリーな環境整備がもとめられることは言うまでも無い。それは同時に男女、日本人と外国人といった基準からも拘束されないまさに平等化の促進を裏面には含んでいる問題である。また同時に、それぞれの差異をまったく無視することではない。</p> <p>(2) 主要影響要因とマクロ環境 主要影響要因（キーファクター） ・エイジフリー：年齢中立性と年齢対応性 ・就労機会：就労機会の多様化と就労・勤務形態の多様化 ドライビングフォースとしてのマクロ環境 ・グローバル国際環境：グローバル国際社会（グローバル・フレンドリー社会） ・持続的安定成長の経済・企業：知識・学習社会（ラーニング・フレンドリー社会） ・永続的な地球環境保護政策：エコロジカル社会（エコロジー・フレンドリー社会） ・ハイテクの進化と積極的活用：ハイテク共生社会（ハイテク・フレンドリー社会） ・セイフティネットとしての社会保障・福祉 ：安心・快適社会（シティズン・フレンドリー社会） ・個人の選択による多様なライフスタイル ：自律・連携人社会（ヒューマン・フレンドリー社会）</p> <p>2. ビジョン</p> <p>(1) 2025 年ビジョン 2025 年、日本は世界の最先端の高齢社会であり、かつ最長寿社会であることは間違いなからう。そこに明るい夢と挑戦意欲をわかせるためには二つの神話からの脱皮が重要であろう。 “貧弱高齢者”神話からの脱皮 高齢者は体力、気力も低下した病弱者であること、経済的にも年金に依存した弱者であり、したがって社会の扶養対象者であるという神話である。健康な高齢者、裕福な高齢者、趣味豊かで活動的な“高齢者新人類”、新たなことに挑戦し、新たな学習に励み、仕事を継続している“生涯現役高齢者”の比率はますます増加しているのである。 高齢者の幸せは“ハッピーリタイアメント”、“悠悠自適”、“晴耕雨読”のみにあるという神話からの脱皮 健康のために“働ける内は働きたい”高齢者は今回のアンケート調査のみならず、多くの調査結果が示している事実である。しかし一方では、中年層には「豊かでも時間的ゆとりなし」という生活時間から、引退願望を高める傾向も見られる。日本社会はすでに“食うための労働”社会ではない。“豊かさのための労働”さらには“能力活用、開発のための労働”“自己実現のための労働”“連帯、貢献のための労働”と就労の目的は多様化している。欠乏充足のための労働から充足のための労働、言い換えれば苦しい厳しい労働から楽しい、心地よい労働への転換、Pleasant Work（朗働）への転換である。中年層にも高齢者層にも“朗働”であるためには生涯の労働配分をより平準化する、すなわち中年層の労働時間の短縮、そして高齢者層の“朗働”可能な制度づくりは欠かすことができない。 すなわちわれわれの描く 2025 年社会は“朗働長寿社会（Pleasant Work & Longevity Society）”であり、その具体化のために“エイジフリー就労社会”の実現が待たれるといえるのかも知れない。</p> <p>(2) 2025 年へ向けての（高齢者）雇用就業対策 高齢者雇用就業対策からエイジフリーな対策へ 基本としての職業能力開発促進（現行雇用・能力開発機構） 労働力需給調整機能強化</p>

	<p>協働形態の多元化促進（現行家内労働対策、シルバー人材センター） 就業形態の多様化促進（現行パートタイム労働対策、男女の均等な機会と待遇確保対策） エイジフリー化促進 解雇制限の明確化 高齢者医療、年金、福祉、介護制度の統合化 グローカル労働支援 雇用創出支援 多元的協働社会の学際的研究の促進</p>
推計方法	<p>未来予測手法としてシナリオ・ライティング法のうちシナリオ・ロジック法（帰納的シナリオ）を採用した。既存データに加え、独自のアンケート調査のデータを収集し、その調査を踏まえてシナリオを作成し、そして全体報告・検討を数回繰り返し、シナリオを完成させ、そのシナリオをベースに支援策検討、報告書作成を行った。</p>

【環境】

報告書の名称	循環型社会形成推進基本計画	
編纂者	環境省	
公表日	平成 15 (2003) 年 3 月	
予測対象期間	2010 年	
予測項目		
廃棄物	調査結果	<p>【現状と課題】</p> <p>現状：非持続的な 20 世紀型の活動様式 課題：天然資源の消費の抑制と環境負荷の低減のため、循環を基調とする社会経済システムの 実現・廃棄物問題の解決</p> <p>【循環型社会のイメージ】</p> <p>暮らし：良いものを大事に使う「スロー」なライフスタイル ものづくり：環境保全志向のものづくり・サービスの提供 廃棄物：廃棄物等の適正な循環的利用・処分システムなど</p> <p>【数値目標：2000～2010 年度】</p> <p>1. 物質フロー（マテリアル・フロー）目標</p> <p>「入口」：資源生産性 平成 22 年度：約 39 万円/トン（平成 12 年度から概ね 4 割向上） * 資源生産性 = GDP / 天然資源等投入量：如何により少ない資源で、より大きな豊かさ を得るかを表す値</p> <p>「循環」：循環利用率 平成 22 年度：約 14%（平成 12 年度から概ね 4 割向上） * 循環利用率 = 循環利用量 / （循環利用量 + 天然資源等投入量）</p> <p>「出口」：最終処分量 平成 22 年度：約 28 百万トン（平成 12 年度から概ね半減） * 最終処分量 = 廃棄物最終処分量（一般廃棄物と産業廃棄物の和）</p> <p>2. 取組目標</p> <p>廃棄物の減量化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一般廃棄物 家庭ごみ（1 人 1 日当たり、資源回収される物を除く）を平成 12 年度比で約 20%削減 事業所ごみ（1 日当たり、資源回収される物を除く）を平成 12 年度比で約 20%削減 ・産業廃棄物 産業廃棄物の最終処分量を平成 2 年度比で約 75%減 循環型社会ビジネスの推進 ・グリーン購入の推進 地方公共団体、上場企業（東京、大阪及び名古屋証券取引所 1 部、2 部）の約 50%及び 非上場企業（従業員 500 人以上）の約 30%が組織的にグリーン購入を実施 ・環境経営の推進 上場企業の約 50%及び非上場企業の約 30%が環境報告書を公表し、環境会計を実施 ・循環型社会ビジネス市場の拡大 循環型社会ビジネスの市場規模及び雇用規模を平成 9 年比でそれぞれ 2 倍に <p>【各主体の取組】</p> <p>国：各主体とのパートナーシップの育成、率先した循環型社会形成への取組 地方公共団体：法施行・コーディネーター 事業者：EPR に基づく適正な 3R・処分等 NPO・NGO：循環型社会形成への活動等 国民：ライフスタイルの見直し等</p>
	調査方法	この基本計画は、循環型社会形成推進基本法（平成 12 年法律第 110 号）第 15 条第 6 項の 規定に基づき、循環型社会形成推進基本計画を国会に報告するものである。